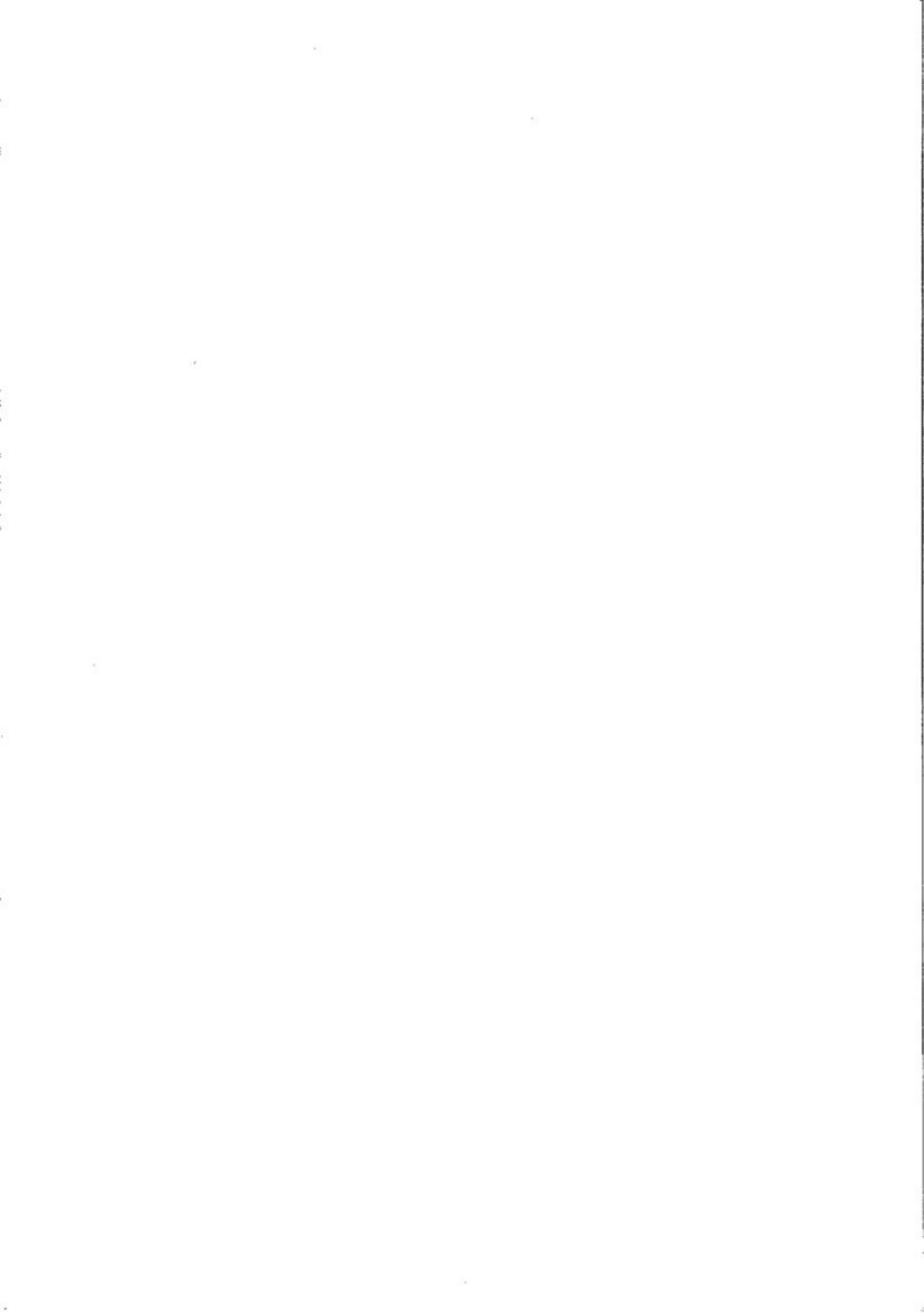


財團法人八尾市文化財調査研究会報告62

- I 跡 部 遺 跡 (第25次調査)
- II 跡 部 遺 跡 (第26次調査)
- III 跡 部 遺 跡 (第27次調査)
- IV 亀 井 遺 跡 (第 6 次調査)
- V 小 阪 合 遺 跡 (第36次調査)
- VI 心 合 寺 山 古 墳 (第 2 次調査)
- VII 志 紀 遺 跡 (第 4 次調査)
- VIII 田 井 中 遺 跡 (第16次調査)
- IX 竹 渕 遺 跡 (第 8 次調査)
- X 竹 渕 遺 跡 (第 9 次調査)
- XI 中 田 遺 跡 (第39次調査)
- XII 中 田 遺 跡 (第40次調査)
- XIII 中 田 遺 跡 (第41次調査)
- XIV 八 尾 寺 内 町 遺 跡 (第 2 次調査)
- XV 山 賀 遺 跡 (第 7 次調査)

1999年

財團法人 八尾市文化財調査研究会



財団法人 八尾市文化財調査研究会報告 62 正誤表

ページ	行	誤	正
55	9	Ⅲ型式	Ⅱ型式
60	第2図	府道大阪湾八尾線	府道大阪港八尾線
69	35・36・38	吉田野々	吉田野乃
87	36	本書★第9次調査	本書X第9次調査
93	8	吉田野々	吉田野乃
	10・16	米田俊幸	米田敏幸
	16	(94-478) の調査)	(94-478) の調査』
101	16	(N T <u>996</u> -33)	(N T <u>96</u> -33)
133	12	にあったと思われるとみられる。	削除

財團法人八尾市文化財調査研究会報告62

- I 跡部遺跡 (第25次調査)
- II 跡部遺跡 (第26次調査)
- III 跡部遺跡 (第27次調査)
- IV 亀井遺跡 (第6次調査)
- V 小阪合遺跡 (第36次調査)
- VI 心合寺山古墳 (第2次調査)
- VII 志紀遺跡 (第4次調査)
- VIII 田井中遺跡 (第16次調査)
- IX 竹渕遺跡 (第8次調査)
- X 竹渕遺跡 (第9次調査)
- XI 中田遺跡 (第39次調査)
- XII 中田遺跡 (第40次調査)
- XIII 中田遺跡 (第41次調査)
- XIV 八尾寺内町遺跡 (第2次調査)
- XV 山賀遺跡 (第7次調査)

1999年

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中央部にあたります。豊かな自然環境に恵まれ、古くは旧石器時代から現代に至るまで先人たちが残した貴重な文化財が数多く存在している地域です。

しかしながら近年では各種土木工事が盛んに行われるようになり、歴史上かつてないほど大規模に開発が行われ、地中深く眠っていた文化財が破壊の危機にさらされることが多くなりました。我々は貴重な文化財を守り、また、やむをえず破壊される文化財に対しては発掘調査を行い、記録を保存するという形で後世に伝承すべく努力している次第であります。

この度、平成9年度に実施しました15件の発掘調査の整理が終了しましたのでこれらをまとめ、報告書として刊行することとなりました。

本書が地域の歴史を解明していく資料としてはもとより埋蔵文化財の保護・普及のために広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、これらの調査が関係諸機関及び地元の皆様の多大なるご理解・ご協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。文化財は一度破壊されてしまうと二度と元のかたちに戻すことはできません。今後とも文化財保護に一層のご理解・ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

平成11年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 木山丈司

序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が実施した発掘調査の報告書を収録したものである。
1. 内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成11年3月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告の文責は以下の通りである。全体の構成・編集は森本が行った。
I・III・VII・XII : 坪田真一 II・IV・V・XIII : 高萩千秋 VI・IX・X : 成海佳子
VIII・XIV : 古川晴久 XI : 森本めぐみ XIII : 岡田清一
1. 本書掲載の地図は大阪府八尾市役所発行の2,500分の1（平成8年7月）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成8年10月1日改訂）を使用した。
1. 本書で用いた高さの基準は東京湾標準潮位（T.P.）である。
1. 本書で用いた方位は座標化及び磁北である。
1. 造構は下記の略号で示した。
堅穴住居-S I 挖立柱建物-S B 井戸-S E 上坑-S K 溝-S D
小穴・柱穴-S P 落ち込み-S O 土器集積-S W 自然河川-N R
1. 各調査に際しては写真・実測図等の記録とともにカラースライドを多数作成している。
広く活用されることを希望する。

目 次

はしがき

序

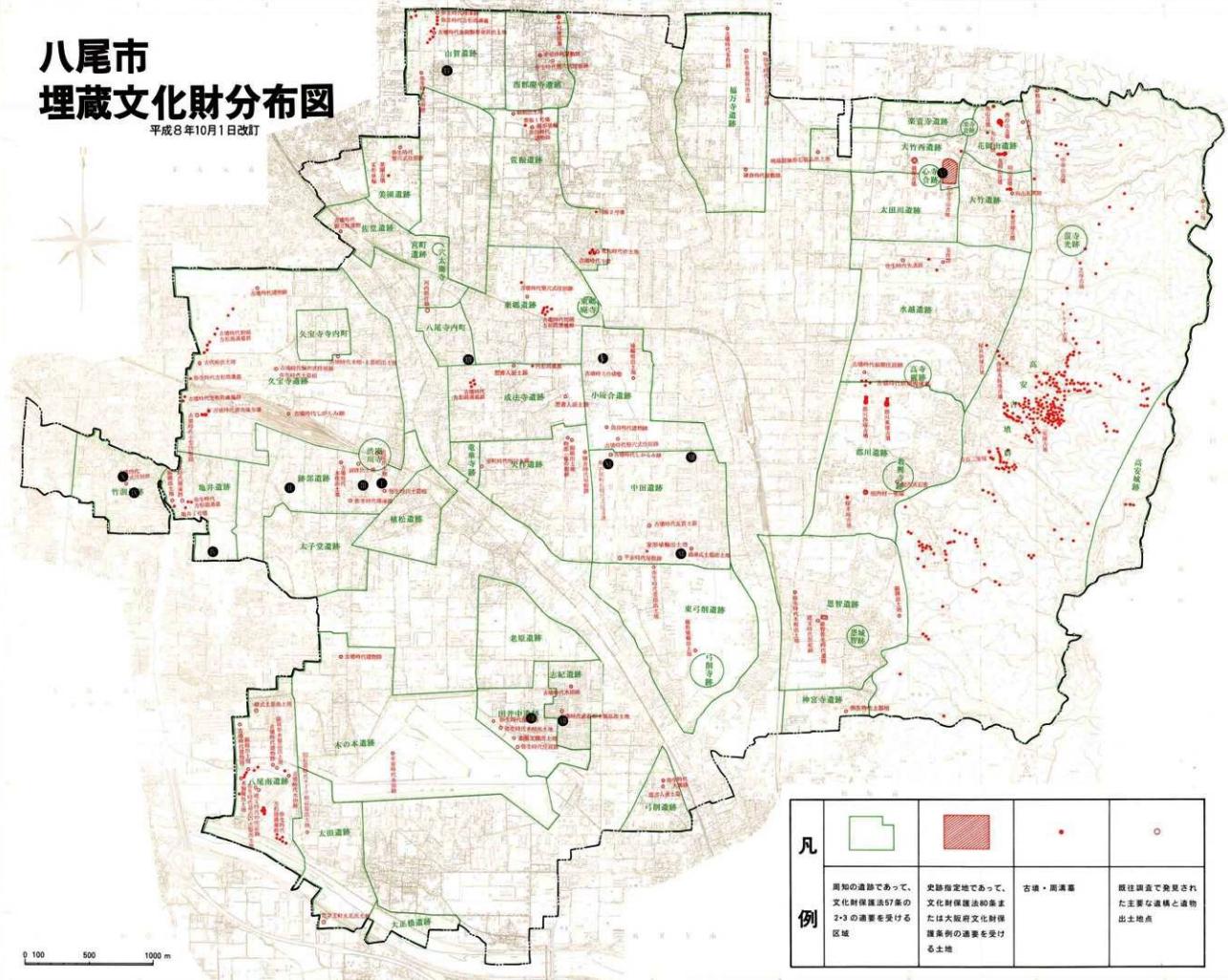
八尾市埋蔵文化財分布図

I 跡部遺跡 第25次調査 (AT97-25)	1
II 跡部遺跡 第26次調査 (AT97-26)	15
III 跡部遺跡 第27次調査 (AT97-27)	23
IV 亀井遺跡 第6次調査 (KM97-6)	51
V 小阪合遺跡 第36次調査 (KS97-36)	59
VI 心合寺山古墳 第2次調査 (SO97-2)	67
VII 志紀遺跡 第4次調査 (SIK97-4)	75
VIII 田中遺跡 第16次調査 (TN97-16)	81
IX 竹測遺跡 第8次調査 (TK97-8)	87
X 竹測遺跡 第9次調査 (TK97-9)	95
XI 中田遺跡 第39次調査 (NT97-39)	97
XII 中田遺跡 第40次調査 (NT97-40)	105
XIII 中田遺跡 第41次調査 (NT97-41)	113
XIV 八尾寺内町遺跡 第2次調査 (YC97-2)	117

IV 山賀遺跡 第7次調査(YMG97-7) 131
報告書抄録

八尾市 埋蔵文化財分布図

平成8年10月1日改訂



I 跡部遺跡第25次調査（A T97-25）

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市春日町2・3丁目地内で実施した公共下水道工事（平成8年度 第115工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する跡部遺跡第25次調査（AT97-25）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋667-3号 平成9年1月31日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成9年4月8日から11月10日（実働20日）にかけて、坪田真一を担当者として実施した。調査面積は約116m²を測る。調査においては朝田 要・垣内洋平・八田雅美・山内千恵子が参加した。
1. 内業整理には上記の他、岩本順子・澤村妙子・田島和恵・都築聰子の参加を得た。
1. 本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行った。

本 文 目 次

1.はじめに.....	1
2.調査概要.....	2
1) 調査方法.....	2
2) 調査成果.....	3
3.まとめ.....	9

I 跡部遺跡第25次調査 (A T97-25)

1. はじめに

跡部遺跡は八尾市の西部に位置し、現在の行政区画では、跡部北の町1・2、春日町1~4、太子堂1・2、東太子1、跡部本町1~4、跡部南の町1・2、安中町3丁目がその範囲となっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川左岸の自然堤防上に立地しており、同地形上では北で久宝寺遺跡、東で植松遺跡、南で太子堂遺跡、西で亀井遺跡と接している。

当遺跡では、昭和53年に春日町1丁目で行われた旧国鉄職員寮建設の際に、弥生時代前期の土器や鎌倉時代の瓦が出土したと伝えられ、その後昭和56年以降、八尾市教育委員会・当調査研究会により多くの発掘調査が実施されている。平成元年度の当調査研究会第5次調査 (A 5)においては、埋納された銅鐸が検出され注目された。今回の調査地の東に隣接する平成5年度第12次調査地 (A 12) では、弥生時代前期・後期の集落遺構と多量の土器、中期では土器棺、古墳時代では墳丘の可能性がある盛土層と後期の集落遺構が検出され、弥生時代以降連続と続く集落域であったことが確認されている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代前期から近世にわたる複合遺跡であると認識されている。



第1図 調査地位置図 (S=1/5000)

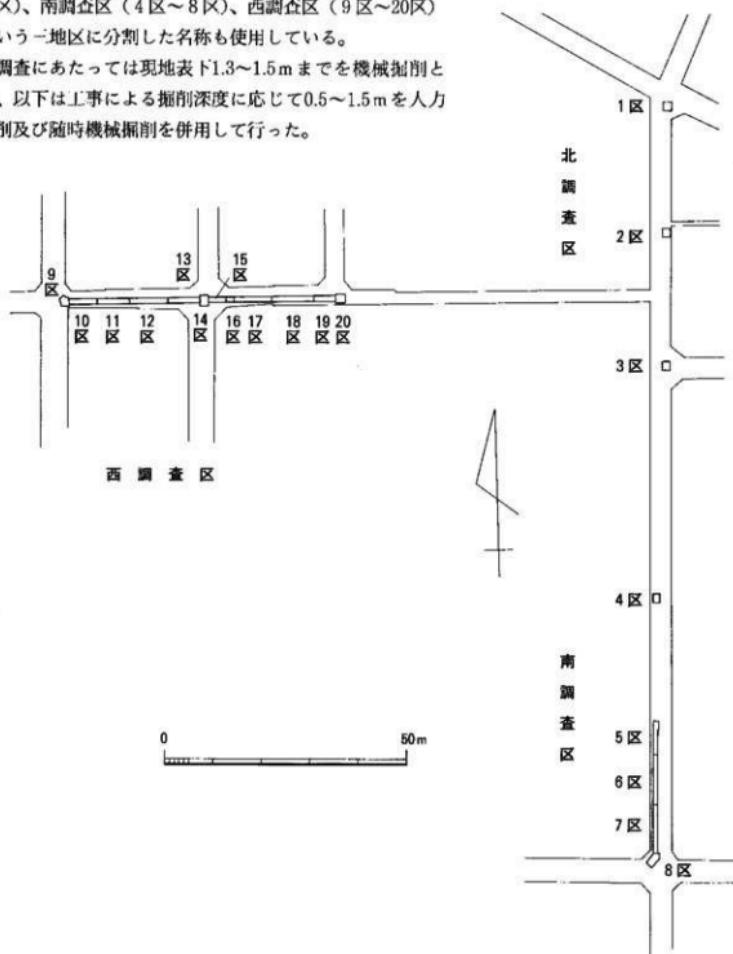
2. 調査概要

1) 調査方法

今回の調査は公共下水道工事（8-115工区）に伴うもので、当調査研究会が跡部遺跡内で実施した第25次調査である。調査区は人孔部分9箇所（約2m四方）、及び管路部分（幅約1m・延長約80m）で、工事の進捗状況に合わせて順次調査を実施した。

地区名は一日の調査部分毎に1区～20区とした。なお本報告中では便宜上、北調査区（1区～3区）、南調査区（4区～8区）、西調査区（9区～20区）という3地区に分割した名称も使用している。

調査にあたっては現地表下1.3～1.5mまでを機械掘削とし、以下は工事による掘削深度に応じて0.5～1.5mを人力掘削及び随時機械掘削を併用して行った。



第2図 調査区位置図 (S=1/1000)

2) 調査成果

〈1区〉

第2層下面で、南北方向に伸びる直線的な肩から、西に下がる堆積状況がみられ、これを溝とした (SD 1)。規模は長さ1.0m以上、幅0.6m以上、深さ0.4m以上を測る。埋土 (A) は上から暗灰色微砂混じり粘質シルト、暗灰黄色細砂混じりシルト、明褐色細砂混じりシルト (固く締まる) である。中世頃の土器が出土しており、周辺の調査成果からみてこの頃の遺構と考えられる。なおベースとなる層も、第6層を切り込んで西に下がる堆積状況で、SD 1の下層部、あるいは川流路とも捉えられる。この第6層からは、飛鳥～奈良時代に比定される有軸綾杉文叩きを施す平瓦 (1) の小片が出土している。叩きは凸面に施され、凹面は布目、側面はヘラケズリである。色調は淡橙色で、焼成はやや不良。

〈2区〉

標高約8.2m以下の第5層は南に下がる堆積状況であり、層全体が落ち込み等の遺構とも考えられる。上層からは5世紀末～6世紀頃、下部からは5世紀末頃の須恵器・上師器が多く出土しており、2～6を円化した。須恵器高杯 (3) は杯部内面に自然輪がたまる。須恵器壺 (4) は焼成が不良である。5は製塙土器で、丸底式に分類されるものであろう。調整はナデである。6は外面に平行タキを施すもので、韓式系上器の鉢と考えられる。

〈3区〉

B層は、層厚約0.8mにわたって粘質シルト～細砂が複雑な堆積を呈するもので、河川流路とした (NR 1)。流路方向は不明である。川床は標高約7.6mを測り、最下部にはマンガンが沈殿している。遺物は時期不明の土器片が出土している。時期は層位的にみて中世以降である。ベースとなる第6層からは弥生時代～布留式期頃の土器片が出土している。

〈4区〉

調査区のほとんどが搅乱にあたり、西壁下位で断面が確認したのみで、遺物も出土していない。第12次調査地の西側に位置しており、その成果からみて第3層が中世頃の包含層にあたると考えられる。

〈5区〉

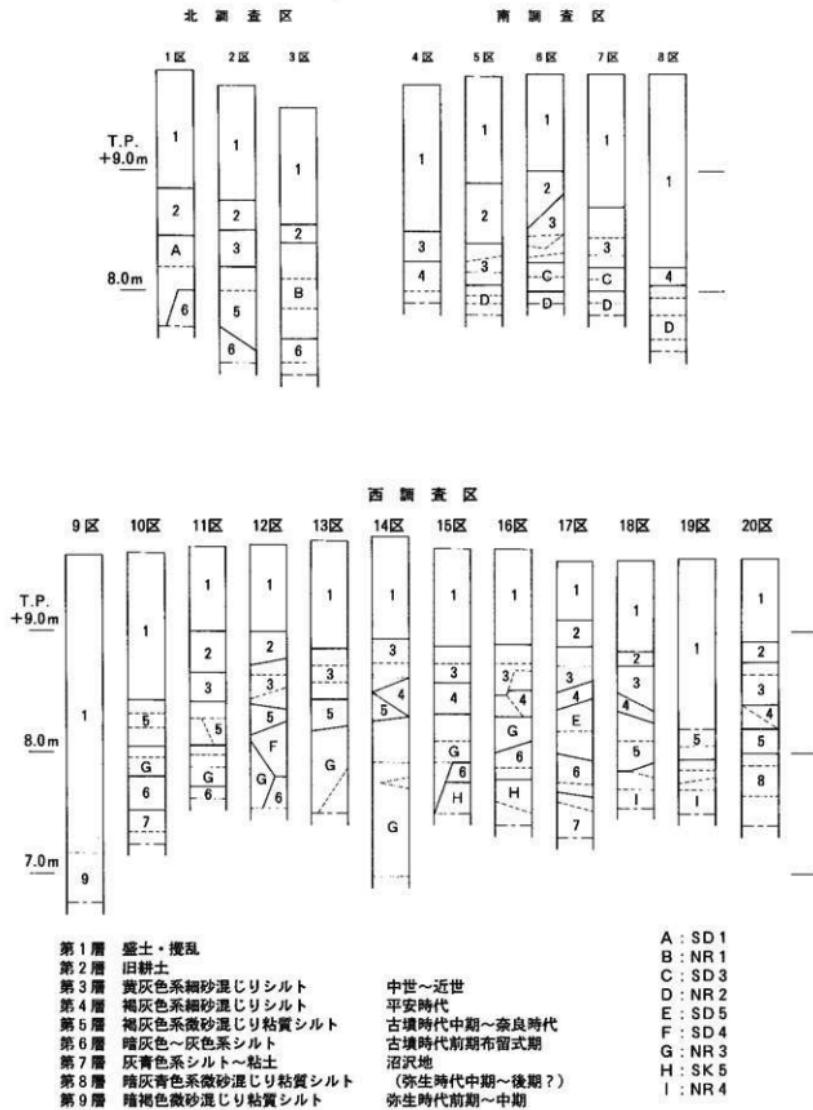
第3層下面で土坑1基 (SK 1) を検出した。規模は南北2.5m以上、東西0.6m以上、深さ0.2m以上を測る。断面皿状を呈し、埋土は淡黄灰色微砂混じり粘質シルトで、遺構面を覆う第3層に類似する土層である。遺物は上師器・須恵器片が出土しているが時期は不明である。

〈6区〉

第3層からは時期不明の上師器片が出土している。第3層下面で東西方向の溝1条 (SD 2) を検出した。規模は検山長約0.5m、幅約0.9m、深さ約0.1m以上を測る。断面皿状を呈し、埋土は淡灰黄色微砂混じりシルトである。時期不明の上師器片が出土している。ベースとなるC層以下は砂を基調とする水成層の状況で、C層は7区 SD 3にあたると考えられる。底部のD層も細砂層で、上面はマンガンにより固く締まる。

〈7区〉

第3層からは鎌倉時代頃に比定される瓦器碗片が出土しているが円化しえなかった。C層はシルト混じり微砂・細砂層で、以下は水成層の状況で、西から東に下がる堆積状況がみられる。下



第3図 基本層序 (S = 1/40)

位のD層上面では南北方向に伸びる平面弧状の肩が検出され、これを溝（SD 3）とした。掘削はしていないが、規模は長さ3.8m以上、幅0.6m以上、深さ13cm以上を測るものである。埋土は上層が灰褐色シルトブロック混じり微砂、下層が褐色微砂混じりシルトで、C層も埋土上部と捉えられる。遺物は平安時代頃に比定される土師器壺（7）や古墳時代の須恵器が出土している。D層のシルト～微砂層以下は5区以南にみられる水成層の続きで、SD 3と同様に南北方向の流路が窺われ、これを河川（NR 2）とした。平安時代頃には埋没している。

〈8区〉

調査区のほとんどが南西側の既設マンホール工事による搅乱を受けており、北西部で断面を確認した。第4層上面からの、深さ約0.7mを測る遺構状の掘形を断面で確認したが、平面形状や掘り込み面等は不明であり、遺物も出土しておらず、時期は判断しえなかった。7区以北の状況からみて平安時代以降の遺構であろう。D層以下はNR 2にあたり、上部が微砂～細砂、下部が粘質シルトである。

〈9区〉

西に位置する既設マンホール工事に伴う薬剤注入により、調査区内の土層がセメント化していったため、最下部の土層を確認したのみである。標高約7.2m以下の第9層からは弥生時代中期頃の土器が出土しているが、図化したものは8のみである。8は鉢あるいは台付鉢で、調整は外面ハケ後難なヘラミガキ、内面荒いハケである。西に隣接する第27次調査地1区（本書III）においても、同様の弥生時代前期～中期の包含層が確認されており、標高約6.6mでは弥生時代前期新段階の土坑が検出されている。

〈10区〉

第7層上面で土坑1基（SK 2）を検出した。北は調査区外に至り、検出部分の平面形は半円形を呈する。規模は1.1×0.6m、深さ約20cmを測る。断面逆台形で、埋土は暗灰色細砂混じりシルト質粘土である。布留式期の土器が出土しているが、図化しえるものはなかった。遺構面を覆う第6層が布留式期の包含層で、土器が少量出土している。これより上層から遺物は出土していない。G層は微砂混じり粘質シルト層で、後述のNR 3上部にあたるのかもしれない。第7層は微砂～粘土の互層状を呈し、布留式期以前は沼沢地であったと考えられる。

〈11区〉

G層の微砂混じりシルト～粘質シルト層はNR 3上部と考えられ、ここからは布留式期から奈良時代頃の土器が出土しており、須恵器壺類の底部（9）を図化した。第6層は布留式期新相の包含層でやや汚れている。完形に近い高杯1個体（10）が出土しているが、やや摩滅しており流れ込みかもしれない。10は口径14.5cm・器高12.9cmを測る。

〈12区〉

F層以下は水成層の状況である。F層のシルト～微砂層は、北西～南東方向の肩から南西に下がる堆積を呈し、これを溝とした（SD 4）。東は13区にも統いており、検出長約4.6m、幅1.2m以上、深さ0.5m以上を測る。底部から布留式期新相の土器が少量出土しているが、下層からの遺物と捉えられ、層位的には古墳時代後期頃の遺構であろう。図化したものは高杯脚部（11）のみである。表面の摩滅が著しい。G層の微砂～粘質シルトの互層は、SD 4と同一方向の肩から北に下がる堆積状況で、河川（NR 3）とした。ラミナが顕著にみられる。SD 4の旧流路に

あたるのかもしれない。

〈13区〉

第3層からは時期不明の土師器・須恵器・瓦が出土している。G層上面で土坑1基（SK3）を検出した。平面形は南北に長い楕円形を呈し、規模は0.9×0.6m、深さ約25cmを測る。断面逆台形で、埋土は淡灰褐色微砂混じりシルト質粘土である。遺物は6世紀頃の土師器・須恵器が少量出土している。G層の微砂～シルト層は南から北に下がる堆積で、NR3にあたる。ラミナが顯著にみられる。布留式期の土器が出土している。

〈14区〉

第5層からは6世紀頃に比定される須恵器杯が出土しているが図化しえなかった。東部G層上面で土坑1基（SK4）を検出した。東は15区に統き、平面形は東西に長い楕円形を呈するが、南東部は調査区外に至る。規模は0.8×0.5m、深さ約30cmを測る。断面逆台形に近く、埋土は上層が褐灰色微砂ブロック混じり粘質シルト、下層が淡灰色微砂混じり粘質シルトである。遺物は時期不明の土師器片が出土している。層位的にみて13区SK3と同様、古墳時代後期頃の遺構であろう。G層以下は微砂～シルトの互層状を呈し、NR3にあたる。層厚は1.3m以上を測り、水平なラミナが認められる。

〈15区〉

第4層からは土師器・瓦・須恵器が出土している。G層は西部からみられるNR3で、当区南東部を頂とし、西・北に下がる状況が確認できる。当区では上層が粘質シルト・下層が微砂～粘質シルトの互層状を呈し、ラミナがみられ植物遺体を多く含んでいる。この上面が古墳時代後期頃の遺構面にあたる。NR3のベースとなる第6層は布留式期の包含層で、土器が少量出土しており、甕（12）を図化した。東部でみられた丘層は後述のSK5埋上と捉えられる。

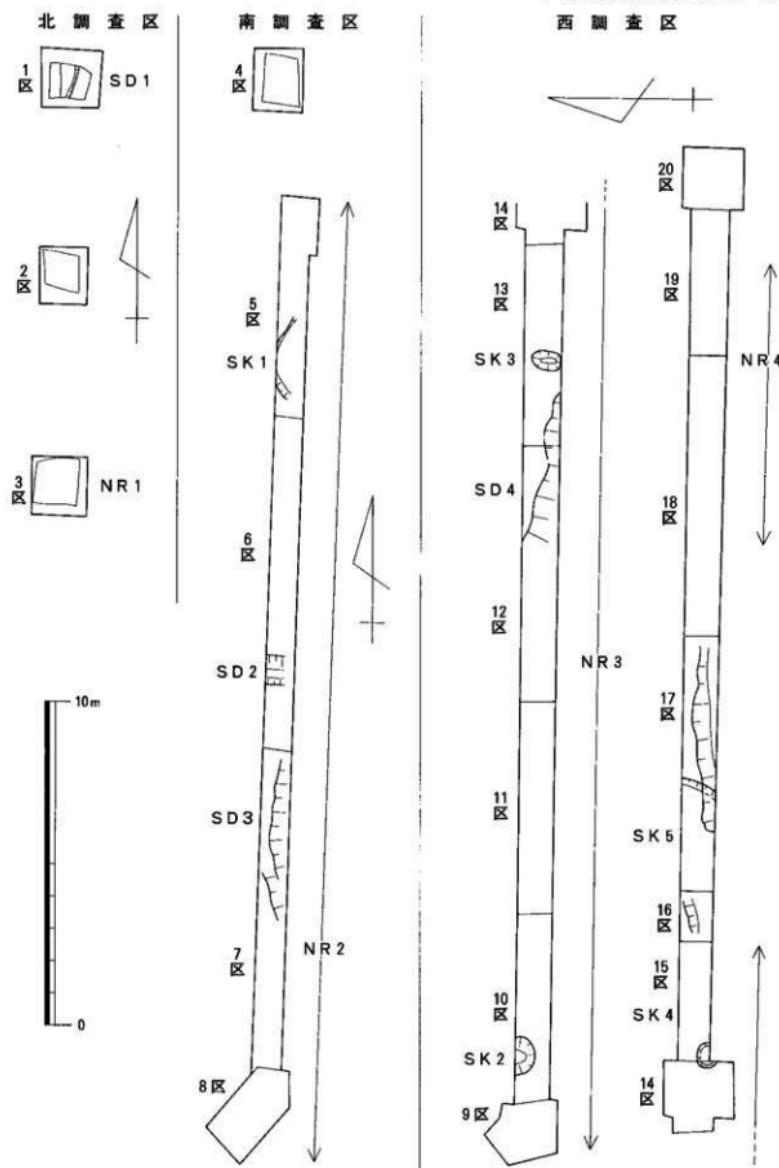
〈16区〉

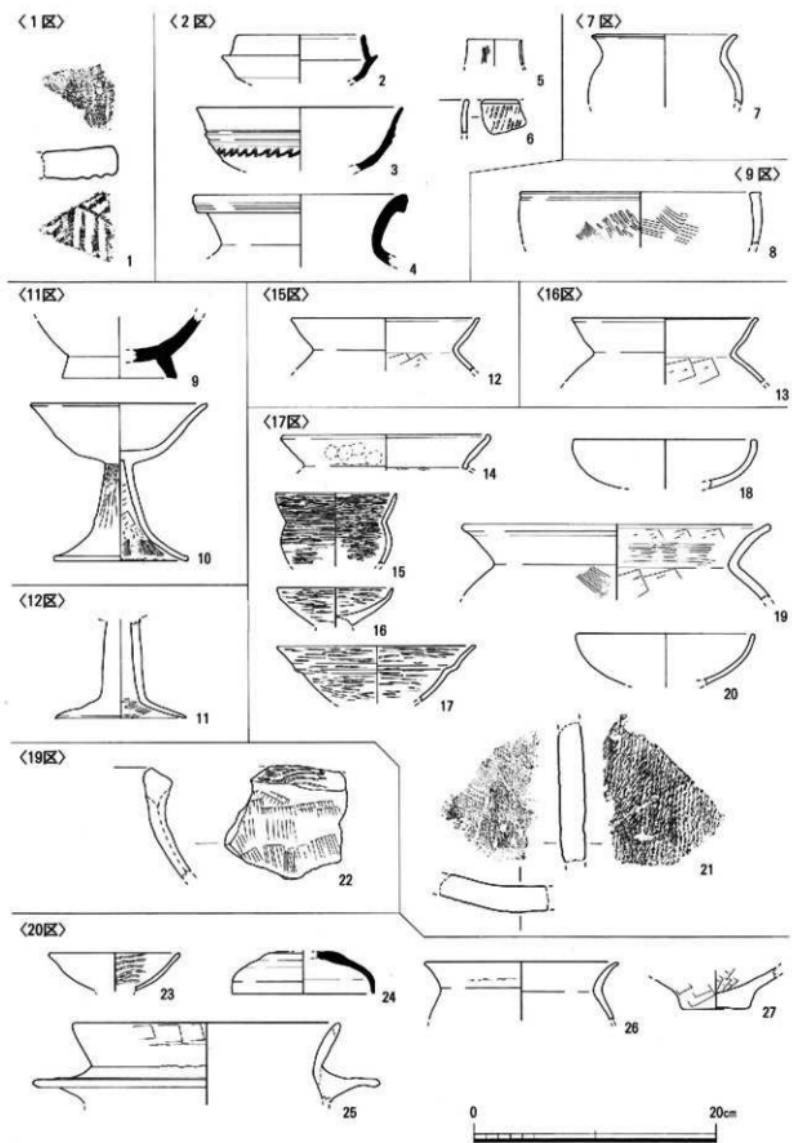
第4層からは須恵器甕・土師器・黒色土器片が山上しており、平安時代頃の包含層であろう。東部で17区に統く土坑1基を検出した（SK5）。なお西部は15区に統いていたと思われる。平面形は不明であるが、17区での東肩はやや弧状を呈しており、規模は東西4.9m以上、南北は不明で、深さは約0.6mを測る。断面逆台形で、埋土は上層が暗灰色シルト混じり粘質シルト、下層が灰黒色粘質シルトで、底部付近には炭が多量に含まれている。遺物は庄内式期新舟～布留式期古舟の土器が山上しており、甕（13・14）・小型丸底甕（15）・小型器台（16）・鉢（17）を図化した。このうち13が16区、他が17区の出土である。G層の微砂混じり粘質シルト層は、西から統くNR3の上層部と捉えられるが明確ではない。

〈17区〉

第4層からは須恵器・土師器・瓦器・瓦片が出土しており、土師器高杯（20）・平瓦（21）を図化した。高杯（20）は古墳時代のものであろう。標高約8.4mを測る第4層下面で東西方向の溝（SD5）を検出した。やや蛇行する北肩から南に下がる堆積を確認したが、南は調査区外に至り幅は不明である。規模は検出長約5.5m・幅0.7m以上・深さ10cm以上を測る。埋土（E層）は上層が黄灰褐色微砂混じりシルト、下層が褐灰黄色微砂混じりシルトで、マンガンを含んでいる。遺物は5～6世紀から奈良時代頃の土師器が出土しており、古墳時代に比定される高杯（18）・甕（19）を図化した。

I 跡部遺跡第25次調査 (A T97-25)





第5図 出土遺物 (S = 1/4)

〈18区〉

第3層から上師器・須恵器片が出土したのみで、遺構は検出されなかった。標高約7.9mのI層は、粘質シルトを基調とし、以下は水成層の状況である。遺物は出土していない。

〈19区〉

18区と同様に標高約7.9mのI層以下は水成層の状況である。堆積状況から北東-南西方向の流路が想定でき、河川 (N R 4)とした。西部の N R 3との関係は不明である。なお断面は図化しえなかった部分であるが、旧耕土下の標高8.5m前後に堆積する灰褐色系シルト層 (20区第4層に相当)から、古墳時代~奈良時代頃の土器が出土している。調整は外ハケ、内面ナデで、口縁端部には同心円タタキを施す。いわゆる生駒西麓産の胎土のものである。

〈20区〉

第3層からは6世紀頃の土器の他、瓦器楕 (23) が出土しており、中世頃の包含層であろう。第4層からは古墳時代中期~奈良時代頃の上器が出土しており、上師器羽釜 (25)・甕 (26)・須恵器杯蓋 (24)を図化した。第4層は北東から南に下がるブロック混じりの土層であり、奈良時代頃の遺構かもしれない。第5層からは6世紀末頃の土器が出土しており、固く締まる第8層上面が当時の生活面であった可能性がある。第8層下位からは弥生時代中期~後期の土器が少量出土しているが、当該期の包含層であるかどうかは明確ではない。図化したものは後期に比定される壺底部 (27) のみである。

3.まとめ

今回の調査では弥生時代から鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ1箱であり密とはいえない。

弥生時代の遺構は検出されなかつたが、西調査区9区では西部で確認されている前期~中期の包含層相当層が確認できた。20区では標高約7.6m以下で中期~後期の土器が出土しているが、包含層として捉えられるものは不明である。

古墳時代前期では西調査区で布留式期の遺構が、また北調査区3区では包含層が検出された。遺構面は西調査区中央が高く、西にゆくほど下がる傾向が指摘できる。

古墳時代中期~後期では、標高8.0~8.2mで遺構・包含層が検出された。西調査区では埋没河川 (N R 3・4)の上面が生活面となっている。北調査区2区は全体が大規模な遺構である可能性がある。

奈良時代では西調査区東部で土器が出土しており、前代から続く集落の存在が考えられる。

平安時代頃では、北・南調査区で南北方向の流路が想定され、その上面では中世頃の溝等の遺構が検出されている。

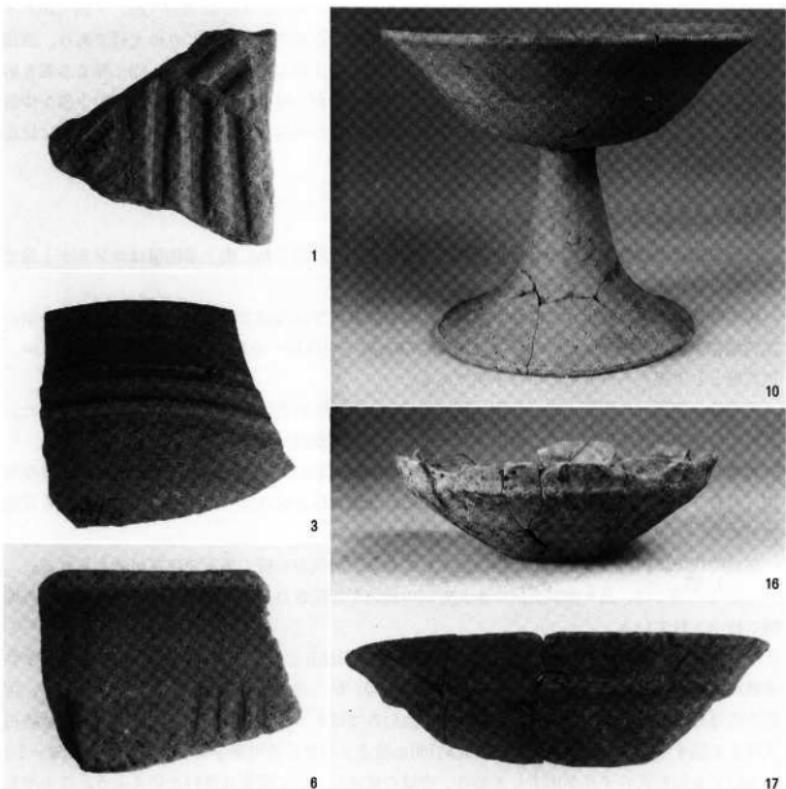
なお、今回の調査地の北約250mには渋川天神社が所在し、その南側は、白鳳時代創建とされる渋川廃寺の推定地となっており、★地点 (第1図)からの八葉単弁蓮華文軒丸瓦をはじめ、付近からは瓦の他礎石が出土している。今回1点のみではあるが、1区 S D 1下層より有輪綾杉文叩きを施す平瓦 (1) が出土した。北約180m地点における渋川廃寺第1次調査 (SKT89-1)においても同形式の平瓦が出土しており、寺域の確定において重要な資料といえよう。この平瓦は河内地域、すなわち大県郡・安宿郡・若江郡・志紀郡などの飛鳥・白鳳時代の寺院に多く採用

されている。同様の瓦は、八尾市域では東郷廃寺でも出土しており^{註4}、これらの寺院との関連も注目される。

註

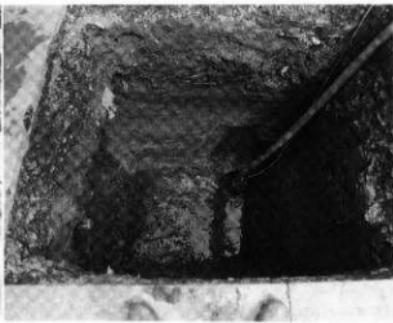
- 註1 安井良三・成海佳子 1991「跡部遺跡発掘調査報告書」『鶴八尾市文化財調査研究会報告31』鶴八尾市文化財調査研究会
- 註2 坪田真一 1994「2. 痕部遺跡第12次調査(AT93-12)」『平成5年度 鶴八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註3 広瀬和雄 1978「岬町遺跡群発掘調査概要—小島東遺跡・淡輪遺跡—」大阪府教育委員会報告
- 註4 山本 昭 1986「河内国淡川寺について」『帝塚山考古学 No.6』帝塚山考古学研究所
- 註5 青木勘時 1990「淡川廃寺第1次発掘調査概要(現地説明会資料)」鶴八尾市文化財調査研究会
- 註6 清 斎 1995「東郷廃寺発掘調査報告」『八尾市文化財紀要7』八尾市教育委員会文化財課

図版





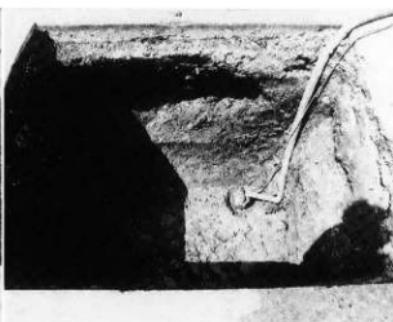
1区 第2層下面（北から）



2区 第6層上面（西から）



3区 第6層上面（北から）



4区 最終面（東から）



5区 第3層下面（北から）



5区 北壁



6区 第3層下面（南から）



7区 NR 2上面（北から）



9区 最終面（南から）



10区 第7層上面（西から）



10区 SK 2（東南から）



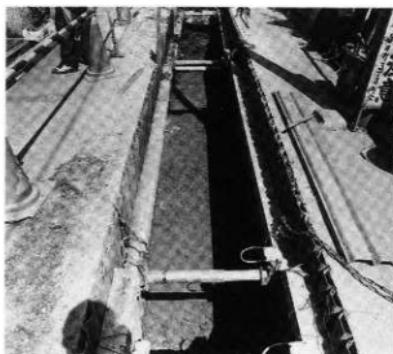
11区 第6層上面（東から）



11区 第6層内土器（10）出土状況（南から）



11区 東壁



12区 NR 3上面（西から）



13区 NR 3上面（西から）



13区 SD 4（北から）



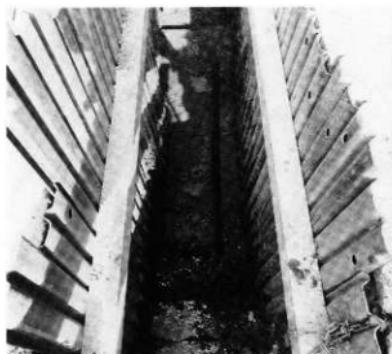
14区 NR 3上面（西から）



15区 NR 3 上面（東から）



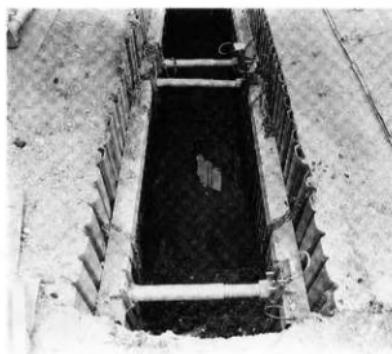
16区 SK 5（西から）



17区 SK 5（西から）



18区 NR 4 上面（東から）



19区 NR 4 上面



20区 第8層上面（北から）

II 跡部遺跡第26次調査 (A T 97-26)

調査文書

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市太子堂1・2丁目地内で実施した公共下水道（8-112工区）工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する跡部遺跡第26次調査（AT97-26）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋725-3号 平成9年3月10日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成9年4月21日から8月1日（実働4日）にかけて、高萩千秋を担当者として実施した。調査面積は約16m²を測る。なお、調査においては八田雅美・中村百合・市森千恵子が参加した。
1. 本書に関わる業務は、図面レイアウト・トレースー高萩が行った。
1. 本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　　文　　目　　次

1.はじめに.....	15
2.調査概要.....	15
1) 調査の方法と経過.....	15
2) 基本層序.....	17
3) 検出遺構と出土遺物.....	17
3.まとめ.....	19

II 跡部遺跡第26次調査 (AT97-26)

1.はじめに

跡部遺跡は八尾市西部に位置し、現在の行政区画では跡部本町1～4丁目、跡部南の町1・2丁目、跡部北の町1・2丁目、春日町1～4丁目、太子堂1・2丁目、東太子1丁目、安中町3丁目にあたる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川左岸の沖積地上に立地しており、同一沖積地には東に槇松遺跡、西に龜井遺跡、南に太子堂遺跡、北に久宝寺遺跡が接している。

当遺跡では、八尾市教育委員会が昭和53年に春日町1丁目内の旧国鉄職員寮建設工事の際に、弥生時代前期の土器、鎌倉時代の瓦が出土したと記録されている。その後昭和56年以降、市教委・当調査研究会により数十次の発掘調査および造構確認調査が行われている。現在までの調査成果では、弥生時代前期から近世にわたる複合遺跡であることが明らかになっている。特筆としては、平成元年度に当調査研究会が実施した公共下水道工事に伴う第5次調査 (AT89-5) から銅鋸を埋納した土壙が検出され注目された。

今回の調査地は遺跡範囲の西部にあたり、調査地の西側には龜井遺跡、南側には太子堂遺跡が隣接している。

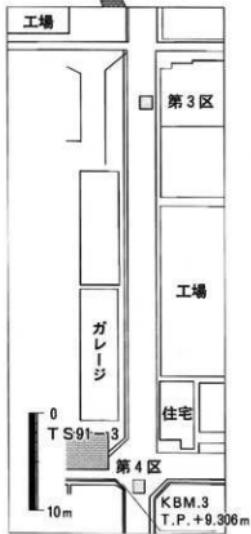
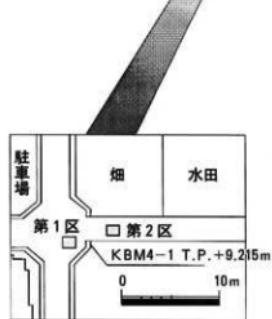
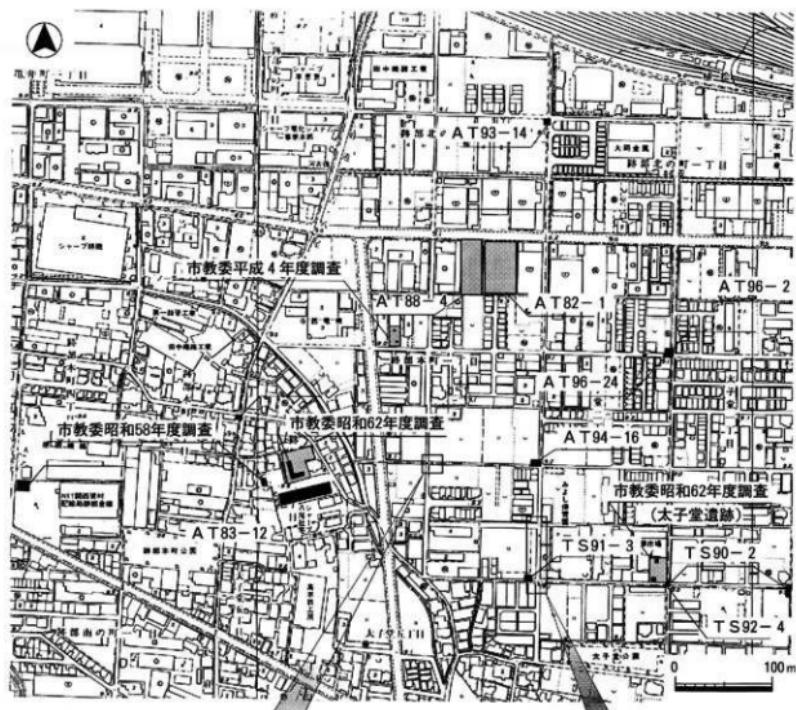
2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道 (8-112工区) 工事に伴う人孔 (マンホール設置) 部分の調査で、当調査研究会が跡部遺跡内で実施した第26次調査 (AT97-26) にあたる。人孔 (一辺約2×2m) は4ヶ所で、総面積約16m²を測る。今回対象となる人孔はNo.3、No.4、No.15、No.18である (第1図)。これらの調査区はそれぞれ離れた位置にあり、調査も工事工程および道路規制等の都合上、各人孔部分の調査時期が異なった。調査期間は、平成9年4月21日から8月1日の長期間に及んだ。このうち実働は4日間である。その内訳は、まず最初にNo.4 (第1区) を4月21日 (月)、次にNo.18 (第4区) を5月15日 (木)、続いてNo.15 (第3区) を6月26日 (木)、最後にNo.3 (第2区) を8月1日 (金) に調査を実施した。なお、No.18の人孔については周知の遺跡範囲では太子堂遺跡の北端にあたっているが、下水工区の申請地が跡部遺跡の所在地であったため跡部遺跡として取り扱っており、調査報告も跡部遺跡とした。

調査は人孔部分を現地表 (標高9.2～9.4m) 下1.6～1.7mまで立ち会いのもとで機械掘削を実施し、遺構・遺物の検出及び地層の堆積状況等の記録保存の作成を行った。次いで工事掘削深度 (現地表下2.7m) までの地層状況を確認した。なお、掘削にあたっては隣接住宅等の安全面を考慮に入れ、壁面崩壊防止策として現地表下1.5m前後より下部の掘削については簡易矢板を打設した。

周辺の調査では現地表下1.5～2.0mの土層で古墳時代前期～中世に相当する包含層及び造構面を検出しておらず、当地にもその存在が予想されていたため、機械と人力を併用して徐々に掘削を行った。その結果、第1区・第2区で奈良時代以前の河川跡、第3区で奈良時代の遺物を含む土層、第4区で平安時代後期の包含層が認められた。



第1図 周辺図 ($S = 1/5000$) 及び調査区位置図 ($S = 1/500$)

2) 基本層序

各調査区が点在するため、基本層となる層はごく一部で共通するのみである。

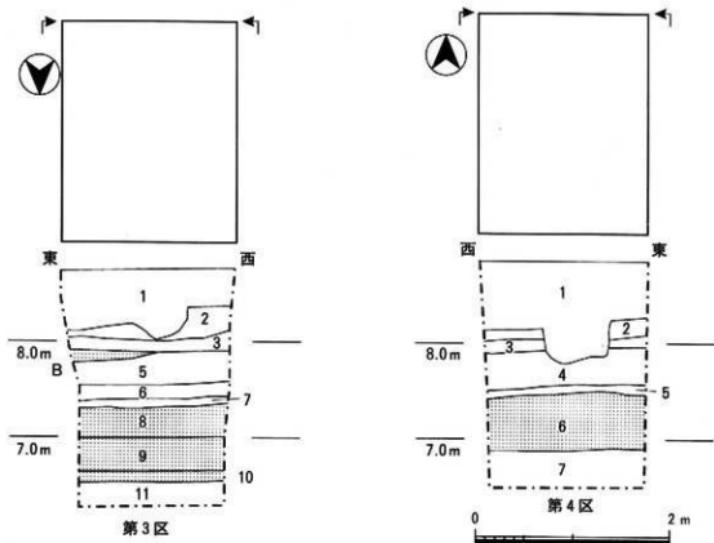
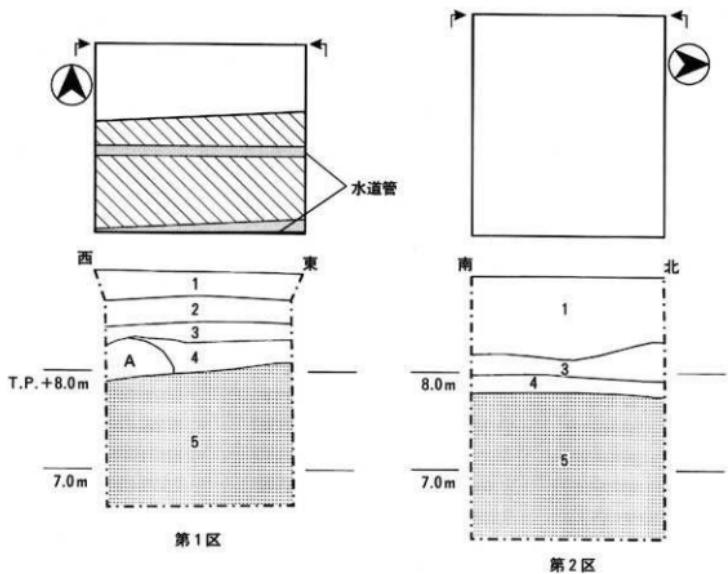
- 第1層 盛土及び搅乱（層厚30～160cm）。道路下は、アスファルト・パラス・盛り土が堆積している。また、公共（水道・排水管・ガス管など）施設の埋設工事で搅乱・削平されている。各調査区に共通して言える。
- 第2層 旧耕土（層厚20cm前後）。第1区と第4区の一部に残存しているのがみられる。他の調査区では削平されており、存在しなかった。
- 第3層 灰茶褐色シルト（層厚20cm前後）第1区・第2区。暗灰青色微砂（層厚30cm前後）第3区。綠灰色シルト（層厚20～25cm）第4区。旧耕土の床土と思われる。
- 第4層 淡茶褐色粘質土（層厚20～40cm）第1区・第2区。褐色の斑点がみられる。暗灰青色細砂混じりシルト（層厚10cm前後）第3区。洪水層。明褐色シルト（層厚30～40cm）第4区。須恵器片を含むが中世以降と思われる土層。
- 第5層 灰白色細砂～砂礫（層厚130cm以上）第1区・第2区。奈良時代以前に埋没した河川跡と思われる。青褐色細砂混じりシルト（層厚30～40cm）第3区。明褐色粘質シルト（層厚10～30cm）第4区。奈良時代ごろの土師器片を含む。
- 第6層 淡茶褐色シルト（層厚20cm前後）第3区。淡青灰色微砂～細砂（層厚60cm前後）第4区。
- 第7層 明褐色シルト（層厚100cm前後）。酸化鉄を含む。灰色シルト質粘土（層厚50cm以上）第4区。植物遺体含む。
- 第8層 乳灰茶色細砂（層厚30cm前後）第3区。河川跡。
- 第9層 灰色微砂（層厚50cm前後）第3区。植物遺体を含む。河川跡。
- 第10層 灰色粗砂（層厚20cm前後）第3区。河川跡。2～4cmの小石を含む。
- 第11層 暗灰色粘土（層厚30cm以上）第3区。多量の植物遺体含む。
- 第A層 淡茶褐色粘質土と灰白色細砂のブロック。第1区の北東の一部でみられる。
- 第B層 青灰色細砂。第3区の南東部の一部にみられる層である。

3) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、第1区・第2区では現地表下約1.5m（標高約7.7m）以下で奈良時代以前の河川跡と思われる砂層を検出した。第3区では現地表下約1.3～1.5m（標高約7.9～8.1m）の第6層で平安時代後期ごろの遺物を含む土層、下層（第8層～第10層）で時期を特定することはできないが河川跡と思われる砂層の堆積が認められた。第4区では現地表下約0.9～1.3m（標高約8.0～8.4m）で中世ごろの土層（第4層）、現地表下約1.4～1.9m（標高約7.4～7.9m）以下で奈良時代と思われる土層（第6層）を確認した。また、これらの調査区から出土した遺物はごく少量であり、確定的な時期決定はできなかった。当報告では周辺の既往調査の層位状況と当調査区から出土した遺物を照合して時期決定した。

第1区

当調査研究会第16次調査（AT94-16）の調査区から西へ約110mに位置する調査区である。現地表下約0.9～2.0m（標高約7.0～8.3m）までは埋設工事等の掘削で埋め戻した盛り土である。調査区西側で水道管理設工事と排水管理設工事の隙間でかろうじて残存する部分が見られた程度



第2図 調査区平断面図 ($S = 1/50$)

である。現地表下約1.2m（標高約7.8m）から工事掘削深度約2.7m（標高約6.3m）まで砂層（層厚約1.5m）が堆積していた。その砂層は上層が細かな砂粒、下層が2～4cmぐらいの小石を多く含んだ砂層である。その下層付近から奈良時代ごろのものと思われる須恵器の杯身片底部1点が出土した。

第2区

第1区より東へ約6mに位置する調査区である。現地表下約0.3～1.5m（標高約7.5～8.7m）まで第1区と同様、現在の埋設工事で埋め戻しされた盛り土で、調査区南部3分の2は現地表下約1.5m（標高約7.5m前後）まで水道管埋設工事で削平されていた。調査区北部で旧耕土から残存する部分がかろうじて残っていた。この土層観察では第1区と同様、砂層（第5層）が厚く堆積していた。工事掘削深度である現地表下約2.7m（標高約6.6m）以降まで続いている。調査区内では層厚1.5m以上の堆積を確認できた。遺物はこの砂層内より第1区と同時期と考えられる須恵器片1点が出土している。

第3区

当調査研究会第16次調査 (AT94-16) より南へ約70mに位置する調査区である。現地表下約0.5～1.7m（標高約7.1～8.4m）までは現在の埋設工事で埋め戻しされた盛り土である。現地表下約0.9～1.2m（標高約7.4～7.6m）の第5層で平安時代後期の遺物を含む層があり、その下部で精査を行ったが遺構はなかった。その下層（第8層～第10層）では河川跡と思われる砂層の堆積がみられた。第9層には植物遺体が含まれていた。

第4区

当調査研究会太子堂遺跡第3次調査 (TS91-3) より南東へ約6mに位置する調査区である。現地表下約0.9～1.6mまで各調査区と同様、現在の埋設工事で埋め戻しされた盛り土である。大部分は現地表下約1.6m（標高約7.5m前後）まで削平されていた。かろうじて南西部の一部で旧耕土から残存する上層があった。この土層観察では第4層内より須恵器の小片1点、第6層内より奈良時代ごろの土師器の杯片1点がそれぞれ出土した。その下層（第7層）では植物遺体を含む層で、工事掘削深度である現地表下約2.3mまで続いている。基底面からは勢いよく湧き水が吹き出しており、その下は砂層の堆積であることが推測できる。

3.まとめ

今回の調査は公共下水道（8-112T区）工事に伴う人孔部分の小面積な調査区であった。また、それぞれの調査区が広範囲に散らばったものであった。

調査の結果、第1区・第2区で奈良時代以前に埋没したと思われる河川跡が確認された。この河川は工事掘削深度である現地表下2.3～2.7mまでしか掘削できなかったが、河川の基底部まではまだまだ深いものと思われる。また、河川の規模であるが開削工事を行った施工業者の工事掘削の様子によると第2区の調査区より西へ約30m以上、第1区の調査区より東へ約40m前後で砂層が途切れているとのことである。このことから判断すると東西幅約80m以上を越える大きな河川跡であることが推測できる。さらに第3区の下層で同時期の河川跡の堆積と思われる砂層がみられることから、同一の河川跡であれば南東から北西方向に流路をもつものと考えられる。

また第3区では遺構は確認できなかったが、平安時代の遺物包含層を検出することができた。

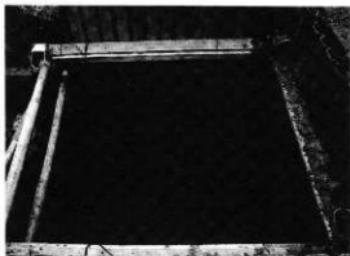
第4区では北西へ6mの所で当調査研究会が、下水道工事に伴う太子堂遺跡第3次調査を実施しており、現地表下約2.3～2.6m（T.P.+6.3～6.6m）で古墳時代中期、現地表下約1.5mで奈良時代の遺構および遺物を検出している。第4区では古墳時代中期の層位まで掘削できなかったが、上層で検出している奈良時代と思われる土層が認められた。

参考文献

- ・高木真光 1983.8「第6章 跡部遺跡（春日町1丁目51番地）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 昭和58年年度』八尾市教育委員会
- ・西村公助 1983「11. 跡部遺跡」『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査－その成果と概要－』（城八尾市文化財調査研究会）
- ・米田敏幸 1984「第6章 跡部遺跡発掘調査概要報告」『昭和58年度事業概要報告』（城八尾市文化財調査研究会）
- ・成海佳子 1988「19. 跡部遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』（城八尾市文化財調査研究会）
- ・西村公助 1989「19. 跡部遺跡（第4次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』（城八尾市文化財調査研究会）
- ・成海佳子 1991『跡部遺跡発掘調査報告－大阪府八尾市春日町1丁目出土財物－』（城八尾市文化財調査研究会）
- ・高萩千秋 1992「■ 跡部遺跡第6次調査（AT91-06）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（城八尾市文化財調査研究会）
- ・成海佳子 1994「1. 跡部遺跡第11次調査（AT93-11）」『平成5年度 城八尾市文化財調査研究会事業報告』（城八尾市文化財調査研究会）
- ・成海佳子 1995「1. 跡部遺跡第16次調査（AT94-16）」『平成6年度 城八尾市文化財調査研究会事業報告』（城八尾市文化財調査研究会）



第1区上層（南から）



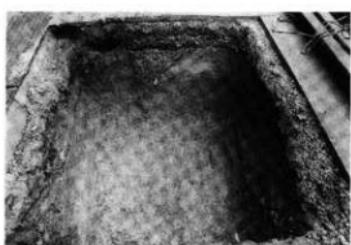
第1区下層（南から）



第2区上層（南から）



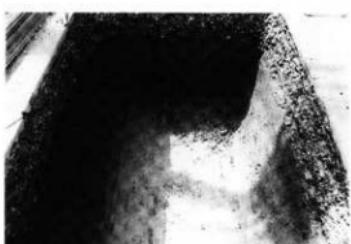
第2区下層（東から）



第3区上層（北から）



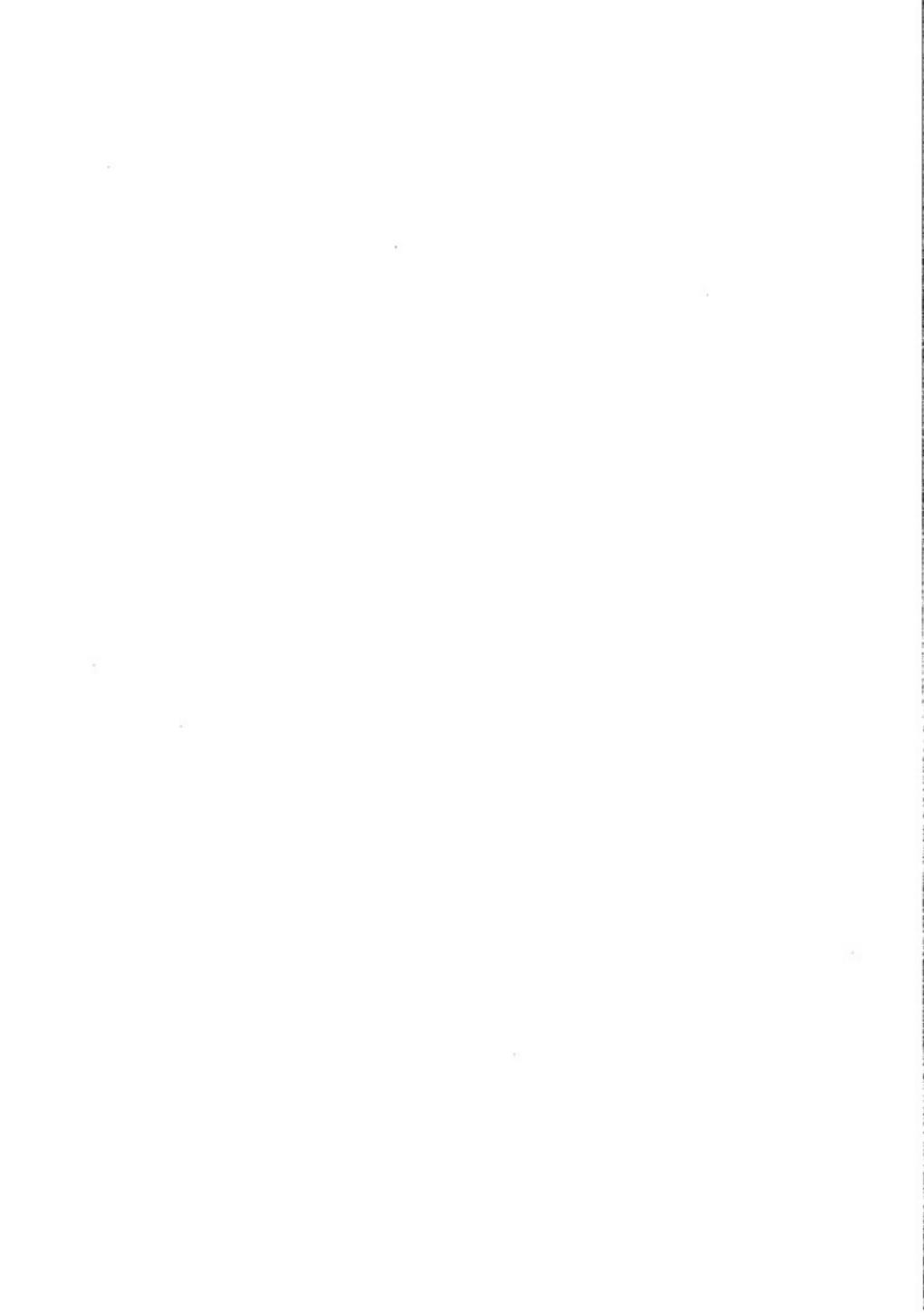
第3区下層（北から）



第4区上層（北から）



第4区下層（北から）



III 跡部遺跡第27次調査（A T97-27）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市春日町3・4丁目地内で実施した公共下水道工事（8-113工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する跡部遺跡第27次調査（AT97-27）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋56号 平成9年4月21日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成9年5月28日から11月10日（実働7日）にかけて、坪田真一を担当者として実施した。調査面積は約20m²を測る。調査においては朝田 要・八田雅美・山内千恵子が参加した。
1. 内業整理には上記の他、岩本順子・澤村妙子・田島和恵・都築聰子の参加を得た。
1. 本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行った。
1. 出土した石庖丁の石材鑑定等については、大阪府八尾市立曙川小学校教諭 奥田尚氏に御教示を得た。

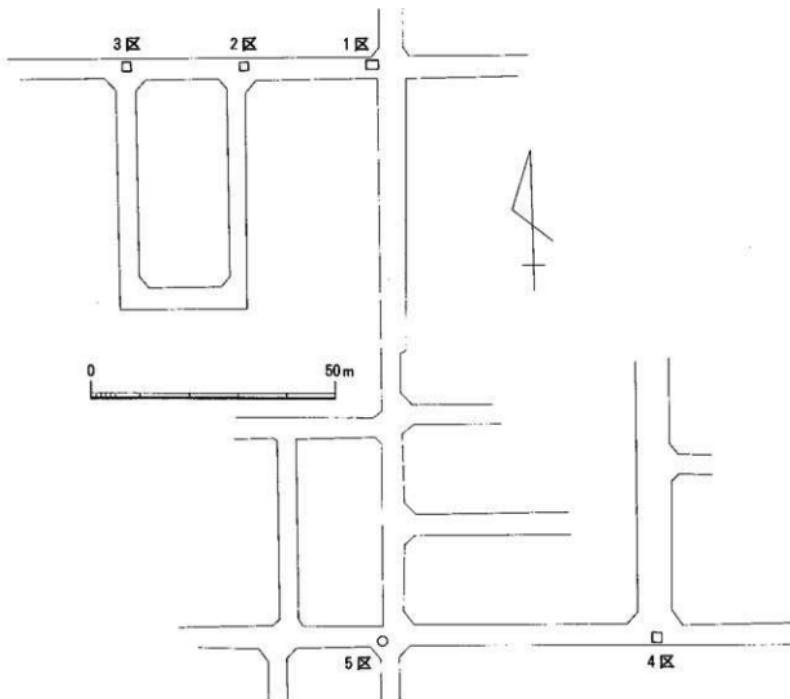
本 文 目 次

1.はじめに.....	23
2.調査概要.....	24
1) 調査方法.....	24
2) 調査成果.....	25
3.まとめ.....	40

1. はじめに

跡部遺跡は八尾市の西部に位置し、現在の行政区画では跡部北の町1・2、春日町1~4、太子堂1・2、東太子1、跡部本町1~4、跡部南の町1・2、安中町3丁目がその範囲となっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川左岸の自然堤防上に立地している。

今回の調査地周辺での既往の発掘調査成果をみると、東部の第12次調査 (A12) では弥生時代前期から古墳時代の集落遺構が確認され、膨大な量の遺物が検出されている。南部の第13次調査 (A13) では弥生時代中期後半の環濠と思われる3条の溝が検出され、またその北側の第10次調査 (A10) では弥生時代後期の溝から銅鏡が1点出土している。北西部の第23次調査 (A23) では弥生時代後期末から古墳時代前期布留式期の集落が連続と続いており、第5次調査 (A5) では埋納された銅鐸が検出されている。(調査地は本書「I 第25次調査」-第1図 (P-1) を参照)

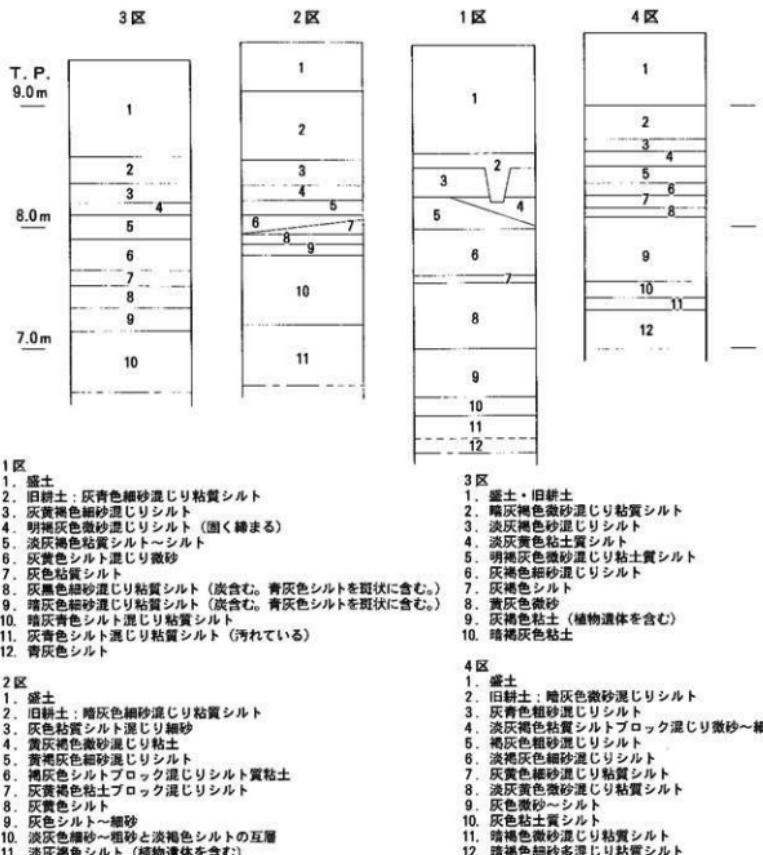
第1図 調査区位置図 ($S = 1/1000$)

2. 調査概要

1) 調査方法

今回の調査は公共下水道工事に伴う人孔部分5箇所(1区～5区)の調査であり、当調査研究会が跡部遺跡内で実施した第27次調査である。なお調査途中で5区については設計変更となり、その工法から断面・平面の調査が不可能と判断されたため、掘削土からの遺物採集を実施するにとどまった。

1区～4区の調査にあたっては、現地表下1.2～1.5mまでを機械掘削とし、以下は工事による掘削深度に応じて1.4～2.0mを人力掘削及び随時機械掘削を併用して調査を実施した。



第2図 基本層序 (S = 1/40)

2) 調査成果

<1区>

a. 基本層序と出土遺物

第1層は盛土、第2層は旧耕土である。第3層からは奈良時代頃に比定される土器・須恵器や、時期不明の瓦が出土している。

標高約7.5~8.0mに堆積する第6・7層は微砂~粘質シルトの水成層であり、東の第25次調査地におけるNR3にあたる。

以下の約1.0mは黒灰色~暗灰色を呈し、粘土を基調とする第8・9層が弥生時代の包含層で、前期を中心として中期までの土器・石器が出土している（第8層：23~29、60・61、第9層：30~53、62~66、第10層上面：54~59、67・68）。出土遺物からみると、第8層は中期の包含層と捉えることもできるが、第8・9層には前期~中期の遺物が混在しており、中期頃に攪拌された層かもしれない。遺物については後述する。

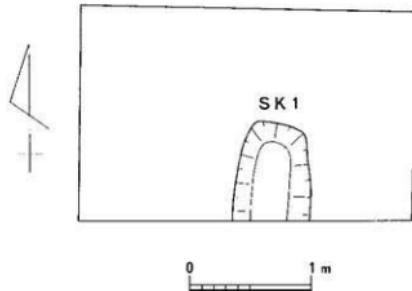
第10層上面が弥生時代前期の遺構面で、土坑1基（SK1）を検出した。面的に精査したのは第11層上面までであるが、第11層はやや汚れた層であり、層相からみて第12層の青灰色シルトがベース層と考えられ、この上面にも遺構が存在する可能性がある。

b. 検出遺構と出土遺物

SK1

検出部分の平面形は長辺0.9m・短辺0.7mの長方形に近く、南は調査区外に続いている。断面形状は逆台形で、深さ約0.5mを測る。埋土は青灰色シルト・暗褐色粘質シルトの互層状を呈し、間層として炭層や焼土層が介在している。

出土遺物には多量の弥生時代前期新段階の土器の他、サヌカイト石核・剥片が各1点ある。また直徑数cm程度の焼土塊が多く含まれ、これらは壁土の可能性がある。土器は完形近くに復元しえるものが多く含まれ、土坑内に隙間なく詰まつ



第3図 1区平面図 (S=1/40)

たような出土状況で、小範囲にもかかわらずその破片量はコンテナ3箱に及んでおり、かなり大きな破片もみられる。器種では壺・甕・鉢があり、壺の占める割合が高い。完形近くに復元しえるものには壺5点、甕1点がある。甕はこの1点以外は小片数点のみであった。

なお同一個体の破片にもかかわらず、明確に色調の異なる破片が接合される状況がみられ（顕著な例では黄灰色と黒色）、これは二次焼成を受けたものと受けているものと考えられる。このことと炭層や焼土層・焼土塊の存在とを考え合わせると、当土坑の性格として住居火災後の廃棄坑という可能性も推察されよう。

出土遺物には広口壺（1~16）・太頸広口壺（17・18）・甕（19）・鉢（20）・石器（21・22）がある。以下、器種別に特徴を述べる。土器の法量等は表1にまとめた。

【広口壺】(1~16)

ア) 形態・法量

いずれもいわゆる a 形態とされる壺の範疇におさまるものと思われ、b 形態の壺は出土していない。形態により A~C の 3 類に分類できる。形態 A は張りが強く扁平な胴部を呈するもので、A→B→C と体部最大径の位置が上り、より丈高になるものである。分類の基準には下記の指數を設定し用いた。なお完形品以外についても、推定により分類できるものは含めた。

指數 1 = (器高 ÷ 体部最大径) × 100 …… 扁平率

指數 2 = (体部最大径の高さ ÷ 器高) × 100 …… 器高に占める体部最大径の位置
各形態と指數との関係は次のようにある。

A : 体部最大径 ≥ 器高 (指數 1 が 100 以下、指數 2 が 37 以下) … 1 ~ 5

B : 体部最大径 < 器高 (" 105 前後、 " 40 前後) … 6 ~ 7

C : 体部最大径 < 器高 (" 120 以上、 " 42 以上) … 8 ~ 12

法量は、容量では特大・大・中・小の 4 種類に分類でき、形態別では以下のようになる。

A	B	C
特大 : 約 25 ℥ 以上 (4 ~ 5)	-	-
大 : 約 14 ℥ (1 ~ 3)	-	約 13 ℥ (9 ~ 10)
中 :	7 ~ 10 ℥ (6 ~ 7)	約 7 ℥ (8)
小 :	-	約 3 ℥ (11 ~ 12)

特大としたものは形態 A にのみみられる。5 は残存部分で約 24 ℥ の容量を測り、全容量は 30 ℥ 近いものと思われる。頸部の太さからみて 4 もこのクラスのものであろう。

イ) 装飾・技法

装飾には貼付突帯文・沈線文・削出突帯文がある。形態 A・B ではいずれも頸部と肩部の両方に施され、形態 C の 8・9・10 は頸部のみで、小型の 11・12 は無文である。貼付突帯文は形態 A の 1・2 及び破片の 13 にみられ、2 は頸部に貼り付け突帯文、肩部に沈線文で、両文様が混在するのはこの 1 点のみである。2 の貼付突帯文は 1 本の粘土帯を分割している。1 の突帯貼り付け部には目印の沈線が認められる。貼付突帯文には圧痕が施され、2 は布目圧痕である。形態 B・C は沈線文のみである。削出突帯文は頸部の破片の 14 にのみみられ、低く幅広の削出突帯文上に沈線を施す。

2 の肩部沈線文は 7 条であるが、上・下端の沈線外側をヘラミガキにより低めることで段を成している。この手法が認められるのは他に 7 があり、頸部・肩部ともに上端の沈線外側に施されている。

8 の頸部の沈線文は他のものに比して下位に施されており、また頸部の立ち上がりが短かく、体部から「く」の字に屈曲して開く口縁部に至るという点でも他とは異なる。

10 は他の壺に比して口縁部が短く、また胴部の張りも弱いと思われ新しい様相といえる。

1 は口縁部に 2 個の紐穴を有する。

ウ) 調整・その他

調整はいずれもハケ・板ナデ・ナデ等の後ヘラミガキを施すもので、ヘラミガキには粗・密の差が認められる。沈線文が多条である 3・5・9 は外面の調整が難になっており、ヘラミガキが

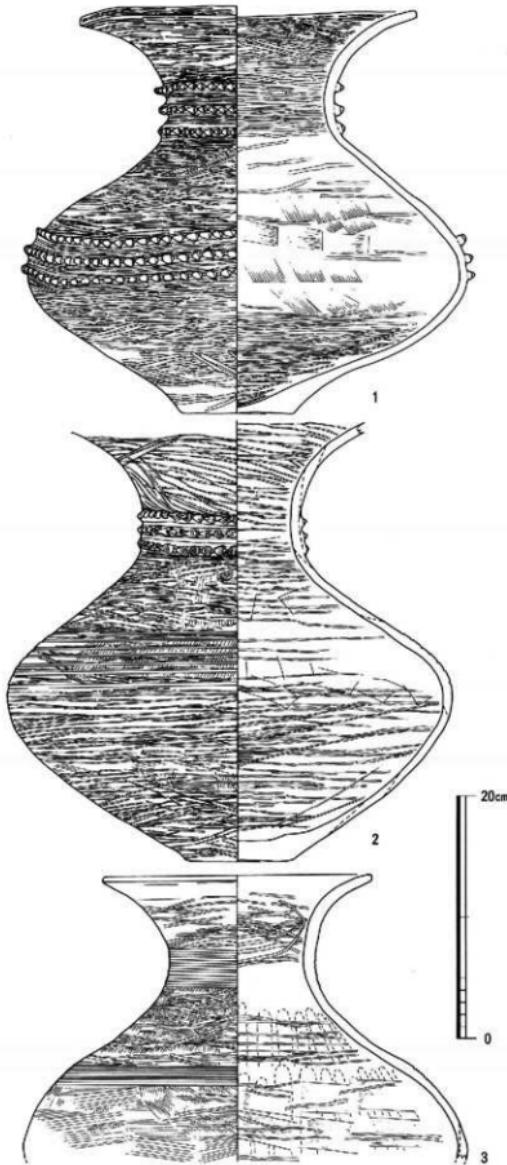
粗で先行するハケ・板ナデが明瞭に残っている。これは太頸広口壺(17)にも共通している。内面のヘラミガキは主に体部上半が雄で、施されないものもある(5・9)が、6のみこの部分が密になっている。ヘラミガキは横方向が主体であるが、肩部外面には斜方向(5・6)、頸部内面には縦方向(5・9)もみられる。1・2・6の底部～体部下位外面には分割ヘラミガキが施される。9・10の口縁部外面、5の胴部外面にはヘラミガキが施されていない。

器壁の厚さをみると、形態Aの1・2がやや薄手であるといえ、法量では小さい7・12がやや厚手となっている。

胎土では、角閃石を多く含み茶褐色系の色調を呈する生駒西麓産と考えられるものは2・4・5・9・16である。11・13・15もその可能性がある。他の色調は灰色～灰黄色系が主で、1が黄灰色を呈する。1には前述したように黒色を呈する破片が多く含まれ、二次焼成に起因するものと考えられる。

9の底部外面には中世の平瓦にみられる離砂状の砂が認められる。

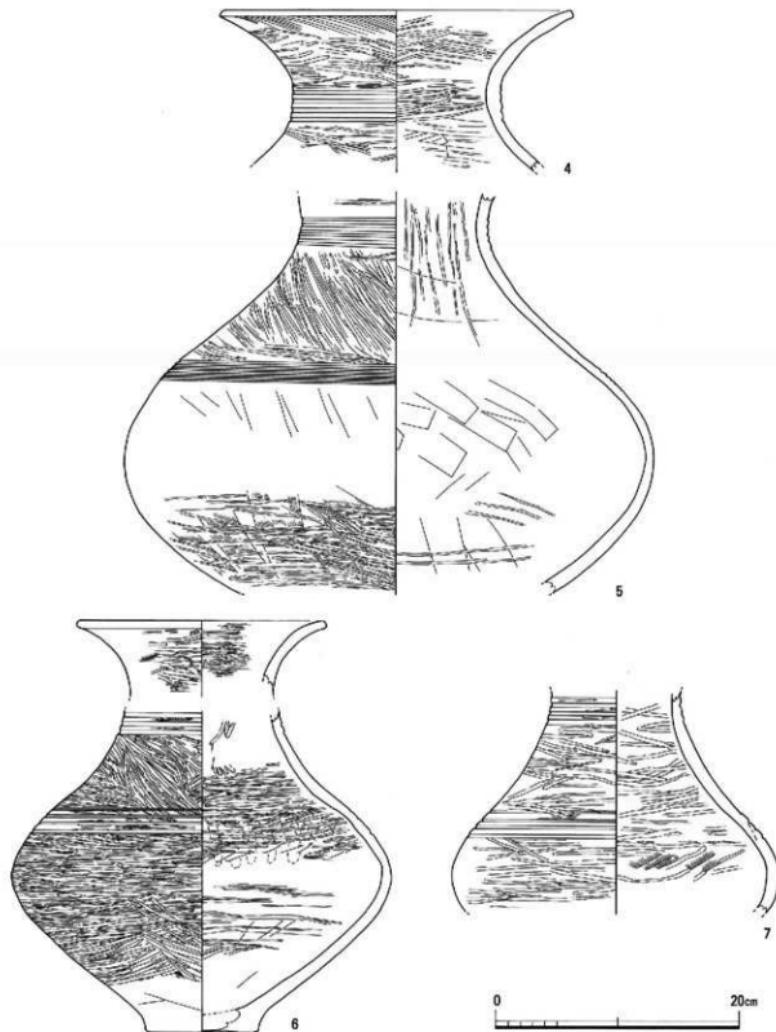
8・9の底部外面及び10



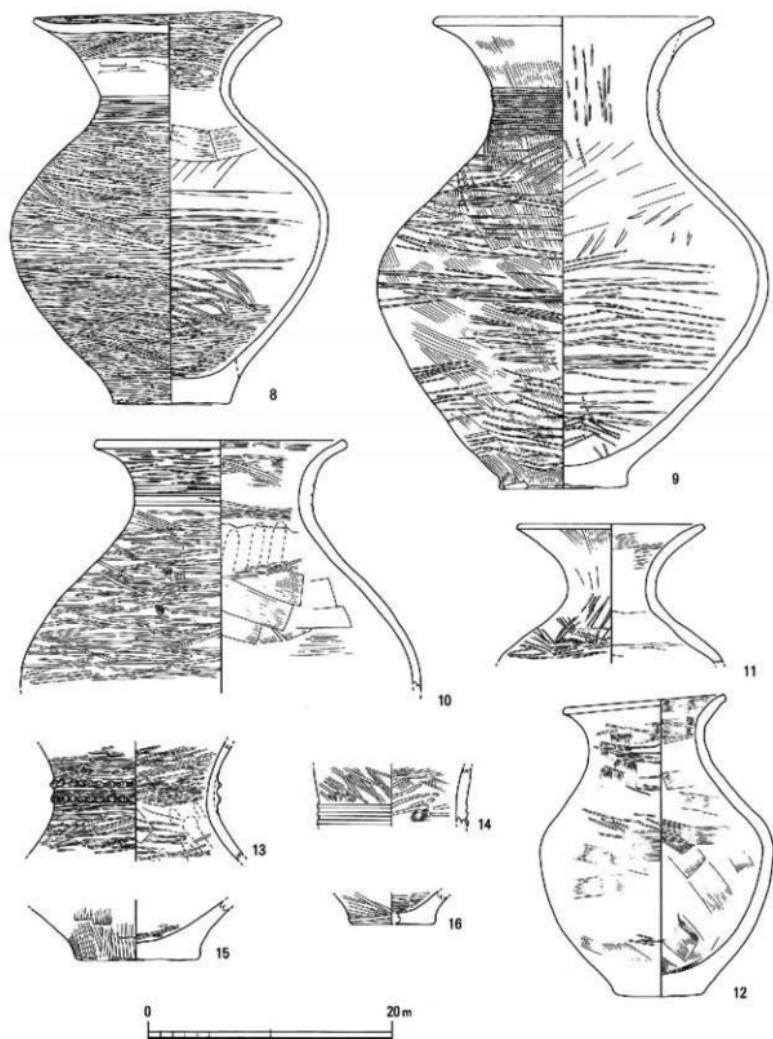
第4図 1区SK 1出土遺物① (S = 1/4)

の肩部外面には糊痕が遺存している。9には6粒が認められ、そのうち5粒は連続しており稲穂の状態であったと思われる。6の底部には内外面ともに焦げが認められる。1・12の外面胴部以下は、表面の剥離が著しい。

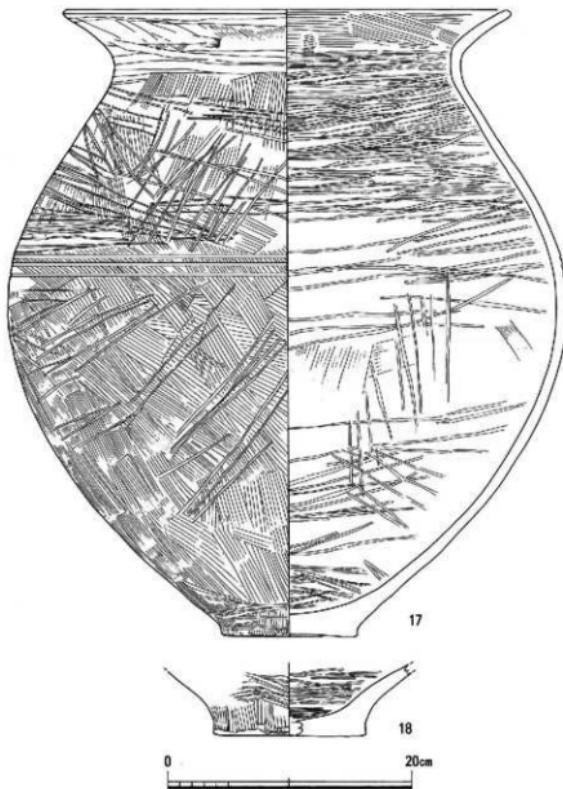
（出所） 熊谷市立博物館蔵



第5図 1区SK 1出土遺物② ($S = 1/4$)



第6図 1区SK1出土遺物③ (S=1/4)



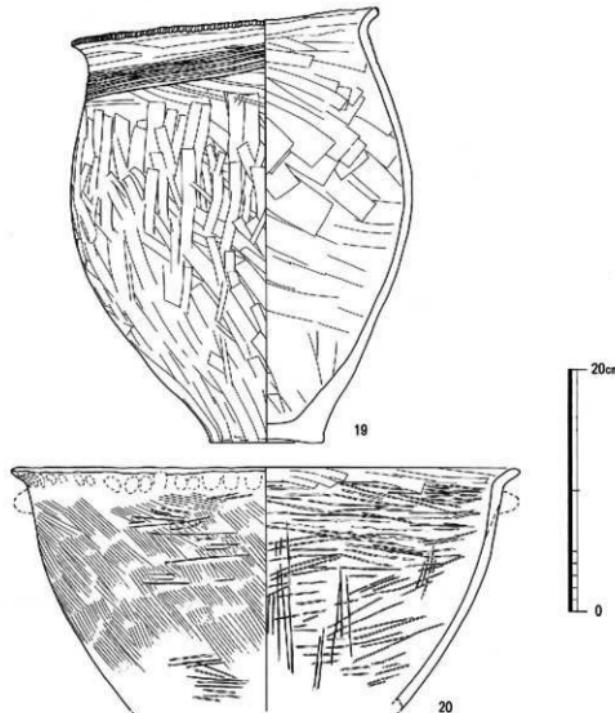
第7図 1区SK1出土遺物④ (S = 1/4)

【太頸広口壺】(17・18)

17は肩部に3条の沈線文を施す。調整はハケ後ヘラミガキである。ヘラミガキは内面の頸部～体部上位が密に施されるが他は粗であり、また口縁部には施されず、口縁部～頸部外面はハケ後ナデである。大型ではあるが器壁の厚さは広口壺とあまり変わらないといえる。色調は灰色系を呈し、胎土は生駒西麓以外であろう。

底部の外面が焦げ、内面には炭化物が付着しており、また外面に初痕1個が認められる。1と同様、二次焼成を受けたと思われる破片がある。外面に淡赤色を呈する部分がみられ、赤色顔料が塗布されている可能性がある。

18は底径の大きさから太頸広口壺としたが明確ではない。調整は17に類似しているが、ヘラミ



第8図 1区SK1出土遺物⑤ (S = 1/4)

ガキが底部外面最下位に及んでおらず、また17よりも密に施されている。胎土は生駒西麓産と考えられる。

【壺】(19)

体部最大径が口径をしのぐ形態のものである。口縁端部に刻み目、口縁部直下外面に5条の沈線文を施す。調整は内外面ともに板ナデで、底体部外面は縦方向、内面は底部縦方向、体部斜方向、そして口縁部は外面横方向に施される。底部はやや上げ底状を呈する。歪みが大きく傾いている。容量は広口壺の大に近似している。胎土は生駒西麓以外と思われ、17に類似する。

【鉢】(20)

口縁部直下外面に瘤状突起の剥離痕が認められる。調整は体部内面横方向へラミガキの後、縦方向に粗なヘラミガキ、外面左上リハケの後、粗に横方向へラミガキを施す。口縁部は外面にユビオサエによる凹凸を明瞭に残し、内面は横方向の板ナデである。胎土は壺(19)に類似する。

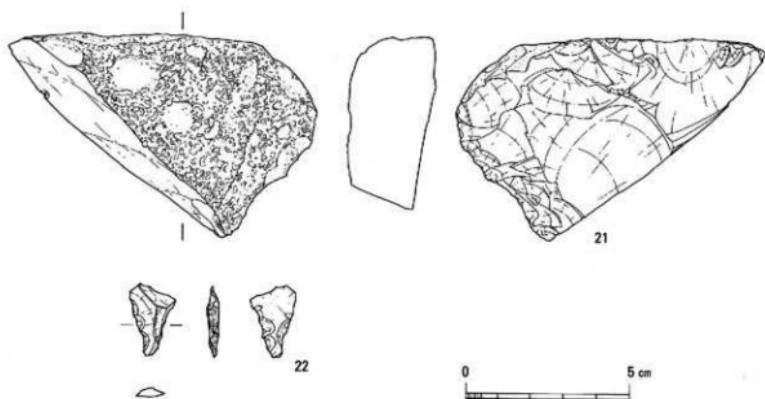
これらの出土土器の編年的位置付けについてであるが、寺沢・森井氏による河内地域の土器編年による『I-3様式』・『I-4様式』のものが含まれ、その過渡期にあたるものと捉えられる。その理由としては、『I-4様式』に存在するとされるいわゆるb形態の壺が認められず、a形態のみであることが挙げられる。今回形態Cとした9は、火高で沈線文も多条であり、また調整も粗雑で新しい要素を備えているといえ、b形態につながってゆく壺かもしれない。

表1 SK1出土土器一覧表

通 番 号	器種 形態	法 量				容 量 (ℓ)	重 量 kg	指 標	指 標	文様 (条数)		胎 土	備 考	残 存					
		口径 (cm)	器高 (cm)	体部径 (cm)	底径 (cm)					胎 土									
										1	2	頸部	肩部						
1	広口壺 A	27.5	33.2	36.0	9.1	13.620 12.247		大	92.2	34.6	貼 (3)	貼 (3)		焼けた破片 添みあり	ほぼ 完形				
2	広口壺 A		(36.2)	36.3	8.9	(14.672) 13.348		大	(99.9)	(37.3)	貼 (3)	布目狂底	沈 (7)	生駒	風斑	3/4			
3	広口壺 A	22.1		36.3		(約)14.0 (約)13.0 残存部 8.781		大			沈 (13)	沈 (9)				1/2			
4	広口壺 A	28.8						特大			沈 (4)	不明	生駒			1/1			
5	広口壺 A			43.2		(25以上) 残存部 24.285		特大			沈 (5)	沈 (6)	生駒	焼けた破片	体部 3/4				
6	広口壺 B	20.4	(33.0)	31.2	9.3	(9.515) (8.809)		中	(105.6)	(39.4)	沈 (3以上)	沈 (4)		底部内外面焦げつく		1/2			
7	広口壺 B			26.9		残存部 4.373		中			沈 (4)	沈 (4)				1/5			
8	広口壺 C	20.3	31.7	25.9	9.5	7.344 6.597		中	124.3	44.2	沈 (5)	無し		底部外面に粉痕1個 風斑		ほぼ 完形			
9	広口壺 C	22.8	38.8	32.0	10.4	12.858 11.827		大	121.4	42.5	沈 (10)	無し	生駒	底部外面に粉痕6個 “離れ砂状”		9/10			
10	広口壺 C	20.4		32.8		残存部 7.424		大			沈 (3)	無し				2/3			
11	広口壺 C	15.3						小			無し	無し	生駒?			1/3			
12	広口壺 C	13.4	24.3	19.1	7.4	2.960 2.792		小	127.2	49.4	無し	無し		黒斑 風化あり		4/5			
13	広口壺									貼 (2)			生駒?			1/4			
14	広口壺									削 (3以上)					極小				
15	広口壺			10.3								生駒?	黒斑		底部 のみ				
16	広口壺			7.2								生駒				1/4			
17	太腹 広口壺	36.7	51.4	47.8	11.2	47.467 44.980		112.3	51.6	無し	沈 (3)		外表面赤色顔料? 底部外面に粉痕1個 底座外面焦げ、内面に炭化物			1/2			
18	太腹 広口壺				12.5								生駒			1/2			
19	壺	25.5	35.8	28.2	9.4	13.127 12.552				沈 (5)				口縁部剥落目 添み大きい	ほぼ 完形				
20	鉢	42.0		39.2		(約)17.1 (約)15.6 残存部 16.103								瘤状突起の剥離痕		1/3			

※1 上段は全容量、下段は口縁部を除いた颈部以下の容量。容量の計算には火照回を用い、土器内部を高さ1cmの円柱の集合体と仮定する方法をとった。断面の内側を高さ1cmに分割し、中間の0.5cm部での半径を円の半径としている。

※2 脊：貼付突起部
沈：沈線文
削：削除文



第9図 1区SK1出土遺物⑧ (S=2/3)

【石器】(21・22)

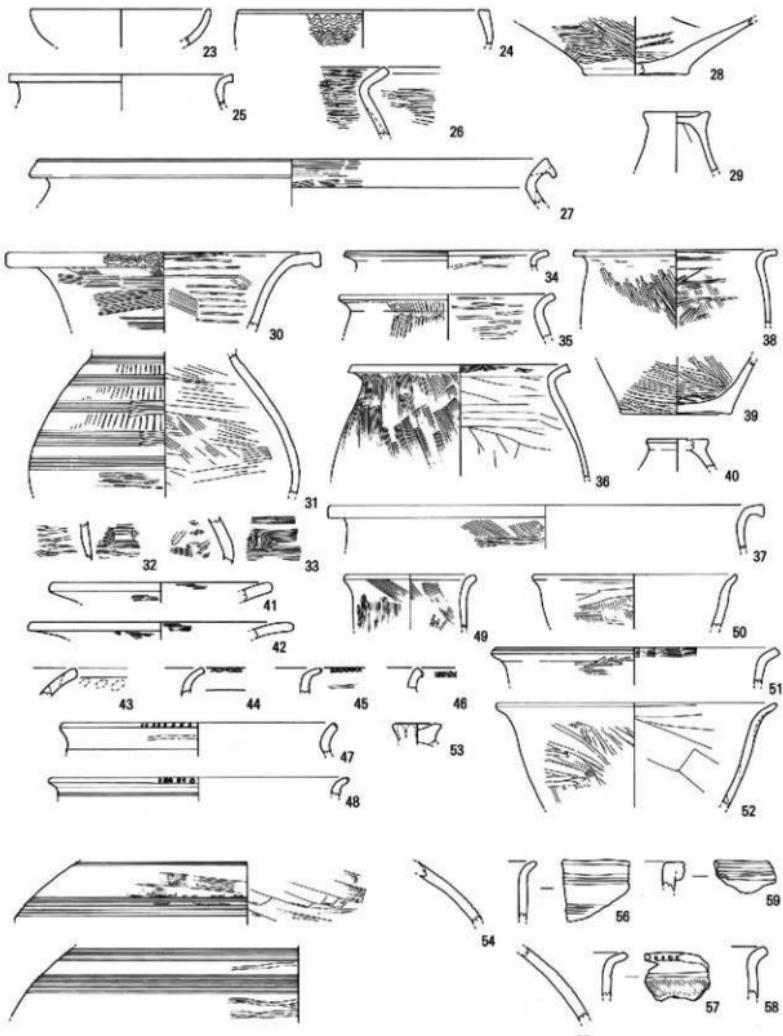
21は石核である。原石の角部分にあたるもので自然面を大きく残す。右面には多方向からの加撃による複数の剥離が認められる。22は石錐の断片の可能性があるが明確ではない。両側辺から調整剥離が施されているが、両面には主要剥離面が残る。先端は欠損している。共にサヌカイト製である。

c. 包含層出土遺物 (23~68)

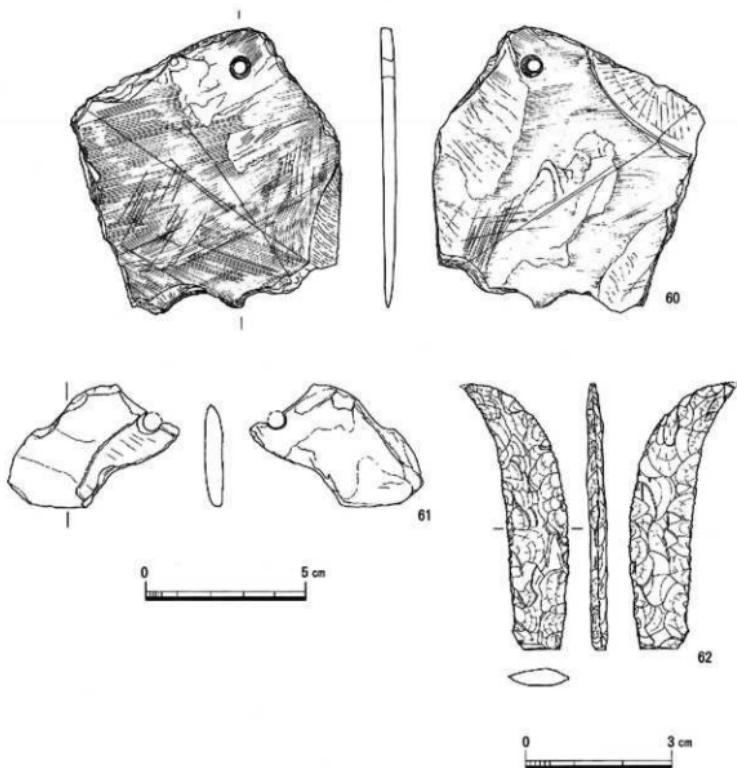
• 第8層 (23~29, 60・61)

弥生時代前期～中期の土器・石器が出土している。23は高杯と考えられるが明確ではない。外面に黒斑がある。24は鉢あるいは高杯で、外面に波状文を施す。甕 (25~27) は、内外面ヘラミガキを施す河内形甕 (26) が生駒西麓の胎土である。25の頸部外面には指頭圧痕が明瞭に残っている。27は形態的に『河内III-2様式』に比定される。甕 (28) は生駒西麓の胎土で、底部外面は分割ヘラミガキである。蓋 (29) は外面の全面が焼けている。

大型石庖丁 (60) は中央部分のみの破片のため全体の形状は不明である。刃部は断面図部分がわずかに遺存しているようであるが不明確で、また背部は長さ約1.2cmにわたって遺存しているのみである。紐孔は1個が残存しており、穿孔は両面からで、直径は4.5mmを測る。体部両面には主に横方向の細かい研磨痕が観察できる。破損した縁辺には素材の特徴である片理面が階段状に生じており、また表・裏面には線状を成す節理が認められる。石材は泥質片岩で、産地は和歌山県の紀ノ川流域に求められる。残存長8.3cm・最大幅8.7cm・最大厚約0.4cmを測る。石庖丁 (61) は、全体の1/3程度の破片であろう。形態は直線刃半月形に分類できる。紐孔は1個が確認でき、穿孔は両面からで、直径は約5.0mmを測る。刃部は摩滅のため断面は丸くなっている。表面に研磨痕はみられない。石材は玄武岩質凝灰岩質片岩で、60と同様に産地は紀ノ川流域に求められる。残存長5.3cm・残存幅3.8cm・厚さ約0.6cmを測る。



第10図 1区包含層出土遺物① (S = 1/4)

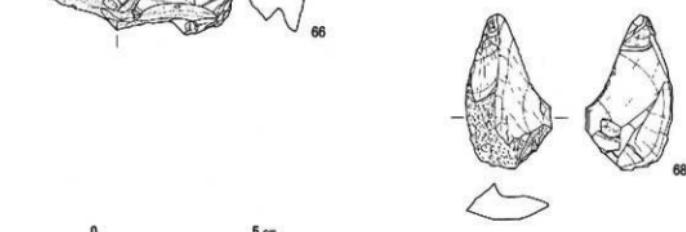
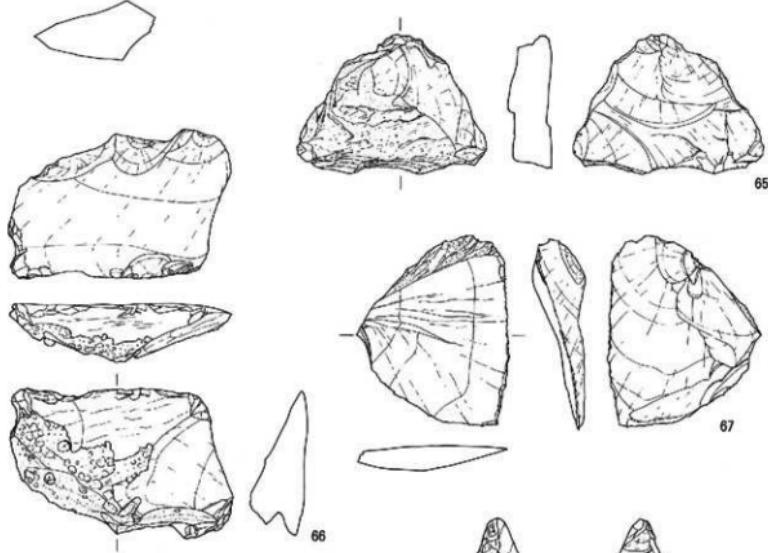
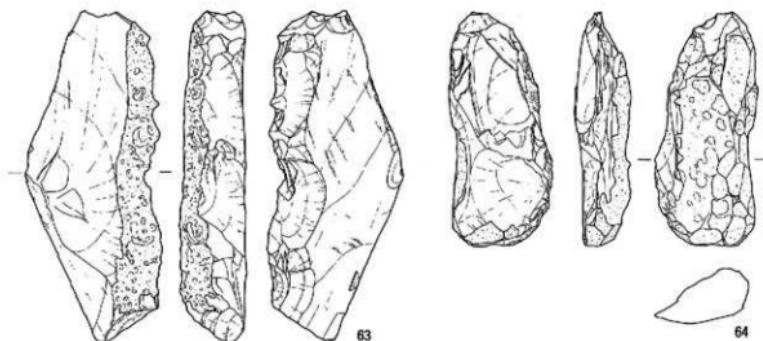


第11図 1区包含層出土遺物② (60・61: S = 2/3、62: S = 1/1)

・第9層 (30~53, 62~66)

弥生時代前期～中期の土器・石器が出土している。土器では30～40が中期、41～53が前期におむね比定されよう。壺(30)は口縁部外端面に櫛描波状文、頸部外面に櫛描直線文を施す。内面はハケ後ヘラミガキである。壺(31)の外面は縦方向ヘラミガキ後櫛描直線文を巡らせる。壺(32・33)・甕(34・35・37～39)は生駒西麓の胎土と思われる。甕(36)は外面ハケ調整で、色調は淡灰褐色、焼成は良好堅緻であり搬入品かもしれない。39は底部下面にもヘラミガキを施している。蓋(40)は外面が煤けている。

41～43は広口壺、44～48は甕の口縁部である。甕はいずれも口縁端部に刻み目を施し、46を除いて口縁部下位に沈線を巡らせる。46の口縁部は端部が尖り、外下方に肥厚させた部分に刻み目を施すもので、他とは趣が異なる。49は小型の甕であろう。50～52は鉢である。51は口縁部内面



第12図 1区包含層出土遺物③ (S = 2 / 3)

にヨコハケを施す。

62はサヌカイト製の右小刀で、非常に類例の少ないものである。法量は長さ5.45cm・幅1.30cm・厚さ0.35cm・重さ3.33gを測る。断面形状はレンズ状を呈し、幅厚比（幅÷厚さ）は3.7で、極めて薄形に分類される。両面とも両側刃から丁寧な調整剥離が施され、左面には中心に稜が生じている。刃部は非常に微細な鋸歯状（凸部数8～10個/cm）を呈している。先端部がわずかに欠損し、基部は凹面を呈する自然面のままである。丁寧な作りからみて弥生時代前期のものであろう。形態的には久宝寺遺跡出土のものに類似している。63～66はサヌカイトの刺片で、いずれも一部に自然面や主要剥離面を残すものの二次加工が認められる。このうち64・66は一辺に刃を形成しており、刃器として使用していた可能性がある。64は使用により刃が潰れているようである。

• 第10層上面 (54～59, 67・68)

弥生時代前期の広口壺 (54・55)・太頸広口壺 (56)・甕 (57・58)がある。中期の鉢 (59)は口縁端部を外側に折り曲げ、外端面に凹線を巡らせるものである。混入の可能性がある。

67・68はサヌカイトの刺片で、第9層出土のものと同様、自然面や主要剥離面を残すものの、二次加工が認められる。特に薄い刺片の67には微小な調整剥離が施され、刃器としての使用が窺える。

〈2区〉

a. 基本層序と出土遺物

第1層は盛土、第2層は旧耕土である。第4層からは須恵器片、第5層からは時期不明の上師器片・サヌカイト刺片が出土している。第5層上面で溝1条 (SD 1) を検出した。標高約8.0mの第8層以下は水成層の様相を呈している。第11層の植物遺体を多く含むシルト層上層から上面にかけては、弥生時代前期～古墳時代前期布留式期の上器・石器が混在して多く含まれている。土器はやや摩滅したものが多い。

b. 検出遺構と出土遺物

SD 1

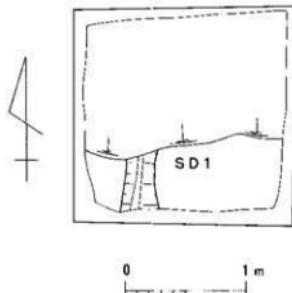
調査区南半、第5層上面で検出した南北方向の溝である。検出長約0.5m・幅約25cmで、南壁では幅約60cmを測る。断面V字状を呈し、深さ約20cmを測り、埋土は褐色灰色微砂泥じりシルト質粘土である。弥生土器・須恵器片が出土しているが図化しえるものはなかった。層位的にみて古墳時代以前の溝であろう。

c. 包含層出土遺物

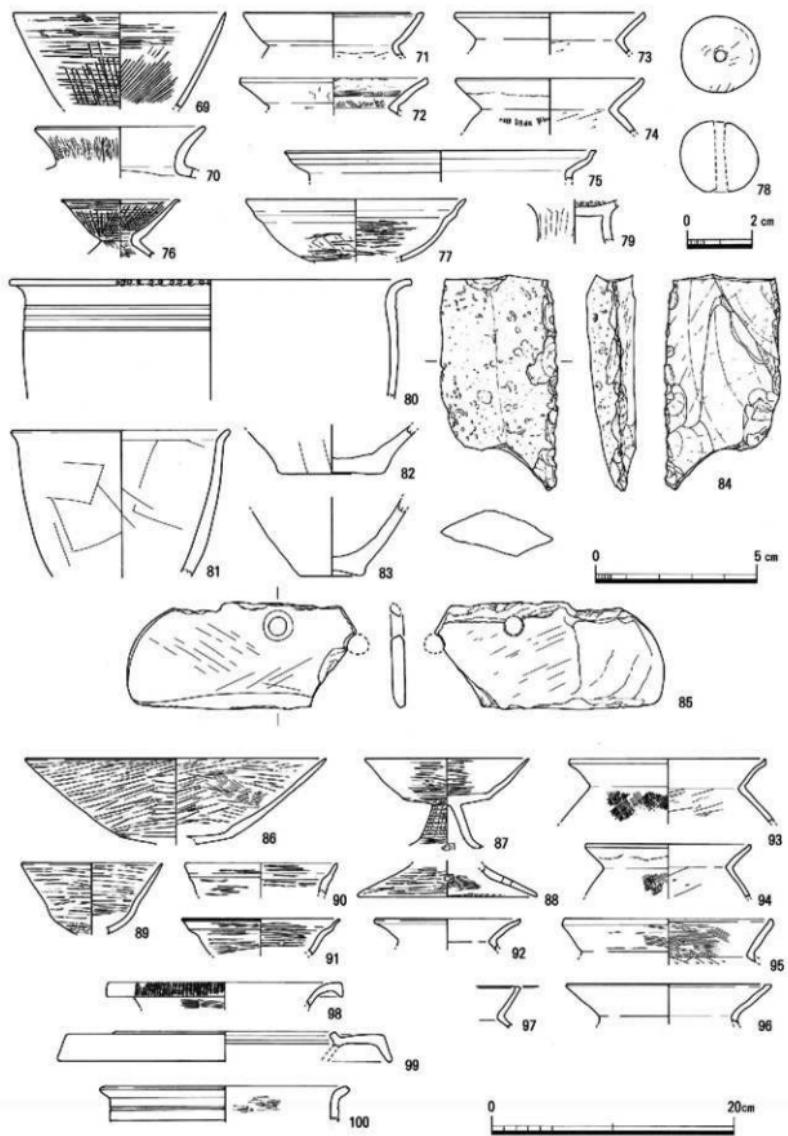
• 第11層上層～上面 (69～85)

古墳時代前期の壺 (69・70)・甕 (71～75)・鼓型器台 (76)・鉢 (77)・十玉 (78)、弥生時代中期の高杯 (79)、前期の甕 (80)・鉢 (81)・底部 (82・83)・右器 (84・85)を図化した。古墳時代前期の土器は庄内式期新相～布留式期古相に比定される。

甕 (75)は焼成良好で非常に硬質である。鼓型器台 (76)は山陰地方からの搬入品であろう。



第13図 2区 平面図 (S = 1/40)



第14図 2・3区出土遺物 (78・84・85: S = 2/3、他はS = 1/4)

特異な遺物として土玉(78)がある。直径約2.4cmの球形を呈し、貫通する穴を有する。土製装身具に分類されているもので、河内地域では舟井遺跡・山賀遺跡等に類例がある。高杯(79)と共に生駒西麓産の胎土である。底部(82・83)は1区間～2区間の下水管付設工事の際に出土したもので、詳しい山上地点・層位等は不明である。82は壺、83は不明である。

84は左面に自然面を大きく残すサヌカイト剥片で、断面形状は菱形を呈する。長側辺に調整剥離が施され刃を形成しており、刃器として使用していたと考えられる。上部は欠損し、基部は自然面のままである。形状からみて石槍等の製作を意図していたものかもしれない。石庖丁(85)は全体の1/2程度の破片であろう。背部が欠損しているが、側部の形状からみて形態は直線刃半月形と思われる。紐孔は2個が確認でき、直径は約5.5mmを測る。穿孔は片面が剥離しているため明確ではないが、両面からと思われる。刃部は端部が欠損しているが片刃の可能性がある。表面には明瞭な研磨痕は認められない。石材は61と同様玄武岩質凝灰岩質片岩で、産地も紀ノ川流域に求められる。残存長7.1cm・残存幅3.3cm・厚さ約0.5cmを測る。

〈3区〉

a. 基本層序と出土遺物

第1層は盛土で、旧耕土はみられなかった。第4層からは古墳時代以降の須恵器・土師器片、第5層からは時期不明の須恵器・土師器片が出土している。標高約7.9m以下の第6～9層は微砂～粘土の互層状で、水成層の様相を呈している。第10層には弥生時代～古墳時代前期布留式期の土器が多く含まれており、土器はあまり摩滅していない。当地の北西約100mでは標高約7.1mで弥生時代後期・庄内式期・布留式期の遺構が検出されているが、第10層が布留式期の包含層として捉えられるかどうかは明確にはしえなかつた。

b. 包含層出土遺物

・第10層(86～100)

古墳時代前期の高杯(86～88)・小型丸底壺(89)・鉢(90・91)・甕(92～97)、弥生時代中期の壺(98)・高杯(99)、前期の甕(100)を図化した。古墳時代前期の土器は庄内式期新相～布留式期古相に比定される。

高杯(86)は杯部のみ約2/3が残存しており、口縁部外面には黒斑を有する。甕(98)は口縁端部に簾状文、頸部に櫛描直線文を施すもので、生駒西麓の胎土である。

〈4区〉

a. 基本層序と出土遺物

第1層は盛土、第2層は旧耕土である。第5層からは時期不明の須恵器・土師器片が出土している。第6・7層は固く締まっており整地層の可能性があるが、上面で造構はみられなかつた。標高約8.1m以下の層厚約0.6mを測る第9層は微砂～シルトの互層状を呈する水成層である。時期不明の土器片が出土している。この下位に統く第10～12層にも植物遺体が含まれ、水成層の下部とも捉えられる。弥生時代後期の土器、サヌカイト剥片が出土している。図化しえる遺物はなかつた。

〈5区〉

前述のように、掘削土中からの遺物採集を実施した。標高7.5m付近の暗灰色粘土層から、弥生時代前期～中期頃の土器片数点を検出したが、明確な層位等は不明で、図化しえる遺物はなかつた。

3.まとめ

今回の調査では弥生時代前期から中世頃の遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ5箱を数える。

弥生時代前期では、1区で土坑1基（SK1）を検出した。火災後の焼棄坑の可能性があり、多量の土器片が隙間なく密に山上しており、完形近くに復元しえる土器も多く含まれている。遺構が調査区外に続き完掘しえなかったことは惜しまれるが、土器は前期の新段階に比定されるもので、当該期の上器研究における良好な一括資料として評価されよう。

遺構面上部の弥生時代前期～中期の遺物包含層は非常に厚く、当地は集落の中心と捉えることができよう。南西約150mの第12次調査においても同様の状況が確認されており、同じ集落域に含まれるのかどうか、また南部第13次調査で検出されている中期末の環濠との関係についても周辺の調査成果を待ちたい。

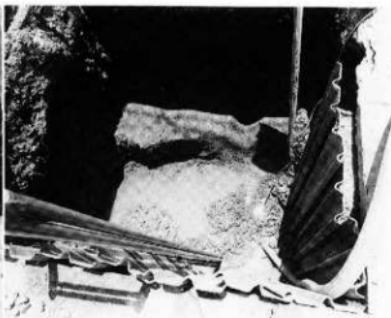
古墳時代前期では遺構は検出されなかった。しかし北西部の3区では、南部第13次調査で検出している河川から続くと思われる河川堆積層の下層から、遺存状況の良好な土器が出土しており、北西部第23次調査で確認されている当該期の集落域が拡がっているものと捉えられる。

註

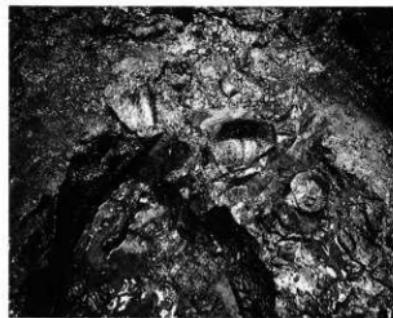
- 註1 坪田真一 1994「2. 跡部遺跡第12次調査」『平成5年度助八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註2 坪田真一 1994「3. 跡部遺跡第13次調査」『平成5年度助八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註3 西村公助 1997「1 跡部遺跡（第10次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註4 原田昌則 1997「2. 跡部遺跡第23次調査」『平成8年度助八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註5 安井良三・成海佳子 1991『跡部遺跡発掘調査報告書』助八尾市文化財調査研究会
- 註6 寺沢 煉・森井貞雄 1989「2-1 河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編I』木耳社
- 註7 森本 晋 1985「5. 石小刀」『弥生文化の研究5 道具と技術I』雄山閣出版
- 註8 佐伯公了・他 1993「第IV章 第3節 石器」『河内平野遺跡群の動態VI』大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
- 註9 角南聰一郎・吉田和彦 1996「弥生～古墳時代の土製装身具・覚書」『みづほ 第19号』大和弥生文化の会



1区 第10層上面（北から）



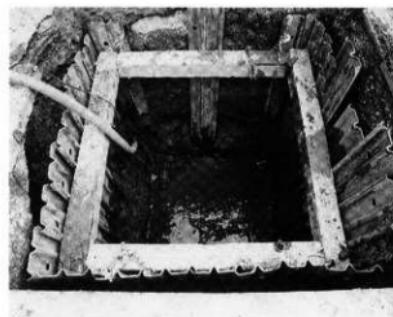
2区 第5層上面（北から）



2区 第11層上面土器出土状況（東から）



3区 第6層上面（南から）



4区 最終面（北から）



5区 挖削風景（北から）



1区 SK1 (西から)



1区 SK1 (北から)



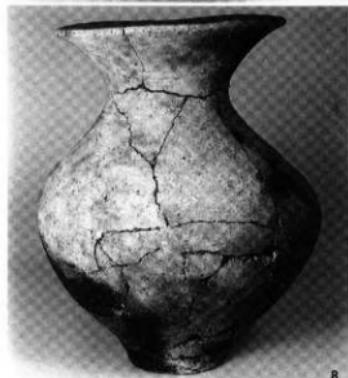
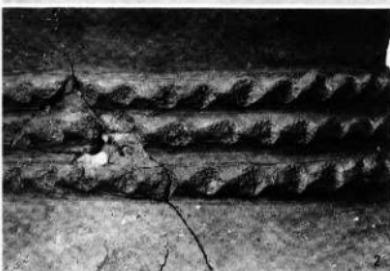
1



3



2



8



9

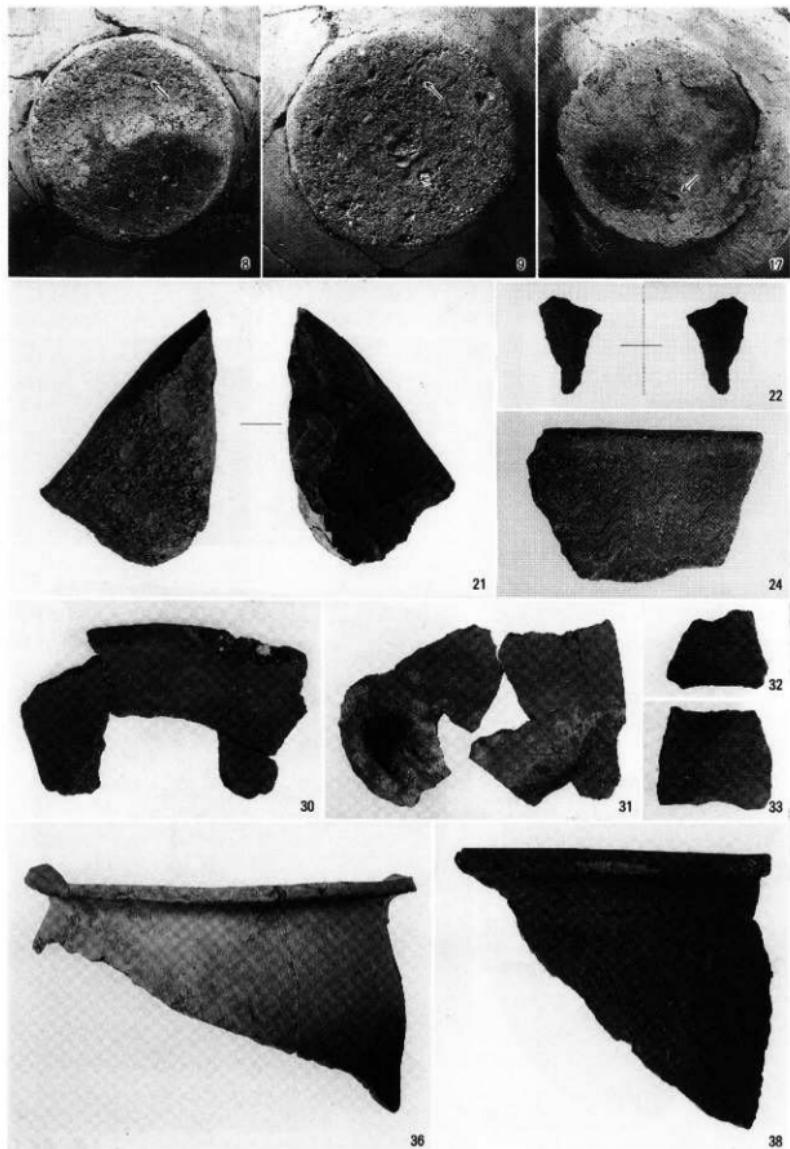
1区 SK1



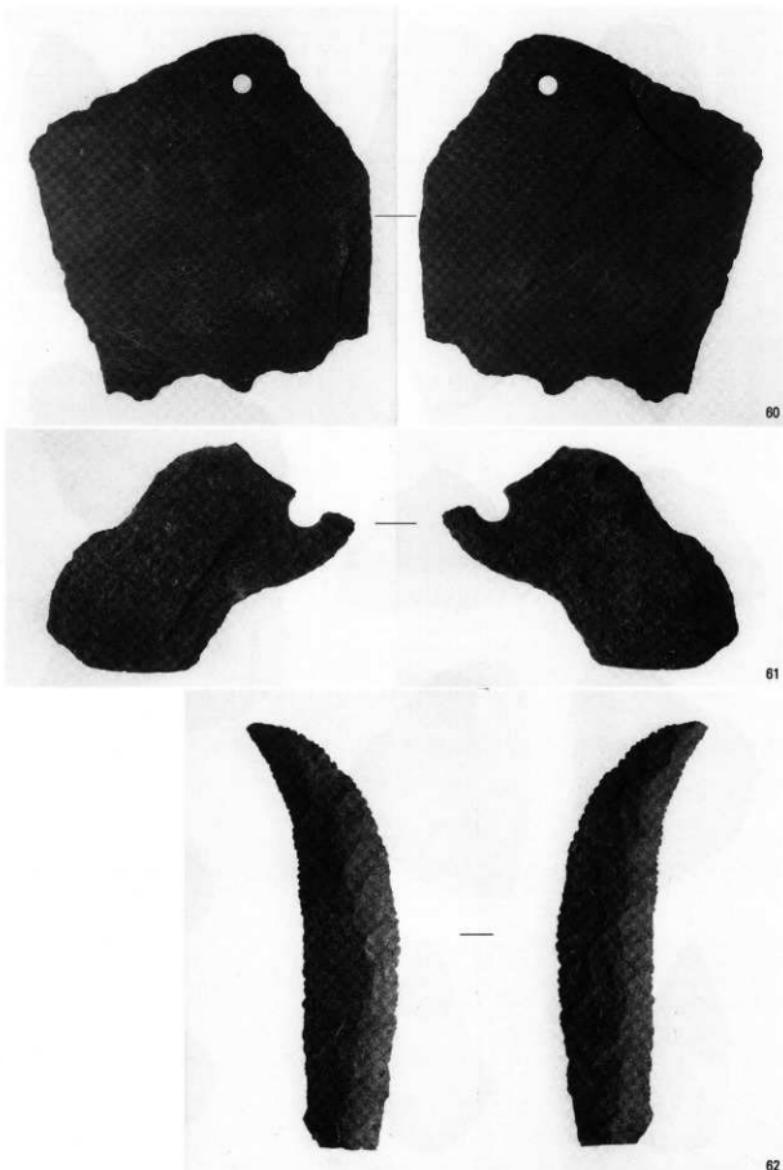
1區 SK 1



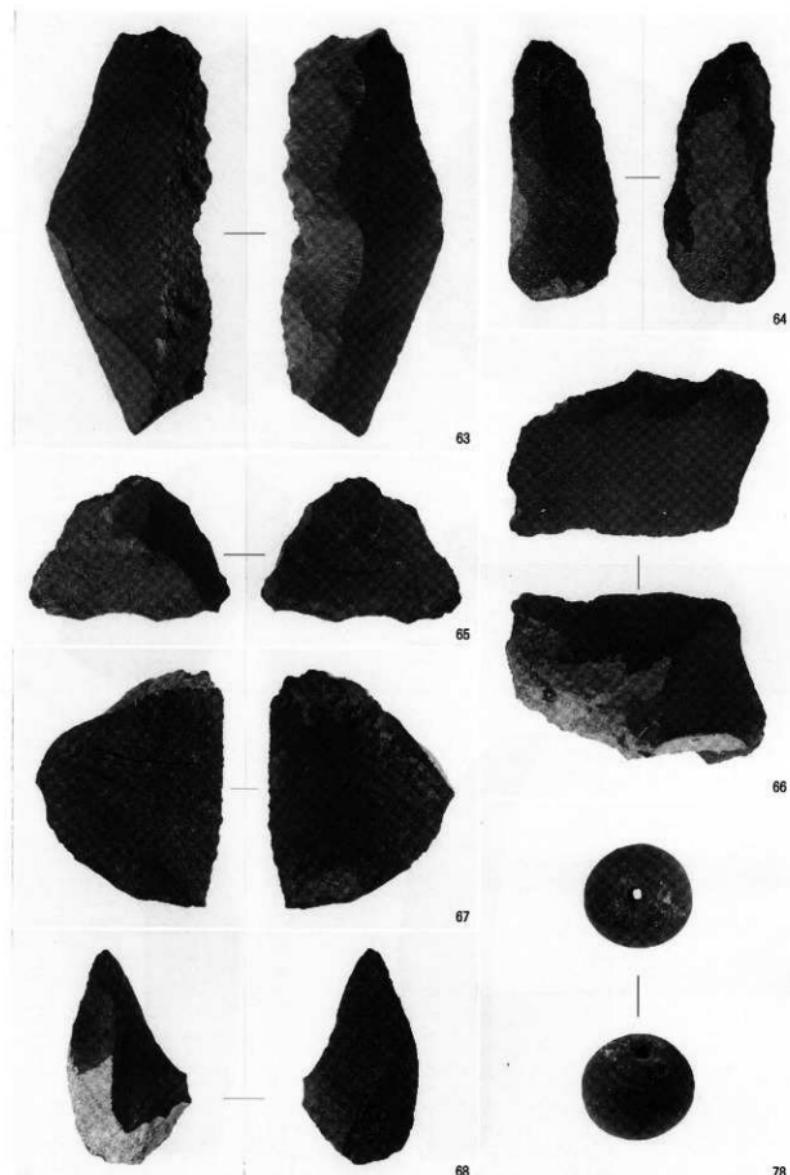
1区 SK1



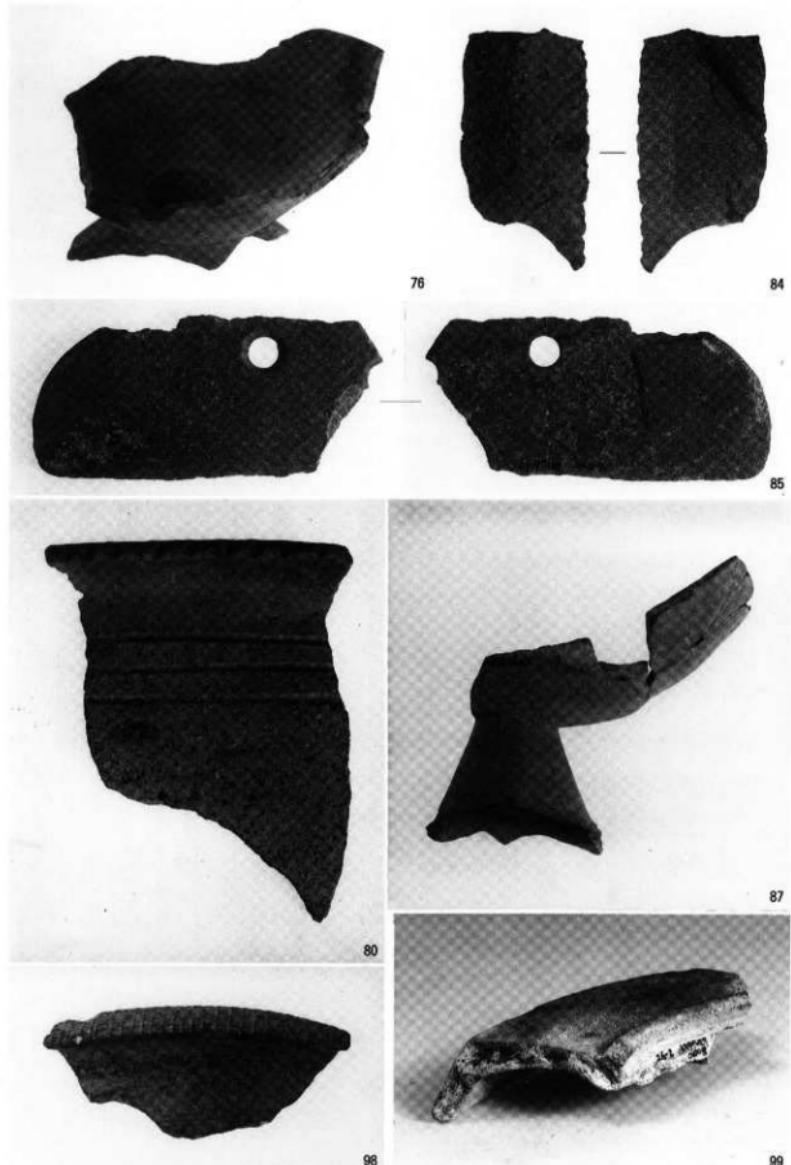
1区 SK 1 (8・9・17・21・22)、第8層 (24)、第9層 (30~33・36・38)



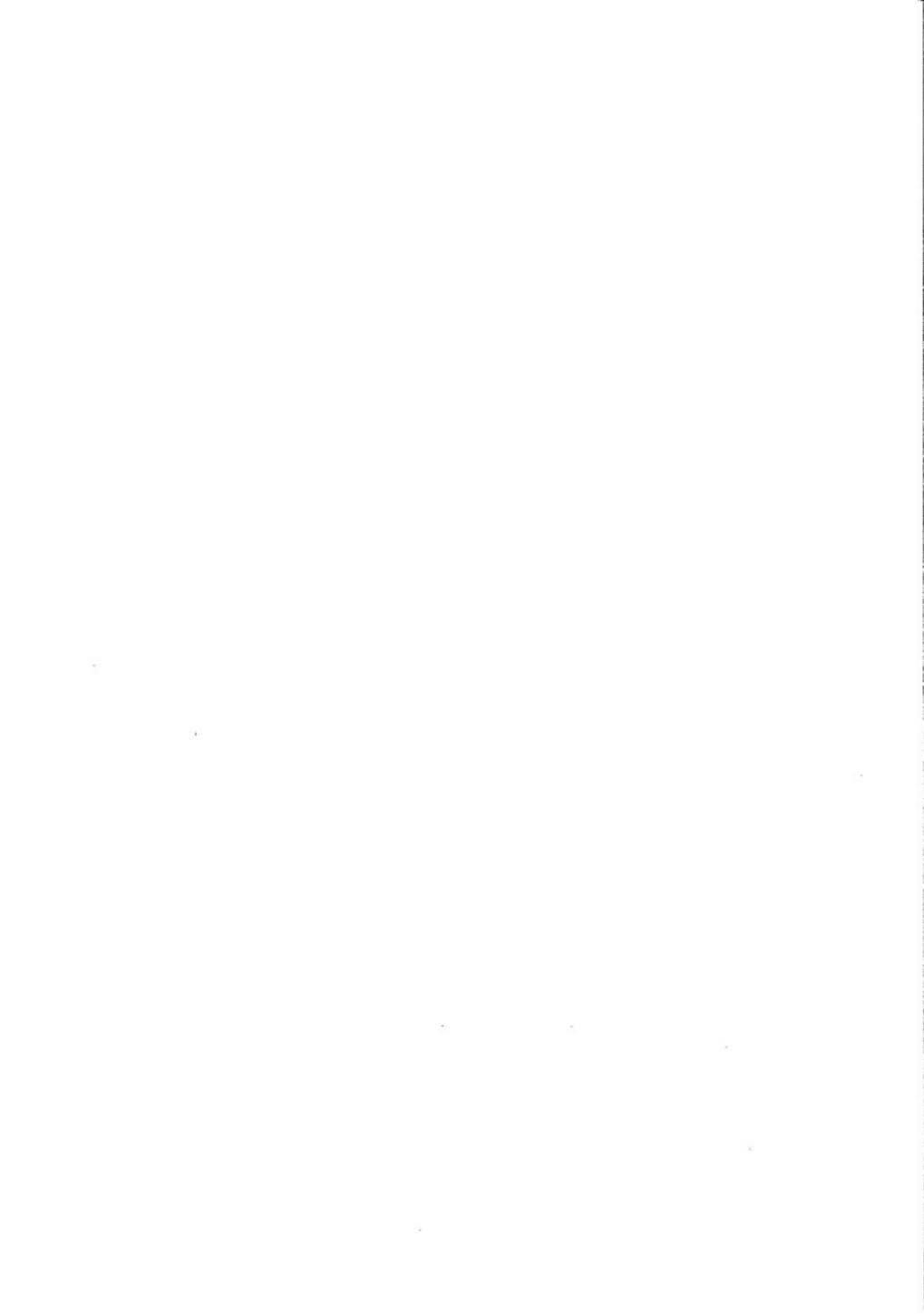
1区 第8層(60・61)、第9層(62)



1区 第9層(63~66)、第10層(67・68)、2区 第11層(78)



2区 第11層 (76・80・84・85)、3区 第10層 (87・98・99)



IV 亀井遺跡第6次調査(KM97-6)

調査報告書

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市南龜井町4丁目44-1, 44-4, 45-1で実施した配達センター工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する龜井遺跡第6次調査(KM97-6)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第埋442-2号 平成9年10月7日)に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が(株)カントラから委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成9年10月22日から10月30日(実働7日)にかけて、高萩千秋を担当者として実施した。調査面積は約174m²を測る。なお、調査においては八田雅美・中谷嘉多・市森千恵子が参加した。
1. 本書に関わる業務は、図面レイアウト・トレースー高萩が行った。
1. 本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

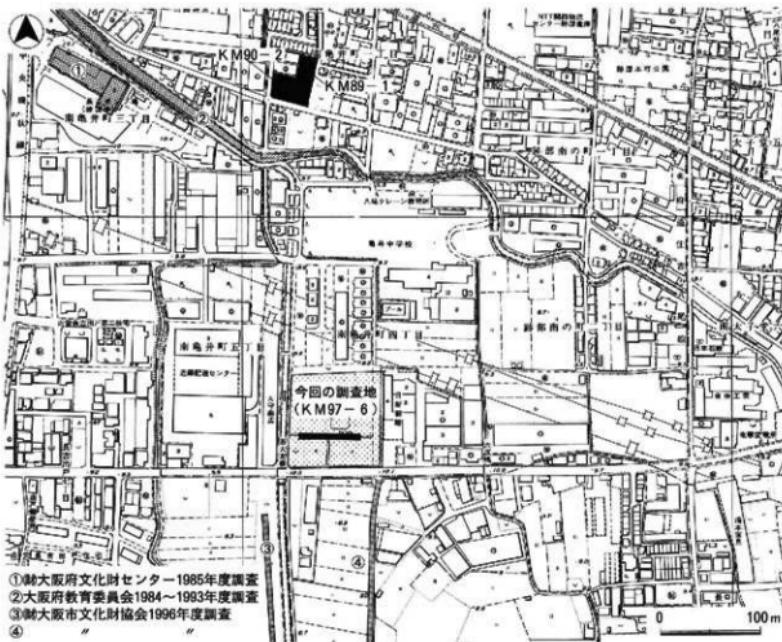
1.はじめに.....	51
2.調査概要.....	52
1) 調査の方法と経過.....	52
2) 基本層序.....	53
3) 検出構造と出土遺物.....	53
3.まとめ.....	55

IV 龜井遺跡第6次調査（KM97-6）

1. はじめに

亀井遺跡は、八尾市南西部の亀井町・南亀井町一帯に所在しており、周辺には北東部に跡部遺跡・北西部に竹測遺跡、北部に久宝寺遺跡・南部に大阪市長原遺跡などがある。今回の調査地周辺では、これまでに大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター（現在、財団法人大阪府文化財調査研究センター）・八尾市教育委員会・当調査研究会による発掘調査がそれぞれの機関で行われており、その結果、縄文時代～近世に至る遺構・遺物が検出されている。特に弥生時代中期の集落遺構が広範囲に存在することが確認されている。

今回の発掘調査は当遺跡範囲の南部付近に位置し、道路を挟んで南側は大阪市域にあたる。調査は当調査研究会が当遺跡内で実施する第6次調査である（第1図）。調査地の近隣では、当調査区より西部へ約300～500mの付近で(財)大阪文化財センターが昭和54～61年度にかけて近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査を断続的に行い、弥生時代～近世の遺構・遺物が多数検出されている。北部へ約200～400m付近で大阪府教育委員会が昭和53年度から断続的に行われている平野川河川改修工事に伴う発掘調査で弥生時代中期の遺構・遺物を検出している。さらに道路を挟んで南部へ約100～200mの付近の大坂市域である長吉出戸7丁目・長吉六反1丁目で(財)



第1図 調査地周辺図及び位置図（S = 1/5000）

大阪市文化財協会が平成8年度に長吉東部地区区画整理事業に伴う発掘調査を行い、古墳時代後期～飛鳥時代にかけての遺構・遺物が検出されている。

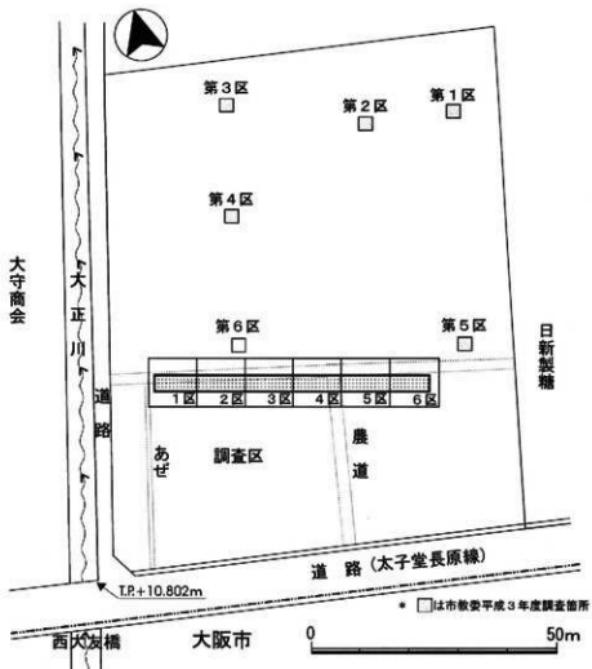
2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は配達センター建設工事に伴うもので、基礎工事によって破壊される部分に幅3m、長さ約58mを測る東西方向のトレーナーを設定し、現地表下約1.6mまでを機械掘削、以下0.2m前後を人力掘削として調査を進めた。

掘削の方法は市教委の遺構確認調査結果をもとに、現地表(T.P.+9.1m)下1.6m前後の土層を機械により排除した後、以下0.2m前後の土層について人力掘削および精査を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。

地区割りについては、調査区西部に任意の基準点を設定し、南北軸を磁北方向より東に22度振り調査区区画に合わせた。区画は調査区範囲を包括できる南北10m、東西60mに10m角の方眼を作成した。区名は基準点より東の南北軸から東へ1区～6区を付称した。



第2図 調査区位置図 (S = 1/100)

2) 基本層序

- 第1層 現耕土・盛土 (層厚60~70cm)。上面は調査前まで水田耕作をしていた。耕上は数年前に土盛りしており、上部20cm前後はマサ上、下部は工事掘削などの残土である。現地表面は標高 (T.P.+) 9.1m前後を測る。
- 第2層 旧耕土 (層厚0~15cm)。昭和の中ごろまでの耕作土としていた層である。
- 第3層 淡灰茶色粘質シルト (層厚0~20cm)。耕作土の床土である。
- 第4層 淡灰茶色粘質土 (層厚20~40cm)。平安時代末~鎌倉時代に整地された七層と思われる。
- 第5層 淡灰茶色粘土 (層厚10~20cm)。平安時代末以前の上層で、耕作土層が考えられる。
- 第6層 乳灰色粘土 (層厚30cm)。褐色の斑点が多数みられる。
- 第7層 褐灰色シルト (層厚20cm)。
- 第8層 暗褐灰色粘質シルト (層厚10~30cm)。奈良時代ごろの遺物を少量含む層である。
- 第9層 暗灰茶色シルト (層厚20cm前後)。
- 第10層 乳灰茶色微砂 (層厚20cm前後)。
- 第11層 茶灰色~青灰色シルト (層厚30cm以上)。上面で標高7.5~7.7mを測る。奈良時代ごろのベース面である。

3) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表下約1.6m (標高7.7m) の第8層上面で平安時代の溝1条 (SD-1)、現地表下約1.6~1.8m (標高7.5~7.7m) の第11層上面で落込み遺構4ヶ所 (SO-1~SO-6) を検出した。遺物は遺構及び包含層内からコンテナにして約1箱分が出土した。以下、検出した遺構について記す。

溝 (SD)

SD-1

調査区の北東部(5区)で検出した南北方向に伸びる溝である。SO-4を切り、南北ともに調査区外に伸びる。検出長約3.0m、幅約0.4~0.5m、深さ約0.1mを測る。堆積土は灰褐色粘質シルトで、断面凹状形を呈する。遺物は出土しなかった。この溝は奈良時代の遺構を切っており、それ以後の時期のものと考えられる。

SO-1

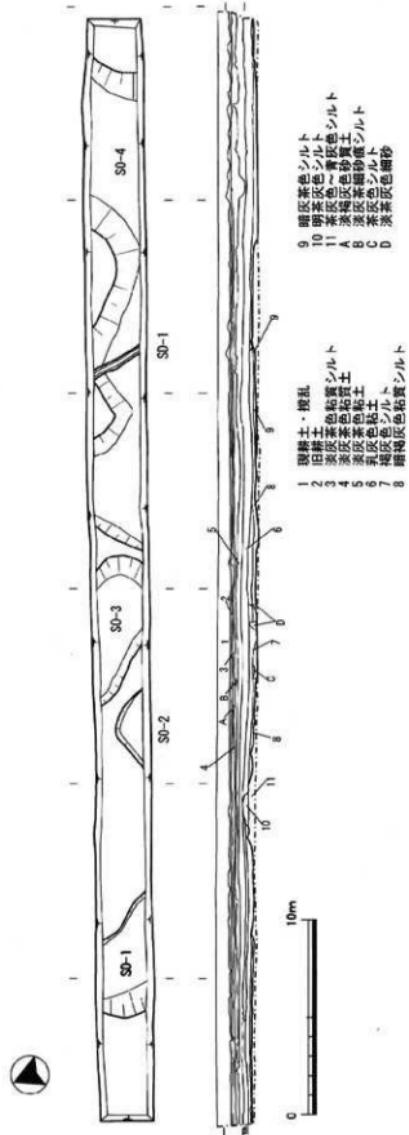
調査区の西部(1・2区)で検出した落込み遺構で、南北は調査区外に至る。検出部では東西幅約5.0m、南北幅3.0m、深さ約0.3mを測る。堆積土は暗褐灰色粘質シルトである。遺物は中村編年V-1段階に比定される須恵器杯身の小片を出土している。

SO-2

調査区の西部(3区)で検出した南部の調査区外に至る。検出部では東西幅約4.0m、南北幅約1.7m、深さ約0.2mを測る。堆積土は暗褐灰色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

SO-3

調査区の西部(3区)で検出したが、南部は調査区外に至る。検出部では東西幅約7.0m、南北幅3.0m、深さ約0.3mを測る。堆積土は暗褐灰色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。



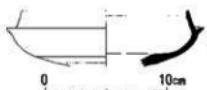
第3圖 平断面図 ($S = 1 / 250$)

SO-4

調査区の西部（6区）で検出したが南部は調査区外に至る。検出部では東西幅約25.0m、南北幅3.0m、深さ約0.2mを測る。堆積上は暗褐色灰色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

3) 遺構に伴わない出土遺物

調査区で検出された層序の第4層・第5層・第8層で土器を主とする遺物を出土している。第4層・第5層は平安時代～鎌倉時代の土師器・瓦器などの磨耗した小片である。器種などの判別が若干わかる程度であった。第8層は古墳時代後期～奈良時代にかけての土師器・須恵器などの小片である。器種では土師器の皿、須恵器の杯身など小片である。唯一、図化できたものは中村編年でいうⅢ型式に属する須恵器の杯身（1）である。色調は青灰色で口径13.6cm、受部径16.2cm、器高4.6cmを測る。時期は6世紀前半ごろと思われる。



第4図 第8層出土遺物実測図 (S = 1/4)

3.まとめ

今回の調査区は、調査地の中央付近で東西に長いトレンチの調査であった。調査の結果、奈良時代から平安時代前期の生産域に関連する遺構・遺物を検出することができた。

調査地では、平成3年度市教委の遺構確認調査（試掘孔6箇所）で調査地全域に水田相当層が存在することが確認されている。そのなかの調査地南西部に位置する第6区と呼称する箇所から須恵器の瓶子がほぼ完形で出土しており、当初集落域と生産域を境とするものと考えられていた。今回の調査区はその南部にあたり、市教委の想定された集落域の可能性が考えられたが、結果、集落域ではなく、生産域の範疇に入るものであった。

のことから、遺構確認調査で出土したほぼ完形の瓶子は農作や地鎮などの祭祀的な遺構を検出したものと考えられる。この時期（7～13世紀）は条里制による大規模な開発が行われており、大きな水田区画がなされている。当地もその条里区画の範疇に入り、丹比郡条里の北部にあたる。

調査区より南部へ約100mの大坂市域で実施された区画整理事業に伴う発掘調査では古墳時代後期～飛鳥時代の建物跡などの集落遺構を検出しており、大阪市域側に集落域が想定される。

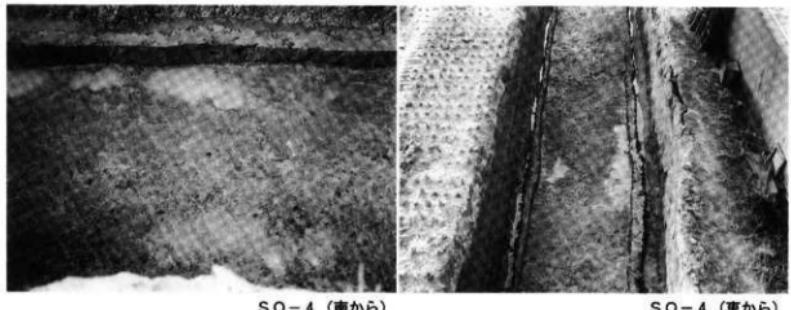
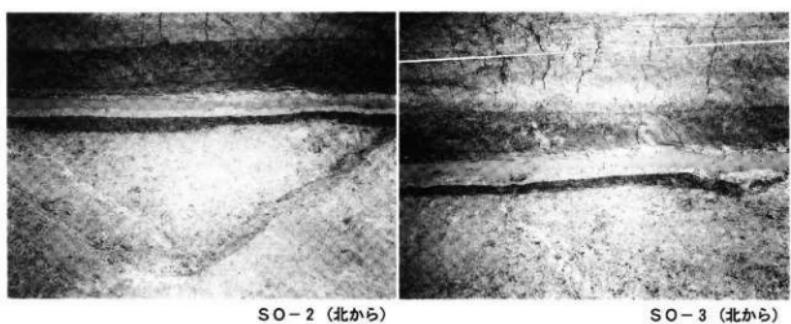
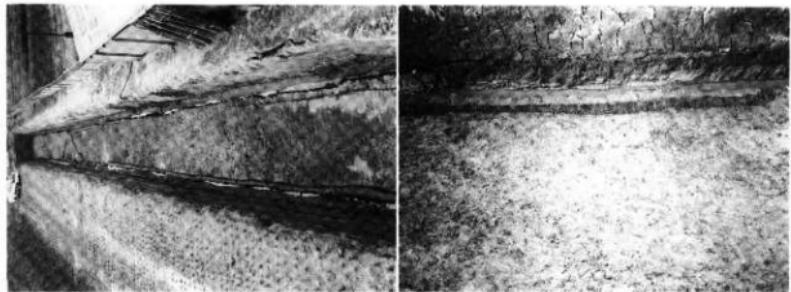
上層では削平を受けたかは不明であるが、今回の調査では平安時代末～鎌倉時代に整地したと思われる上層を確認しており、それ以後も生産域としての土地利用が今まで続いていたものと思われる。大阪中央環状線開通以降、当地周辺は産業地域化しており、（丹比郡）条里区画された田園風景が消滅しつつある状況下にある。

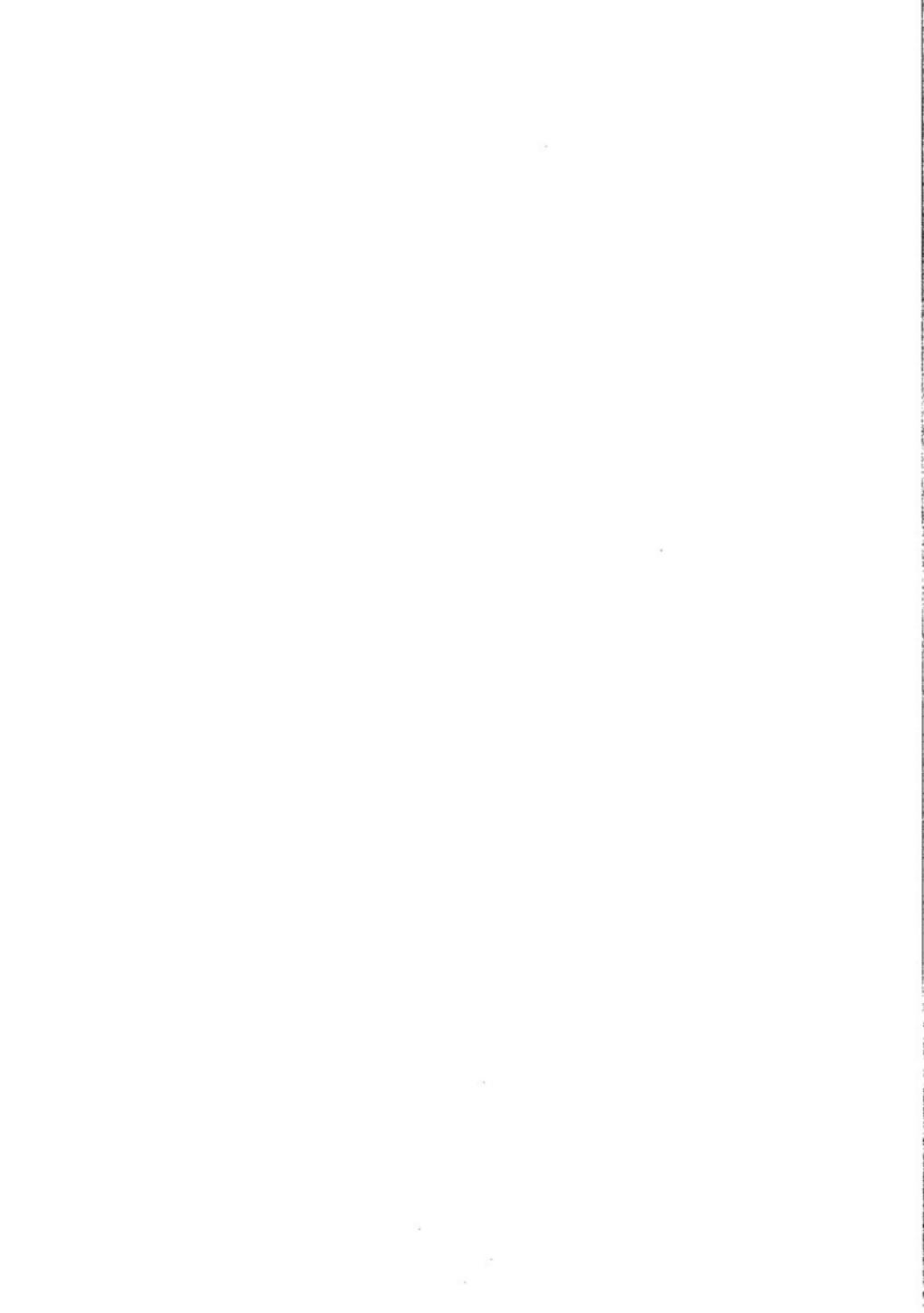
註

- 註1 中西靖人・宮崎泰史・西村尋文他 1984『亀井』－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－鶴大阪文化財センター
- 註2 中西靖人・国乗和雄・宮崎泰史・西村尋文・岸本道昭他 1985『亀井遺跡』－寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書II－鶴大阪文化財センター
- 註3 清水和明 1998『長原遺跡東部地区発掘調査報告1』1995年度八尾市長吉東部地区上地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書－鶴大阪市文化財協会
- 註4 中村 浩 1980『陶邑II』大阪府文化財調査報告書第29輯－鶴大阪文化財センター
- 註5 註4と同じ
- 註6 潤 斎 1992.3「17. 亀井遺跡(91-255)の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告25 平成3年度国庫補助事業 八尾市教育委員会

参考文献

- ・中西靖人・宮崎泰史・西村尋文他 1984『亀井』－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－鶴大阪文化財センター
- ・中西靖人・國乗和雄・宮崎泰史・西村尋文・岸本道昭他 1985『亀井遺跡』－寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書II－鶴大阪文化財センター
- ・1986『亀井』(その2)－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－鶴大阪文化財センター
- ・1987『亀井』(その3)－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－鶴大阪文化財センター
- ・小野久隆他 1988『亀井北』(その1)－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－鶴大阪文化財センター
- ・奥 和之・山上 弘他 1987『亀井北』(その2)－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－鶴大阪文化財センター
- ・赤木克祝・竹原伸次・大桑康宏他 1988『亀井北』(その3)－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－鶴大阪文化財センター
- ・近江俊一 1989.4『亀井遺跡』－南亀井町4丁目41-1の調査－鶴八尾市文化財調査研究会報告19 鶴八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋 1989.10『亀井遺跡(第1次調査)』『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』鶴八尾市文化財調査研究会報告25 鶴八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子 1990「10. 亀井遺跡(KM89-2)」『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度』鶴八尾市文化財調査研究会報告28 鶴八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一 1990.3「10. 亀井遺跡(89-284)の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告20 平成元年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・岡田清一 1990.3「6. 亀井遺跡(88-586)の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告20 平成元年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・成海佳子 1991「11. 亀井遺跡第3次調査(KM90-3)」『平成2年度鶴八尾市文化財調査研究会事業報告』
- ・潤 斎 1992.3「17. 亀井遺跡(91-255)の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告25 平成3年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・古川晴久 1994「8. 亀井遺跡第4次調査(KM96-4)」『平成8年度鶴八尾市文化財調査研究会事業報告』鶴八尾市文化財調査研究会





V 小阪合跡第36次調査 (K S 97-36)

新潟県立歴史博物館

例 言

1. 本書は大阪府八尾市若草町地内で実施した公共下水道（9-122工区）工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する小阪合遺跡第36次調査（KS97-36）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋653-2号 平成10年2月2日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成10年2月9日（実働1日）に、高萩千秋を担当者として実施した。調査面積は約12m²を測る。なお、調査においては八田雅美・市森千恵子が参加した。
1. 本書に関わる業務は、図面レイアウト・トレースー高萩が行った。
1. 本書の執筆・編集は高萩が行った。

本 文 目 次

1.はじめに.....	59
2.調査概要.....	60
1) 調査の方法と経過.....	60
2) 基本層序.....	61
3) 検出遺構と出土遺物.....	61
3.まとめ.....	63

V 小阪合遺跡第36次調査 (K S 97-36)

1. はじめに

小阪合遺跡は八尾市の中心部に位置し、現在の行政区画では若草町、小阪合町1・2丁目、南小阪合町2・4丁目、青山町1～5丁目、山本町南7・8丁目がその範囲にあたる。地理的には、旧大和川の主流である長瀬川と玉串川によって形成された沖積地上で、現標高(T.P.+)は8～9 mに位置しており、当遺跡範囲の中央を縦断するように楠根川が北西流している。当遺跡の周辺では西に成法寺遺跡、南に中田遺跡・東弓削遺跡、北西に東郷遺跡、南西に矢作遺跡がある。

当遺跡の発見の契機は、昭和30年の大阪府営住宅建設工事中に古墳時代の遺物が多量に出土したことによる。しかしその後、八尾市教育委員会によって、遺構確認調査や掘削工事等の立会調査が行われたが、明確な遺構は確認されなかった。昭和56年から当地域の区画整理事業が施工されることとなり、昭和57年以降南小阪合地区土地区画整理事業の関連工事に伴う発掘調査が、大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、財團法人八尾市文化財調査研究会（以下、「当調査研究会」）



第1図 調査地周辺図 (S = 1/2500)

により実施された。これらの調査成果から、当遺跡が弥生時代前期から近世に至る複合遺跡であることが判明した。特に古墳時代前期（庄内期～布留期）に比定される遺構及び遺物が遺跡全域で確認された。また出土遺物には他地域から持ち込まれた土器が多く含まれており、この時期、他地域との交流が盛んに行われていたことが明らかになった。さらに当遺跡の北東部付近で弥生時代前期～中期の集落遺構の存在が確認されている。

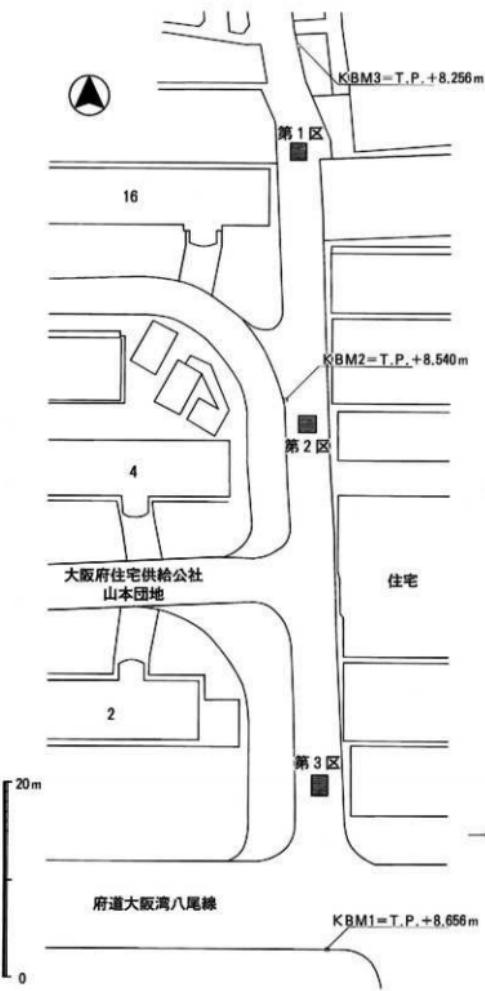
今回の調査地周辺では、当調査研究会が行った第1次・第2次・第5次・第8次・第11次・第12次・第15次・第21次・第22次、昭和58年度に大阪府教育委員会が行った小阪合ポンプ場建設工事に伴う調査、平成4年度に市教育委員会が行った構造確認調査、昭和62年～平成3年度に継続的に行われている府道拡張工事に伴う調査がある。これらの調査成果では弥生時代後期～古墳時代の集落遺構、奈良時代～鎌倉時代の建物跡・井戸等を検出している。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事（9-122工区）に伴うもので、当調査研究会が小阪合遺跡内で行った第36次調査にあたる。

調査区は、南北方向に人孔3箇所（北からNa31→第1区・Na21→第2区・Na11→第3区）である。面積は1箇所約4m²で計12m²を測る（第2図）。調査では、それぞれの工事掘



第2図 調査区位置図 (S = 1/500)

削深度に沿った形で現地表下約1.5~2.0mを機械および人力を併用して掘り下げ、造構・遺物の検出に努めた。

調査の結果、第1・2区では中世の遺物包含層、古墳時代以前の河川跡と思われる厚く堆積する粗砂層を検出した。第3区では中世の河川跡を検出した。遺物は調査区内より中世～近世の時期のものがごく少量出土した。

2) 基本層序

今回の調査では第3図に図示した第1層～第8層を第1区～第3区の基本層序とした。以下、各層について記す。

第1層 盛土・搅乱。層厚40~100cm。盛土および埋設工事（水道・排水管など）の搅乱層である。現表面は標高(T.P.+8.4m)前後である。

第2層 褐灰色疊混じり砂質土（第1・2区）・暗灰茶色細砂混じり砂質土（第3区）。層厚約20~25cm。近世～近代の土層である。

第3層 灰褐色疊混じり砂質土。層厚約10~20cm。瓦器などを含む中世の包含層である。第3区はなく、河川跡と思われるG層が堆積する。

第4層 褐灰色シルト質土（第1区）。層厚約20~25cm。中世期のベース面である。

第5層 茶灰色粘質シルト（第1区）・明茶灰色粘土（第2区）。層厚15~30cm。

第6層 淡灰青色粘土（第1区）・灰褐色粘質シルト（第2区）。層厚15~20cm。

第7層 青灰色粘土（第1区）。層厚25cm前後。柔らかい粘性のある粘土である。

第8層 淡灰茶色粗砂（第1区）。層厚50cm以上。古墳時代以前の河川跡と思われる。

A層 青灰色シルト質土（第1区）。近代～現在の時期に掘られたゴミ穴である。西壁には瓦片などが多量に含まれている。

B層 淡茶灰色シルト。第1区の北壁でみられた層で、第4層と同層と思われるが、上部のゴミ穴により、変色している。

C層 灰色シルト（第1区）。第5層と思われるがB層と同様、変色している。

D層 灰茶色砂質土（第1区）。断面皿状形に堆積しており、近代の耕作の鋤溝などが考えられる層であるが、詳細は不明である。

E層 淡灰色シルト（第1区）。中世期の溝跡の可能性を考えられる層である。

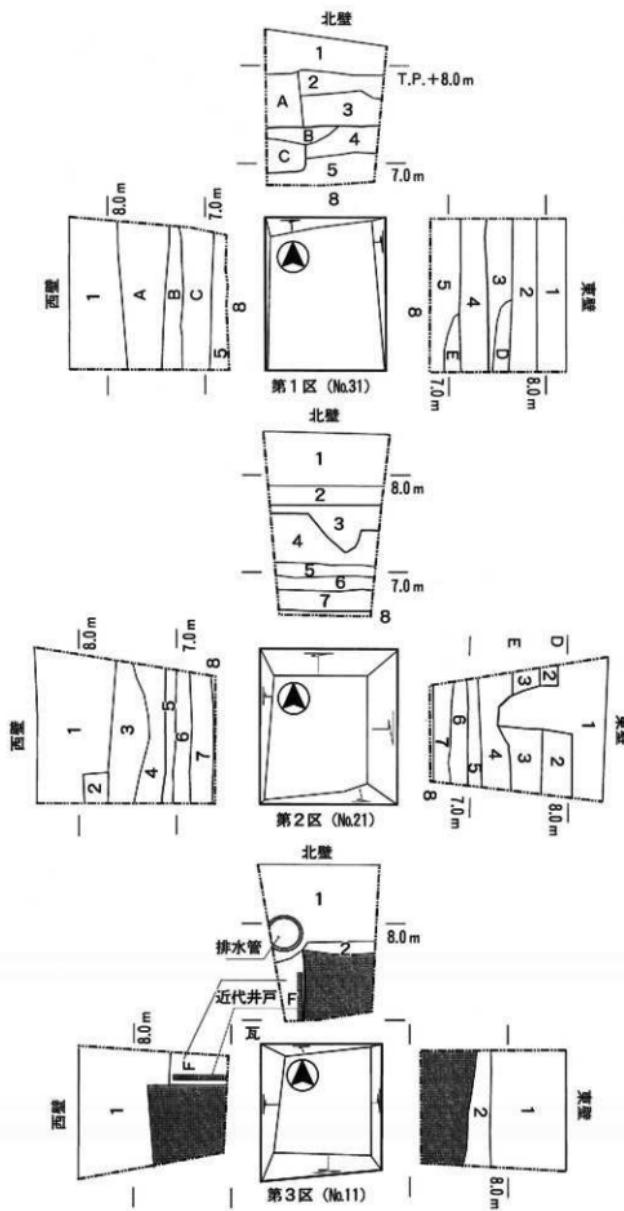
F層 暗灰色粗砂混じり砂質土（第3区）。近代以降に構築された井戸の掘り方で、比較的新しい埋土である。

G層 淡褐灰色粗砂（第3区）。層厚1m以上。中世～近世の河川跡と思われる粗い砂が深く堆積している。深度を確認するため、一部を1m程度掘り下げたが基底部に至らなかった。

3) 検出遺構と出土遺物

・第1区

北側に位置する調査区である。現地表下1.7m (T.P.+6.7m)まで掘削した。調査区西壁では近代～現在の瓦片が含まれるゴミ穴を検出した。現地表下0.7~1.0m (T.P.+7.4~7.7m)で中世期の瓦器碗などの小片を含む層（第3層）を確認した。その下の第4層上面で精査したが造構はなかった。最終掘削面（現地表下1.7m）付近で粗砂の堆積する層（第8層）を検出した。層



第3図 調査区平面面図 ($S = 1/50$)

層を確認するため一部を掘り下げたが、0.5mの層厚までしか確認できなかった。

・第2区

中央に位置する調査区である。調査区北東部では現地表下0.6~1.0mの深さまで埋設工事による削平を受けていた。現地表下0.7~1.0m（T.P.+7.4~7.7m）で中世期の瓦器碗などを含む層（第3層）を確認。第4層上面を精査し、遺構の有無を確認したが、第1区同様、遺構はなかった。最終掘削面（現地表下1.7m）付近で粗砂の堆積する層（第8層）を検出した。層厚を確認するため一部を掘り下げた結果、第1区同様、0.5mまでしか確認できなかった。

・第3区

最も南側に位置する調査区である。現地表下約1.0m前後まで埋設工事により攪乱されている。調査区西部では配水管（径350mmのヒューム管）が残存していた。その北西部下から削平された形で井戸を検出した。井戸は瓦を枠としているもので、調査区内で3段分を確認した。規模は北西が調査区外に至るため不明である。深さについても工事掘削より深いため、確認することができなかった。現地表下1.2mから以下は粗砂層が堆積しており、河川跡と思われる。深さについては工事掘削深度（2m）よりさらに深いものと考えられる。時期は第1・2区で検出されている古墳時代以前の粗砂層より新しい時期のものと考えられる。この粗砂層は東部の楠根川や共同住宅建設工事に伴う調査で検出されている河川跡と関連するものと思われる。当調査研究会が実施した第7次・第9次・第12次・第15次・第21次などの調査で確認されている。

3.まとめ

今回の調査地は小阪合遺跡範囲の北部に位置する調査区で、小規模な公共下水道工事の人孔部分の調査であった。調査の結果、既往調査（第21次調査）で検出している鎌倉期の包含層および遺構面と思われる地層を検出した。調査区では遺構はなかった。

第3区では中世～近世の河川跡を確認した。北部の調査区で確認されなかったことから北西方向へ伸びるものと思われる。この河川跡は当調査区から約100m南側の第14次調査で検出している河川跡の下流にあたるものと考えられる。

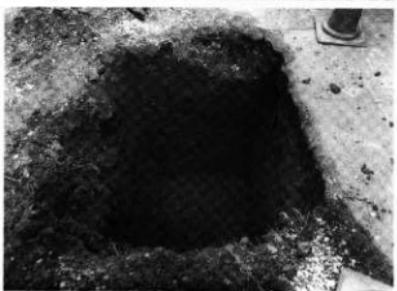
また現地表下約1.8m前後で粗砂層が厚く堆積しているのが第1区・第2区で検出している。この粗砂層の堆積状況は南へ約150mの所で行っている第5次調査でも確認されていることから、今からはその下流部分にあたるものと考えられる。

註

- 註1 高萩千秋 1987『小阪合遺跡』一八尾都市計畫事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－〈昭和57年度 第1次調査〉 勅八尾市文化財調査研究会報告10 勅八尾市文化財調査研究会
- 註2 高萩千秋 1987『小阪合遺跡』一八尾都市計畫事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－〈昭和58年度 第2次調査・第3次調査〉 勅八尾市文化財調査研究会報告11 勅八尾市文化財調査研究会
- 註3 西村公助 1986『小阪合発掘調査概要』一流域下水道等整備に伴う発掘調査－勅八尾市文化財調査研究会報告8 勅八尾市文化財調査研究会
- 註4 高萩千秋 1990『小阪合遺跡』－第8・13・16次調査発掘調査報告－勅八尾市文化財調査研究会報告26 勅八尾市文化財調査研究会
- 註5 高萩千秋 1988「3. 小阪合遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』 勅八尾市文化財調査研究会報告16 勅八尾市文化財調査研究会
- 註6 高萩千秋 1988「4. 小阪合遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』 勅八尾市文化財調査研究会報告16 勅八尾市文化財調査研究会
- 註7 高萩千秋 1989「7 小阪合遺跡（第15次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』 勅八尾市文化財調査研究会報告25 勅八尾市文化財調査研究会
- 註8 成海佳子 1992「4. 小阪合遺跡第21次調査（KS91-21）」『平成3年度勅八尾市文化財調査研究会事業報告』 勅八尾市文化財調査研究会
- 註9 高萩千秋 1993「IV 小阪合遺跡（KS92-22）第22次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』八尾市文化財調査研究会報告39 勅八尾市文化財調査研究会
- 註10 清 斎 1993.3「6. 小阪合遺跡（92-067）の調査」『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告27 平成4年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- 註11 龜島重則 1989.3『小阪合遺跡発掘調査概要・II』一八尾市南小阪合町所在一人阪府教育委員会



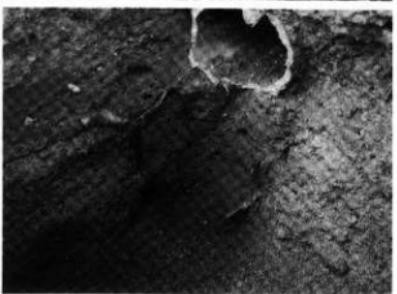
第1区（南から）



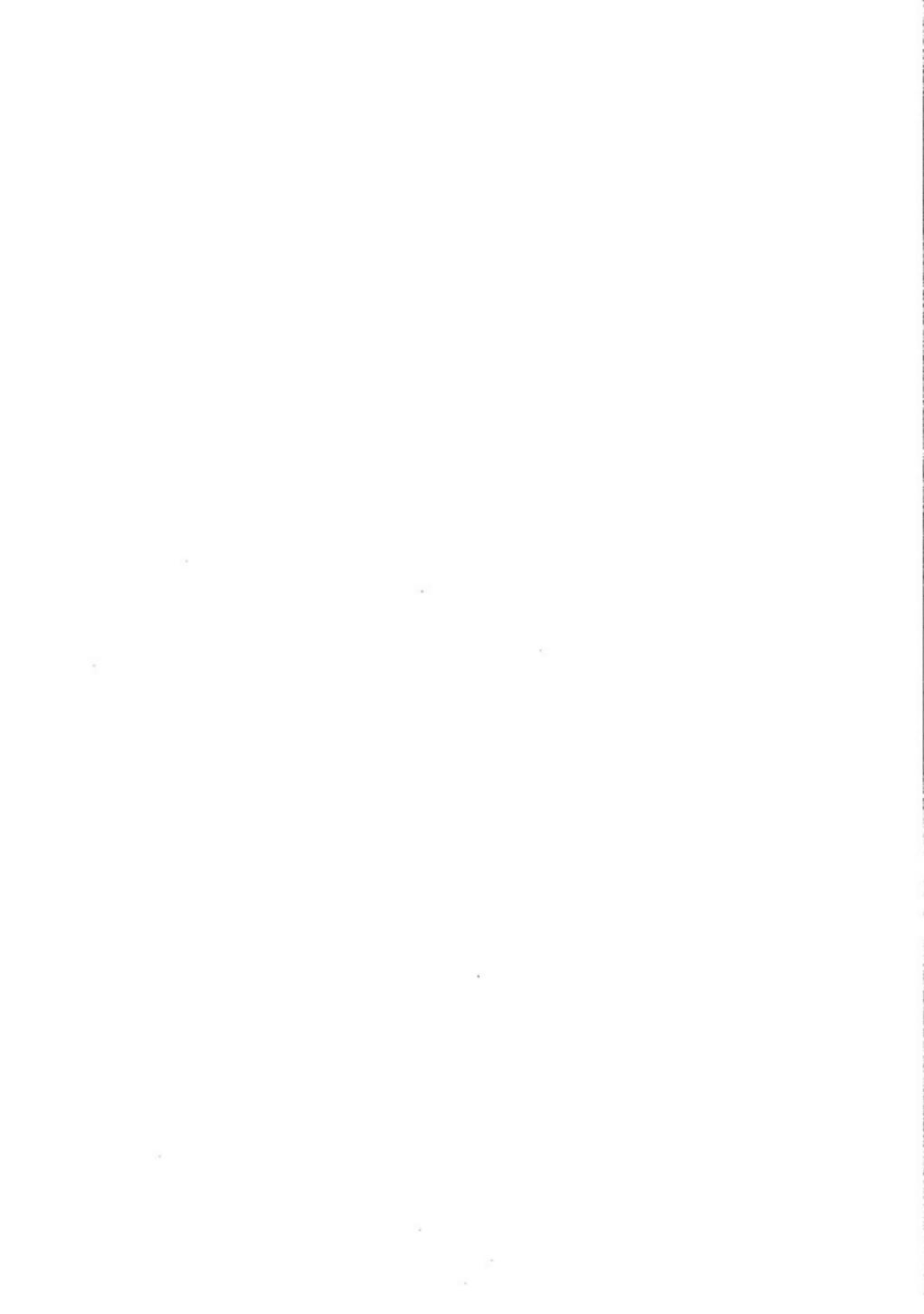
第2区（南から）



第3区（南から）



第3区近代井戸（南東から）



VI 心合寺山古墳第2次調査（S O97-2）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市大竹5丁目地内（「新池」）で行った、堤体改修工事に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する心合寺山古墳第2次調査（S O97-2）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第理103号 平成9年10月20日付）に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成9年11月4日から11月13日（実働8日）にかけて、成海桂子を担当者として実施した。
1. 調査面積は約50m²を測る。
1. 現地調査・内業整理には市森千恵子、坂田典彦、宮崎寛子が参加した。

本　文　目　次

1	はじめ	67
2	調査の方法と経過	67
3	検出遺構と出土遺物	67
1)	層序	68
2)	検出遺構	68
3)	出土遺物	68
4	まとめ	69

VI 心合寺山古墳第2次調査（S O97-2）

1. はじめに

心合寺山古墳の位置する八尾市北東部の大竹・楽音寺地区一帯には、西の山古墳（古墳時代前中期）・花岡山古墳（同中期初頭）・心合寺山古墳（同中期前葉）・鏡塚古墳（同中期後葉）などが存在している。心合寺山古墳は、現在のところ、中河内で最大の規模をもつ前方後円墳で、周濠を含めた全長は250m前後である。また、心合寺山古墳の南西側では古くから瓦が採集されており、南西側の周濠（觀音池）内からも礎石や屋瓦が出たことから、古墳の南西側に秦氏一族の氏寺と考えられる心合寺跡が推定されている。

八尾市教育委員会では、史跡整備のための発掘調査を平成4（1992）年度から行っており、数々の成果が得られている。平成9（1997）年度の調査では、墳丘西側くびれ部の平坦面で埴輪列が検出され、3段築成の古墳であることが確認されたことから、従来140m前後とされてきた墳丘長は、160m以上になることがわかった。また、平成10（1998）年度の調査では、前方部頂部の平坦面にも埴輪列のあったこと、またその内側には葺石により区画された方形壇状遺構のあったこと、後円部の墓壙の確認などが行われ、この地域一帯の首長墓にふさわしい内容が明らかにされた。

当調査研究会では、平成元（1989）年度に北西側周濠（新池）の北西隅で樅管取り替え工事に伴う発掘調査（心合寺山古墳第1次調査 S O89-1）を実施しており、今回の調査は第2次調査（S O97-2）にあたる。

2. 調査の方法と経過

今回の調査は、平成9～11（1997～1999）年度の3年間にわたって行われる予定の「新池」堤体改修工事（第1期）に伴うものである。工事は「新池」の岸の法面をコンクリートブロックで整備するもので、工事によって現在の池の底より深く掘る部分についてが調査対象となっている。

今回の調査地は「新池」南岸の東半分で、上面の規模は幅2m・長さ約25mである。調査地は池の岸に沿ったトレッチで、2カ所で折れ曲がる形となっていることから、便宜上、屈曲部を境に西から1区～3区と呼称した。各調査区の長さは、1区が12m・2区が6m・3区が8mである。

調査地周辺の現状は、池の周間に草木が茂り、法面はえぐれており、水が抜かれた池の底にはごみが散乱していたことから、調査に先立って、草刈りや樹木の伐採・ごみの整理などをした。その後、厚さ0.1～0.3m前後の表土を重機によって除去し、以下を人力掘削により、調査を進めた。平面的な調査終了後、工事深度までの範囲を人力掘削し、下層部分の確認を行った。最終的な掘削深度は、現地表から1.1m前後である。

3. 検出遺構と出土遺物の概要

調査の結果、1区の西北部から2区の東北部にかけては、「新池」構築当時の南岸が検出された。また、3区の北東部では、「新池」の南東隅の縁辺部に直交する形で組まれた石垣状の石組み遺構を検出した。また、山上遺物には、多数の瓦のほか、少量の埴輪・土器類があった。

1) 層序

ベースとなる層は明褐色の砂礫層で、全体を通じて褐色～灰色系の砂礫層が主体である。基本となる土層は表土以下の4層である。

表土は灰褐色粗砂で、厚さ0.05～0.3m、上面の標高はT.P.+26.3～27.9mである。以下に第1層暗褐色シルト（灰色粘質シルト・砂礫混入）、第2層暗褐色シルト（明褐色シルト・灰色粗砂混入）、第3層褐色砂礫（灰色粘質シルト混入）が0.1m前後の厚さで西ドガリに堆積している。次いで第4層明褐色～淡褐色～灰色シルト混じり砂礫はベースとなる層で、1区では厚さ0.6mまでを確認した。第4層上面の標高はT.P.+26.1～27.5mで、東が高く西が低い。

なお、1区では、第4層の上部に池内部の堆積上（A層）があり、第4層直下には粘質シルト・砂質シルト・微砂・粗砂・礫などからなる複雑な土層が認められた（B層）。

また、3区では粗砂・礫混じりシルトからなる石垣の裏込め（C層）、石垣の北東（表面）側には粘質シルト～粗砂の互層（D層）が認められた。

2) 検出遺構

1区では、調査区の北東部で構築当時の池の岸が検出された。現在の池の岸からは6m程度内側の現地表下0.5～0.6m前後（T.P.+26.1～26.2m）で、第4層が急角度で0.6m程度落ち込むのを確認した。岸に沿った池の底には礫が多く見られ、拳大の石が少量落ち込んでいた。池内部の堆積土層はA1層青灰色粘質シルト混じり粗砂（0.05～0.3m）・A2層灰色粗砂（0.5m以上）で、部分的にベースの転落層とおもわれるA3層明褐色シルト混砂礫（0.2～0.3m）・A4層灰色粘質シルト混砂礫（0～0.3m）が認められた。

2区では、北西部で池のコーナー部分が検出され、護岸のためのものか、石組み遺構が遺存していた。石組み遺構は径50cm前後の比較的大きな石を主に置き、拳大から人頭大の石を隙間に充填しているようであるが、規則性は見られなかった。瓦・埴輪・土器の破片も少量見られるが、石組み混入するもの、池内部に落ち込んだものがある。池掘形の南側では、第3層が上部の灰色粘質シルトが多く含まれる3a層と、下部の青灰色粗砂を含む3b層に分れる。

3区では、北東隅で、南東～北西に伸びる石垣状の石組み遺構を検出した。第1層上面を切り込んで構築されているもので、裏込めはC1層淡褐色砂礫混じり粗砂・C2層淡灰色砂礫混じりシルトで構成されている。石垣の北東側斜面には、D層灰色系の粘質シルト・微砂・粗砂が数枚互層となって堆積しており、最下にはD7層明褐色粘質シルトが堆積する。裏込めには鎌倉時代後半以降の瓦片が少量含まれている。また、第2層中に、奈良時代の土師器（5）・須恵器が少量まとまっていた。

3) 出土遺物

遺物については、埴輪や瓦片などが地表面でも散見されており、ベースの第4層直上までの間や池内部・石組み内部・裏込めにも、埴輪・瓦・奈良時代以降の土器類が含まれている。山上量はコンテナ箱（40×60×20cm）に5箱であるが、ほとんどが鎌倉時代後半以降の瓦である。

埴輪はタガ・端面・スカシなどが遺存するものが12片、体部片が6片出土した。縦ハケ調整で硬質な焼き上がりのものが1片認められるが、他は横ハケ・または調整不明である（1～4）。

奈良～平安時代の土器には、土師器2片、須恵器2片があるが、図示できたものは土師器甕（5）と鍋の把手（6）である。土師器甕（5）は須恵器甕体部片とともに、3区2層中から出

土した。

中世の上器には、土師器羽釜・皿などの小破片があり、2区表土からごく少量出土した。土師器羽釜(7)は口径15.5cmの小型品である。

近世のものには磁器碗(8)のほか、瓦質土管などがある。

瓦は総数525片が出土した。うちわけは、平瓦433片・丸瓦87片・軒先瓦や道具瓦等のその他の瓦が5片である。

平瓦の調整には、凸面がナデ・縄目タタキ・文様タタキ、凹面が布目・ナデ・ケズリ、端面がナデ・ケズリがあるが、凸面ナデ・凹面布目・端面ケズリのものが圧倒的に多い(11)。縄目タタキには継ぎのもの(12)と斜位(13)のものがある。文様タタキには、連続した矢羽根状のもの(15)、大小のX印を配したもの(16)、縄目タタキの後大小のX印を配したもの(17)、細かい網目状(18)の4種がある。いずれもタタキ原体の1単位は不明である。

丸瓦の調整は、凸面はすべて縄目タタキの後ナデ、凹面は布目・ケズリ、端面はナデ・ケズリがみられる。(19・20)。

軒丸瓦(9)は内区の1/8程度が遺存しているだけで詳細は不明であるが、心合寺のものである。(10)はおそらく鬼瓦の一部であろう。

4.まとめ

心合寺山古墳の西側周濠の現状は、里道を挟んで北側が「新池」、南側が「観音池」に分断されている。今回の調査では、この「新池」構築当時の南岸および2区・3区で石組み遺構が検出された。1区に見られなかったが、池底に礫敷きの痕跡があったことから、2区同様の石組みはあったものと思われる。3区の石組み遺構は北東側の土層堆積から、南東から北西への流路が想定でき、古墳西側くびれ部付近からの導水施設に伴うものであった可能性が高い。

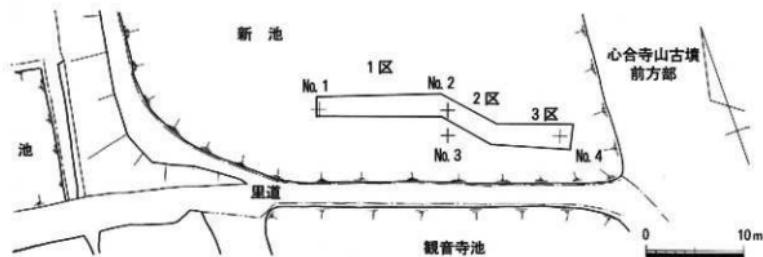
第1次調査(SO89-1)では、江戸時代正徳6(1716)年の墨書きのある櫛板から、樋管の取り付け時期が明らかにされた。また、外堤の構築時期には3時期あり、第3期の外堤が正徳6(1716)年以降の樋管掘り形に切られていることから、正徳6(1716)年には、現在と同じ景観を呈していたことが明らかにされている。これらのことから、心合寺山古墳の北西周濠である「新池」は、鎌倉時代後半以降から正徳6(1716)年までの間に大規模な改修が数回にわたって行われていることが明らかになった。一方、1区下層部分の堆積土層は地山の可能性が高いものの、古墳本来の周濠内堆積土の可能性も捨て切れない。今後、新池・観音池間の里道の構築時期も含めて、精査すべき問題であろう。

参考文献

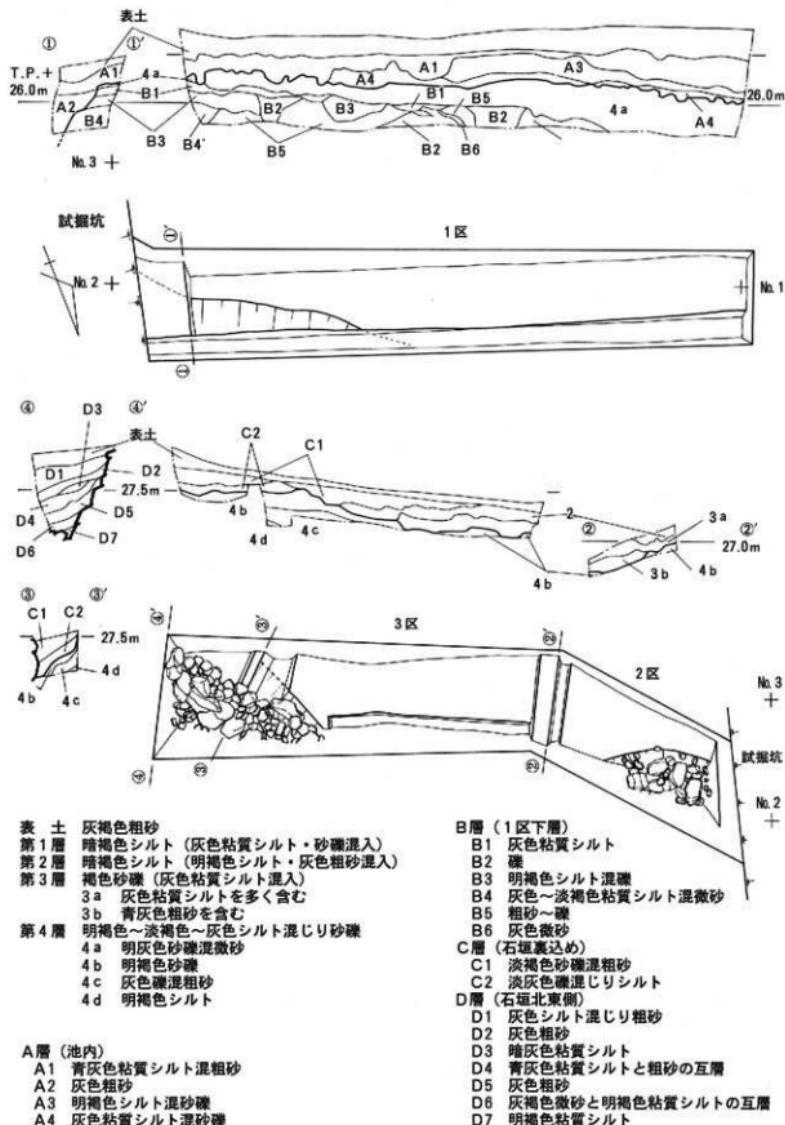
- ・原田昌則 1990 「19. 心合寺山古墳(SO89-1)」『八尾市文化財調査研究会年報平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・吉田野々 1993 『史跡 心合寺山古墳基礎調査現地説明会資料』八尾市教育委員会
- ・吉田野々 1996 『史跡 心合寺山古墳基礎発掘調査報告書』『八尾市文化財調査報告35 史跡整備事業報告1』八尾市教育委員会
- ・吉田野々 1997 『史跡 心合寺山古墳第5次発掘調査現地説明会資料』八尾市教育委員会
- ・藤井淳弘 1998 『史跡 心合寺山古墳第6次発掘調査現地説明会資料』八尾市教育委員会



第1図 調査地周辺図 ($S = 1/5000$)



第2図 調査区設定図 ($S = 1/500$)



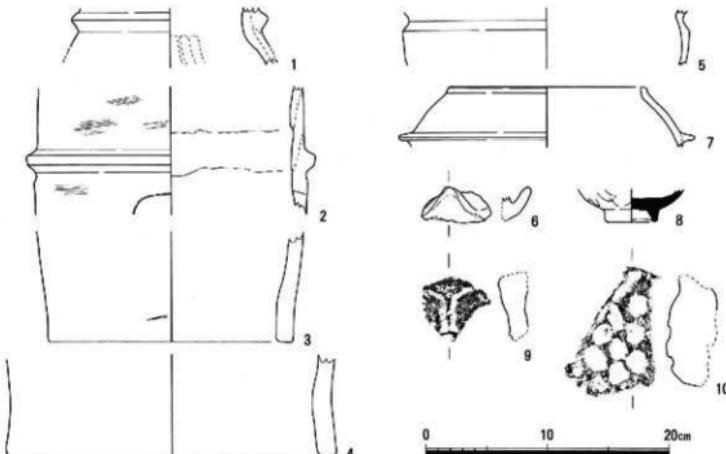
第3図 平面図・壁面図 (S = 水平 1/100・垂直 1/50)

出土遺物うちわけ表

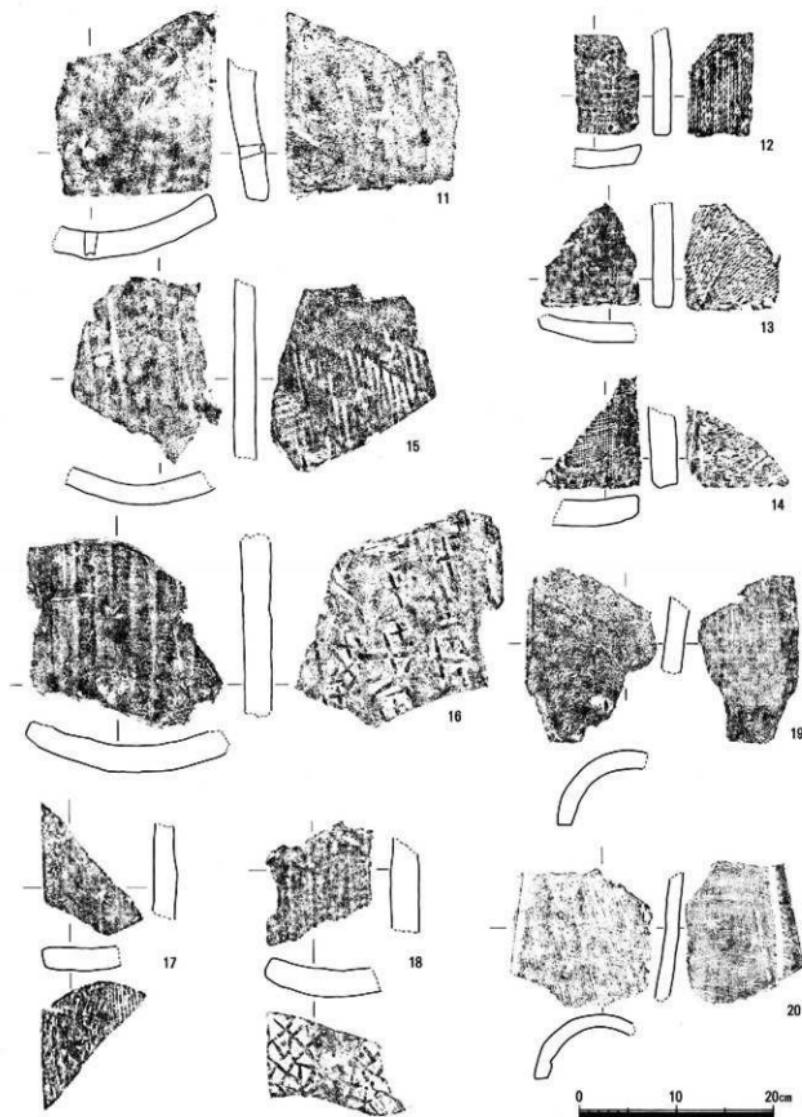
器種 端面の有無	平瓦		丸瓦		他の瓦		埴輪		土師器 (奈良)		須恵器 (奈良)		土師器 (中世)		瓦質 土管		陶磁器		不明	
	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
出土位置																				
表土	69	71	14	8			2	2	2					1	3	4	1	1		13
第1層	9	14	7	3				1	1	1								1		
第2層	2										1		1							
第3層	18	23	7	1			1													1
第4層	28	8	2	3		1								1						
A 1層	25	22	14	3			1	1												1
A 2層	48	52	13	4				6	3						2	6			4	
2区石組内部	4	7	1	1																
3区石組裏込	21	3	1	1		1														
3区石組内部	5	4	4				1													
合 計	227	206	63	24			5	12	6	1	1			2	1	3	7	7	1	19

瓦うちわけ表

凹面調整 端面調整	布目(A)			布目(B)			ナデ			ケズリ			不明			合計	
	ナ デ	ケ ズ リ	不 明	ナ デ	ケ ズ リ	不 明	ナ デ	ケ ズ リ	不 明	ナ デ	ケ ズ リ	不 明	ナ デ	ケ ズ リ	不 明		
平瓦	ナ デ	5	30	9				12	5	1	1	6		3	5	8	85
	繩目タタキ A	2	9	5				1	1					1		7	26
	繩目タタキ B	10	2		1										1	14	
	文様タタキ A	3	1												1	5	
	文様タタキ B 1	1	9	1							2		2	1	1	17	
	文様タタキ B 2	1														1	
	文様タタキ C	1	8												1	10	
	不明	1	10	5		1		1		1			1	9	17	23	
	合 計	20	72	21	1	1	0	13	7	1	2	8	1	15	24	41	227
	綱目タタキ+ナデ	5	16	16	8	2	0	0	0	0	0	2	0	2	0	12	63



第4図 出土遺物実測図-1 (S=1/4)



第5図 出土遺物実測図-2 (S = 1/5)



1区全景（西から）



2区・3区全景（西から）



2区石組み検出状況（南西から）



3区石組み検出状況（東から）

VII 志紀遺跡第4次調査（S I K97-4）

日文書

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市志紀町西2丁目で実施した公共下水道工事（9-35工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する志紀遺跡第4次調査（S I K97-4）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋333-2号 平成9年8月21日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成10年2月13日から3月10日（実働6日）にかけて、坪田真一を担当者として実施した。調査面積は32.51m²を測る。調査においては八田雅美・山内千恵子が参加した。
1. 本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行った。

本　文　目　次

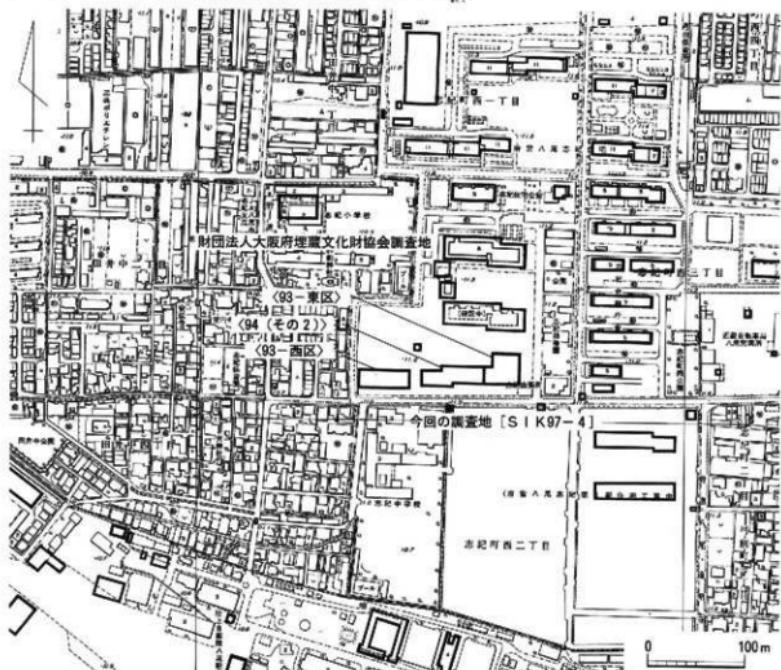
1.はじめ	75
2.調査概要	76
1) 調査方法	76
2) 調査成果	76
3.まとめ	78

VII 志紀遺跡第4次調査 (S I K97-4)

1. はじめに

志紀遺跡は、八尾市の南部に位置し、現在の行政区画では志紀町西1～4丁目がその範囲になっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川左岸の沖積地上に立地し、同地形上において北西側で老原遺跡、南西側で田井中遺跡に接している。

当遺跡内ではこれまでに、大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会（現、財団法人大阪府文化財調査研究センター）・八尾市教育委員会・当調査研究会により多くの調査が行われており、当調査研究会では一部で田井中遺跡としても調査している。これらの調査成果を概観すると、当遺跡では弥生時代前期から近世にわたって連綿と水田が営まれており、主として生産域としての性格が確認されている。なお今回の調査地は南西側の田井中遺跡との境界に位置している。この付近では、財団法人大阪府埋蔵文化財協会による府営住宅建て替えに伴う調査（以下、北側調査地）が実施され、〈93-西区〉及び、〈94（その2）〉の西部では弥生時代中期の環濠と考えられる大溝群が検出された。そしてこの環濠によって、「集落域としての田井中遺跡」と「生産域としての志紀遺跡」が画されると想定されている。^{註1}



第1図 調査地位置図 (S = 1/5000)

2. 調査概要

1) 調査方法

今回の調査は公共下水道工事に伴う調査で、当調査研究会が志紀遺跡内で実施した第4次調査にあたる。発掘調査対象地は道路上に位置する立孔部分で、平面形はL字形を呈し、調査面積は32.51m²である。

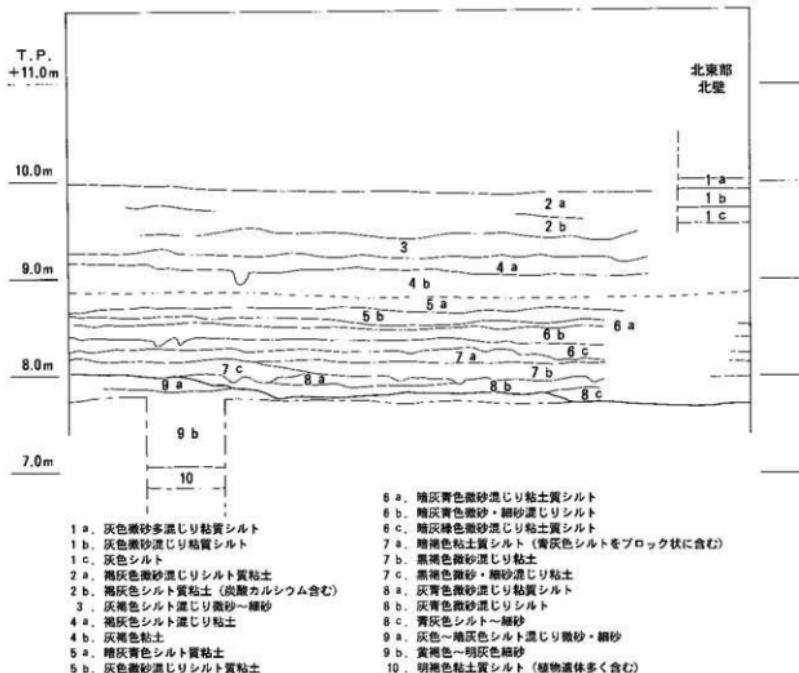
調査開始時には現地表下約1.8mまでの掘削が終了していた。その後現地表下約3.0mまでを機械掘削し、ここまでは調査区西壁及び北東部において断面の観察を実施した。そして以下の約1.0mは、西壁を残しながら人力掘削により層理に従って調査を実施した。さらに、工事深度である現地表下約4.9mまでについては、機械掘削により調査地南部で上層確認調査を実施した。

2) 調査成果

ここでは基本層序と出土遺物について述べる。

第1層は調査区北東部の一部で確認した。西壁での第2層とは様相が異なり、東部に落ち込み状の堆積があったのかもしれない。

第3層の砂を基淵とする層は、南部は微砂、北部ほど細砂が優勢となる。桃の種が出土している。レベル的にみて北側調査地で確認されている奈良時代の洪水砂層と考えられる。



第2図 調査区西壁 (S = 1/50)

第4層は水平な堆積の粘土層であり、第4b層の上面では第4a層を埋土とする窪みが断面で確認できる。古墳時代頃の水田耕土の可能性がある。

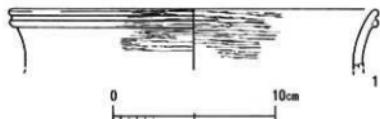
標高約8.8mの第5層上面までは機械により掘削しており、面的な調査は実施していない。これまでの出土遺物は、第2層から時期不明の土師器片1点、また層位不明であるが平安時代後期頃に比定される瓦器片1点がある。

第5層・第6層は、ほぼ水平な堆積を呈する灰色～暗灰青色のシルト～粘土質シルトであり、非常に粘性が強く水成層と思われる。水田遺構の可能性もあるが、第5b層・6a層・6b層上面での精査では、畦畔や足跡は検出されなかった。北側調査地〈93-東区〉で確認されている沼状遺構に準ずる堆積かもしれない。

第7層は暗褐色～黒褐色の粘土層で、第7a層は青灰色シルトをブロック状に含み搅拌されたような状況である。層相からみて北側調査地で弥生時代前期水田面を形成している層と考えられるが、第7a・7b層上面では畦畔・足跡等は認められなかった。

第7b層北西部からは縄文土器が1点出土している(1)。形式的には滋賀里IV期頃に比定される深鉢で、口縁部外面や下位に1条の無文突帯を巡らせるものである。調整は内外面ヘラミガキで、口縁端部から突帯にも及んでおり、共に面を成している。口縁端部と突帯の間にもヘラミガキが施され、そのため口縁端部が外方に肥厚したように見える。胎土は褐色を呈し、雲母・角閃石を多く含んでいる。時期的には晩期中葉～

後葉に位置付けられる。破片1点のみの出土であり、第7b層が包含層と捉えられるかどうかは明確にしえない。



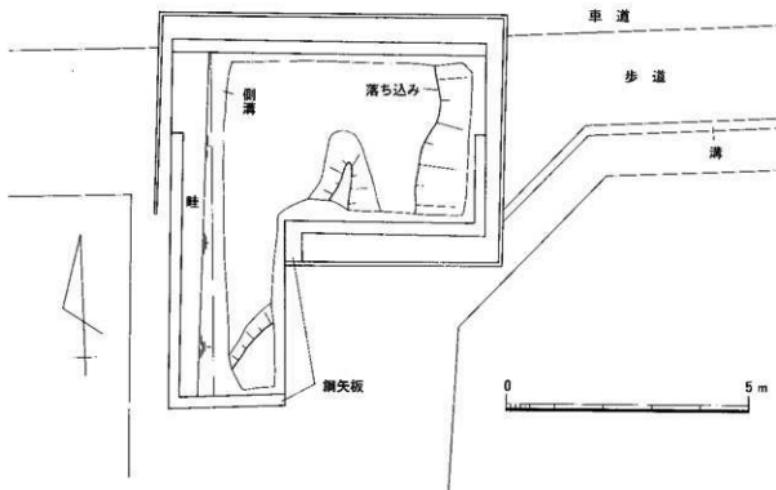
第3図 第7b層出土遺物 (S=1/3 ※写真は約1/1)



第8層以下は水成層の状況である。第9層の砂層上面は南から北に向かってなだらかに下がる状況がみられ、調査区内で約30cmの比高差がある。さらに調査区東端では、南北方向の蛇行する肩を成して東に深さ約20cm落ち込んでおり、調査区外に続いている。この部分の埋土は第8b層と同様である。自然の堆積状況と考えられるが、あるいは落ち込み・溝等の遺構である可能性もある。

第9層は砂層で、第9b層はほぼ均質な細砂からなり、明瞭なラミナもみられず洪水砂層と捉えられる。南部では層厚約1.0mを測る。第9b層上部は鉄分の浸透により黄褐色を呈する。

第10層は調査区南部での下層調査で確認した。植物遺体を多量に含む有機物層である。



第4図 第9層上面平面図 ($S = 1/100$)

3.まとめ

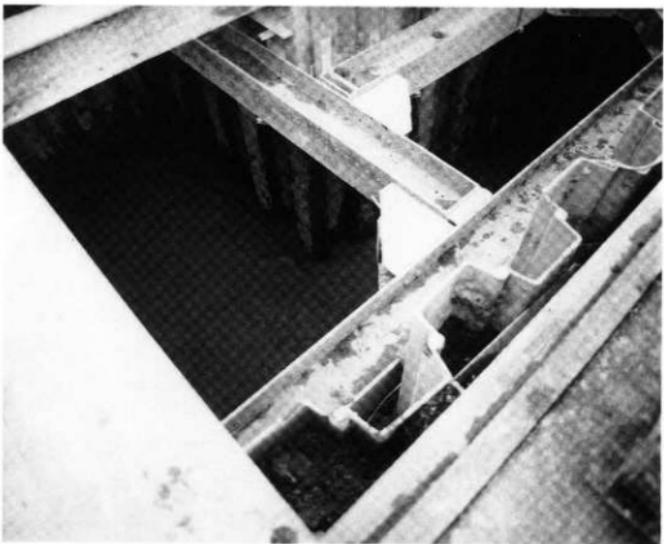
今回の調査では、縄文時代から中世にわたる土層の堆積状況を確認した。また出土遺物は土器3点であった。

北側調査地では標高約7.5mで縄文時代晚期の包含層がみられ、その上面には弥生時代前期の水田が営まれており、また標高約8.3mでは弥生時代中期の環濠群が検出されている。今回縄文上器が出たした第7b層は層相からみてこの包含層に対応するものと考えられる。第7b層は標高約8.1mを測り北側調査地とはかなり比高差があるが、南約250mの田井中遺跡域での弥生時代前期遺構面が標高約8.6mとなっていることからみても、縄文時代～弥生時代の遺構面は南にゆくほど高くなるようである。

北側調査地では、弥生時代前期以降の水田遺構や、弥生時代中期の環濠群が検出されており、今回の調査でもこれらの遺構の拡がりが予想された。しかし弥生時代前期水田に相当する層位は認められたものの、明確に水田遺構と捉えられる状況はみられず、畦畔や足跡も検出されなかった。また環濠群は当地には及んでいないものと思われ、当調査地は最も外側の環濠より東に位置しているのであろう。

註

註1 西川方勝 1995「志紀遺跡」『御大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第91輯』財団法人大阪府埋蔵文化財協会



第7層上面（北西から）



第9層上面（南から）



第9層上面落ち込み（西から）



西壁第5層～第9層

VIII 田井中遺跡第16次調査 (T N97-16)

文 章 目 次

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市田井中4丁目地内に所在する公共下水道工事（8-8工区）に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する田井中遺跡第16次調査（TN97-16）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋第247-3号 平成8年7月17日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成8年4月24日～5月1日（実働5日）にかけて、古川晴久を担当者として実施した。調査面積は、約7m²である。現地調査においては、朝田 要・坂田典彦・西村和子が参加した。
1. 内業整理は上記以外に中前和代・村井俊子・村田知子が参加し、平成10年10月に終了した。
1. 本書の執筆・編集は、古川が行った。

本　文　目　次

1.はじめに.....	81
2.調査概要.....	82
1) 調査の方法と経過.....	82
2) 層序.....	82
3) 検出遺構と出土遺物.....	84
3.まとめ.....	85

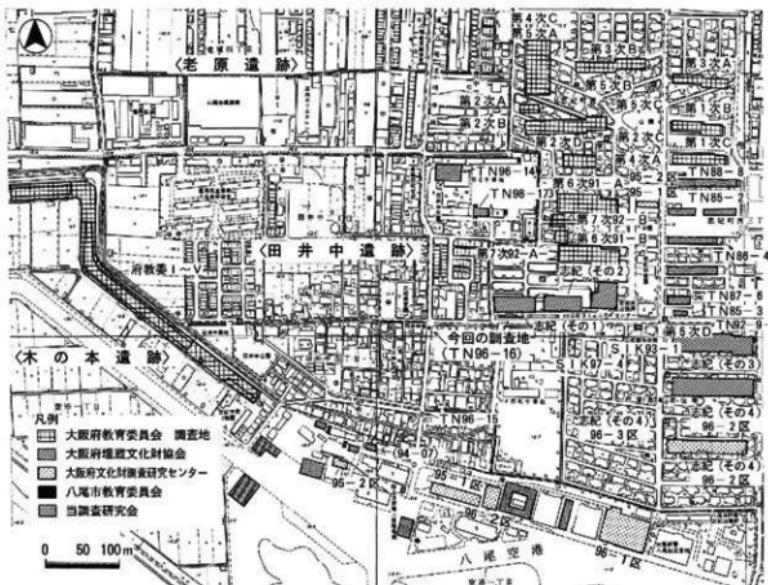
VIII 田井中遺跡第16次調査 (TN97-16)

1. はじめに

田井中遺跡は、八尾市の南東部に位置し、現在の行政区画では田井中1~4丁目・空港1丁目の一部にかけて所在する。田井中遺跡は、地理的に旧人和川の主流であった長瀬川の左岸に位置し、羽曳野丘陵先端の低位段丘上にある。同地形上で、北に老原遺跡、東に志紀遺跡・弓削遺跡、南西に木の本遺跡が位置する。また、長瀬川の北側には、東弓削遺跡・中田遺跡がある(第1図)。

田井中遺跡は、陸上自衛隊八尾駐屯地内での下水道工事の際、弥生土器が出土したことにより知られるようになった。昭和57年(1982)年度から大阪府教育委員会、岬大阪府埋蔵文化財協会、岬大阪府文化財調査研究センター、八尾市教育委員会、当調査研究会による十数次の発掘調査が実施されており、縄文時代晚期から近世にわたる複合遺跡であることが確認されている。

今回の調査地から南東300mにある八尾空港北濠と陸上自衛隊の西端周辺の調査において、弥生時代前期の遺構・遺物が多数検出されている。また、今回の調査地から東200m地点の府営住宅の建て替えに伴う調査【志紀(その2)】において、弥生時代中期に比定される集落をめぐっていたとみられる大溝群が確認されている。



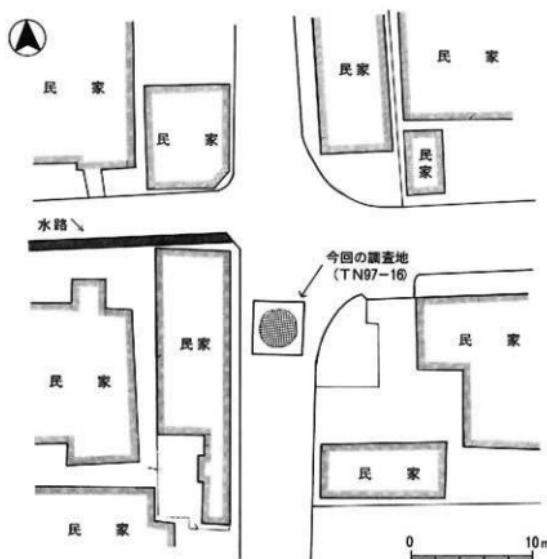
2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事の発進立坑設置（ライナー）に伴うもので、当調査研究会が田井中遺跡内で実施した第16次の調査にあたる。調査地は1箇所で、平面形が円形（直径3.0m）を呈するライナープレート内の約7m²を調査対象とした（第2図）。

掘削方法は、八尾市教育委員会作成の埋蔵文化財調査指示書に基づき、現地表（T.P.+11.45m）から約2.5m前後を機械掘削、それ以下約3.5mについて人力掘削を主に行い、状況に応じて機械掘削を併用した。土層断面観察のため北壁を残しながら掘削を行い調査を進めた。

調査期間は、平成9年4月24日～5月1日までの実働5日間である。



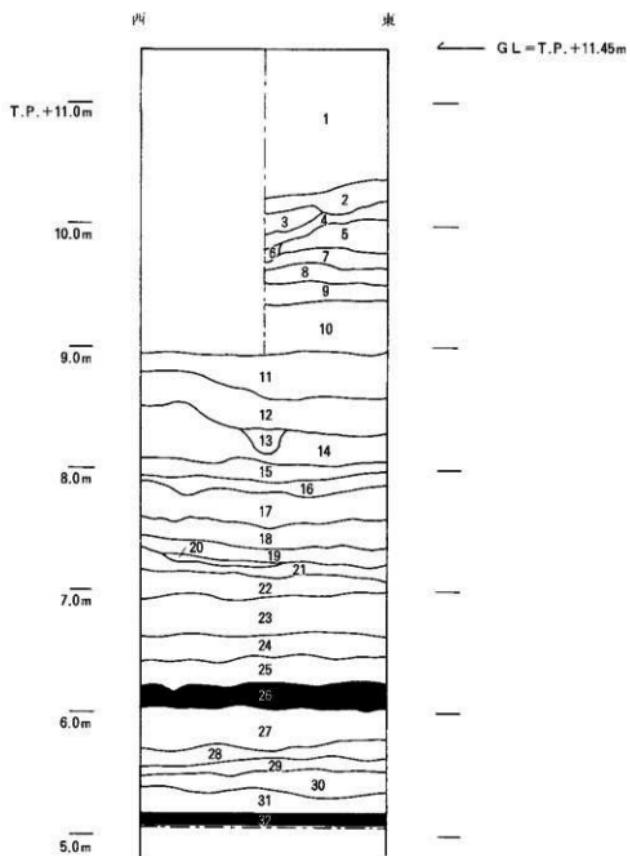
第2図 調査地位置図 (S = 1/400)

2) 層序（第3図）

調査の結果、現地表（T.P.+11.45m）下から約1.1mで旧の耕作土層（第2層）とみられる堆積を確認した。それ以下、第7層までは砂礫混じりの攪拌された砂質シルトを中心とする堆積で、遺物も少量含まれている。洪水層とみられる第8層の下部で、周辺の調査で確認されている平安時代末～鎌倉時代にかけての水田面に対応するとみられる粘性の強い灰色シルト質粘土（第9層）がみられる。第10層～第15層は、粘性の非常に強い粘土が厚く堆積している。第16層～第23層は、シルト層を主体としている。第26層は、灰黒色粘土（黒色粘土帶）で攪拌の及ばない純粹な堆積をしている。第27層～第31層は、無遺物層で沖積地に特有な緑灰色～暗灰色を基調とする

る粘性・しまりが共に強い粘土の堆積が認められた。最終掘削面の第32層において、第26層と堆積が似ている灰黒色粘土を確認した。層中に植物遺体を少量含んでいる。形成時期を示す遺物は出土していないが、中河内地域一帯で確認されている黑色粘土層に対応するとみられる。

以下、上層断面図と各層名の一覧を挙げる。



第3図 土層断面図（北盤）(S = 1/40)

- 第1層 現代盛土。層厚1.25m。バラス・コンクリート塊・南北にはしるヒュームを含む。
- 第2層 灰色砂質シルト。層厚0.12~0.2m。ややしまりあり。(旧耕土?)。
- 第3層 灰色シルト。層厚0.17m。
- 第4層 青灰色砂質シルト。層厚0.15m。
- 第5層 緑灰色シルト。層厚0.1~0.27m。しまり弱い。
- 第6層 灰色砂質シルト。層厚0.1m前後。
- 第7層 灰色粗粒砂混じり砂質シルト。層厚0.15m前後。ややしまりあり。
- 第8層 灰色シルト。層厚約0.1m。しまり弱い。(洪水層)
- 第9層 灰色シルト質粘土。層厚0.15~0.2m。粘性強い。(平安時代~鎌倉時代にかけての水田面?)
- 第10層 灰色粘土。層厚0.4m。粘性が強く、炭酸カルシウムを均一に含む。
- 第11層 暗褐色細粒砂混じり砂質シルト。層厚0.15~0.35m。
- 第12層 暗緑灰色細粒砂混じりシルト質粘土。層厚0.3m。しまり強い。
- 第13層 暗褐色シルト質粘土。層厚最大0.2m。粘性が強く、灰白色の粘土ブロックを均一に含む。
- 第14層 灰色砂質シルト。層厚0.25~0.45m。ややしまりが強い。
- 第15層 青灰色粘土。層厚0.15m。粘性が非常に強い。
- 第16層 灰黒色~緑灰色シルト。層厚0.1~0.15m。しまり弱い。
- 第17層 緑灰色シルト。層厚0.15~0.3m。しまり強い。
- 第18層 青灰色シルト。層厚0.15~0.2m。ややしまりがあり、細礫が少量混じる。
- 第19層 青灰色極細粒砂混じり砂質シルト。層厚0.1~0.15m。
- 第20層 灰白色シルト。層厚0.05m。しまり弱い。
- 第21層 緑灰色シルト。層厚0.05~0.2m。しまり弱い。極細粒砂が少量混じる。
- 第22層 緑灰色シルト質粘土。層厚0.1~0.25m。粘性があり、層中に植物遺体を少量含む。
- 第23層 緑灰色シルト。層厚約0.5m。しまり強い。
- 第24層 茶褐色粘土。層厚0.15~0.2m。粘性が非常に強い。植物遺体を少量含む。
- 第25層 青灰色粘土。層厚約0.2m。粘性が強い。植物遺体を均一に含む。
- 第26層 灰黒色粘土。層厚0.15~0.2m。粘性が非常に強い。(黒色粘土帶)
- 第27層 緑灰色シルト質粘土。層厚0.25~0.35m。しまり強い。
- 第28層 明緑灰色砂質シルト。層厚0.05~0.15m。しまり強い。
- 第29層 暗緑灰色シルトと灰白色細粒砂の互層。層厚0.05~0.1m。
- 第30層 暗茶褐色シルト質粘土。層厚0.15~0.25m。しまりがあり、極細粒砂が少量混じる。
- 第31層 暗灰色粘土。層厚0.15m。粘性が非常に強く、炭化物を少量含む。
- 第32層 灰黒色粘土。層厚0.1m以上。粘性が非常に強い。(黒色粘土帶・最終掘削面)

3) 検出遺構と出土遺物

今回の調査では、遺構は検出されなかった。出土遺物は、第2層・第3層内から近世に比定される肥前系磁器碗の口縁部片1点・底部片2点が出土した。第7層・第8層内からは、時期不明の上師器片1点と平瓦片2点、第14層の下部から時期不明の土師器片1点が出土した。いずれの

遺物も小片のため図示できない。

3.まとめ

今回の調査地は、田井中遺跡内の中央東よりに位置し、從来から想定されている弥生時代中期の集落範囲内に含まれているが、造構・遺物は確認できなかった。しかし、小面積の調査にもかかわらず深層部分まで十層断面観察が実施でき、周辺調査地の成果も含めて景観復原の一助になることを期待する。

参考文献

- ・亀島重則 1991『田井中遺跡発掘調査概要・I』大阪府教育委員会
- ・西川寿勝 1995『志紀遺跡』助大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第91輯 助大阪府埋蔵文化財協会
- ・岩崎二郎 1998『志紀遺跡(その4)』助大阪府文化財調査研究センター



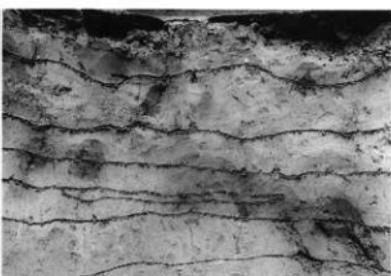
掘削状況（T.P.+10.4～9.2m）東から



西壁土層断面（T.P.+10.4～9.2m）東から



北壁土層断面（T.P.+9.2～8.1m）南から



北壁土層断面（T.P.+8.1～6.7m）南から



調査状況・東から



北壁土層断面（T.P.+6.7～5.3m）南から

IX 竹渕遺跡第8次調査（TK97-8）

調査報告書

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市竹渕東3・4丁目地内で行った、公共下水道工事（9-27工区）に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する竹渕遺跡第8次調査（TK97-8）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第理423-2号 平成9年10月2日付）に基づいて、財團法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成9年12月12日から平成10年3月31日（実働5日）にかけて、成海佳子を担当者として実施した。
1. 調査面積は約23m²を測る。
1. 現地調査には中西明美・宮崎寛子が参加した。

本　文　目　次

1	はじめ	87
2	調査概要	89
1)	調査の方法と経過	89
2)	1区の概要	89
3)	2区の概要	89
4)	3区の概要	90
5)	4区の概要	90
6)	5区の概要	91
3	まとめ	91

IX 竹渕遺跡第8次調査 (TK97-8)

1. はじめに

竹渕遺跡は、八尾市の中北部西端、亀井地内¹のさらに西側に飛び地状に位置する竹渕地内²のうちの中央部から東部がその範囲で、行政区画では竹渕1～5丁目、竹渕東1～4丁目にあたる。当遺跡の北には加美遺跡・加美北遺跡（大阪市）、北東には久宝寺遺跡、南東には城山遺跡（大阪市）、東には亀井遺跡などがあり、付近一帯は遺跡の密度の高い地域である。

当地では、昭和57（1982）年6月、竹渕小学校校舎・体育館建替えに先立つ試掘調査で、校舎予定地から古墳時代後期の遺物包含層が確認されたため、遺跡として周知された。この結果、昭和57（1982）年10月～11月、当調査研究会が校舎予定地内で第1次調査（第1図-①）を行なうこととなった。第1次調査では、T.P.+6.8mで、古墳時代後期の堅穴住居1棟・土坑2基・溝7条などからなる集落跡が検出された。その後は開発自体も少なく、大規模な発掘調査は行われていなかった。

次いで平成2（1990）年1月～3月、遺跡東部の竹渕東2丁目地内で行われた第2次調査（②）では、T.P.+5.8～6.3mの間で、弥生時代中期の土器棺や溝などの遺構と、弥生時代前期の土器類が検出された。この調査は公共下水道に伴うもので、点在する4ヶ所の立坑を対象に行なっており、遺跡東部では、亀井遺跡とつながるであろう弥生時代の遺構面のあることが明らかになった。

平成4（1992）年9月には、第1次調査地から東約170mの竹渕東3丁目80-3で、第3次調査（③）が行なわれた。この調査では、弥生時代前期（T.P.+6.4m）・古墳時代後期（T.P.+7.0m）・平安時代前期（T.P.+7.8m）の各遺構面が検出された。なかでも古墳時代後期の方墳が検出されたことによって、第1次調査地の集落に対応する墓域の存在が明らかになったことと、下層部分に弥生時代前期の遺構面が広がっていることが明らかになった。

平成7（1995）年度以降は遺跡西部でも、市教育委員会・当調査研究会による5件の調査が行われ、新たな時代の生活面も検出されている。

まず、平成7年6月に第1次調査地から北西約150mの竹渕1丁目223-1他で行なわれた第4次調査（④）では、当遺跡ではじめて古墳時代前期の遺構面が検出された。続いて同年9月～10月、そこから西100m地点の竹渕4丁目33-1で行なわれた第5次調査（⑤）では、T.P.+5.8mで古墳時代中期～後期初頭とT.P.+7.7mで平安中期以降の遺構・遺物が検出された。さらにそこから南側約50mの竹渕1・4丁目地内で、同年10月に行なわれた第6次調査（⑥）では、T.P.+5.4mで古墳時代前期初頭の遺構のほか、平安時代中期～後期の遺物包含層が確認されている。

次いで平成8年3月に市教育委員会が第6次調査地-1区の北側で行なった調査（⑦）では、T.P.+5.5mで、布留式土器の集積が検出された。平成8（1996）年6月には、これらの調査地から約200m南に位置する竹渕3・4丁目地内で第7次調査（⑧）が行なわれ、古墳時代から平安時代頃に対応する氾濫原状の土層堆積が確認された。この調査地は竹渕遺跡内の南西端にあたる。

平成10年2月、本調査と前後して竹渕東1・4丁目地内で実施した本書★第9次調査（⑩）では、第1次調査地の溝に続く可能性のある土層堆積を確認している。この調査地は、第1次調査地の北西10mほどの位置にある。

これらの調査結果から、当遺跡東部では、東隣の亀井遺跡との関連から、下層部分に弥生時代の遺構面のあること、遺跡西部では古墳時代前期の遺構面のあること、さらに古墳時代中期・後期と平安時代中期以降の各遺構面が重複して存在していることが明らかになっている。



第1図 調査地周辺図 (S = 1/5000)

周辺の調査一覧表

番号	略 号	調査所在地	面積 (m ²)	調査期間 (実働)	調査原因	検出遺構
①	TK82-1	竹渕15他	832.3	82.10/25~11/20 (28日)	小学校校舎 建設替え	古墳後期-堅穴住居1・土坑2・溝7
②	TK89-2	竹渕東2丁目 地内	127	90.1/12~3/31 (10H)	公共下水道	弥生中期-土器棺・溝2・河川1 弥生中末-溝3
③	TK92-3	竹渕東3丁目 80-3	360	92.9/7~9/26 (15日)	工場建設替え	弥生前期-土坑1・古墳後期-方墳1 平安前期-土坑1・近世末期-井戸2
④	TK95-4	竹渕1丁目22 3-1他	64	95.6/19~6/30 (9日)	共同住宅建 設	古墳前期-溝1
⑤	TK95-5	竹渕4丁目33-1	135	95.9/25~10/4 (8日)	共同住宅建 設	古墳中期末~後期初頭-土坑6・小穴5 平安中期以降-焼土坑1
⑥	TK95-6	竹渕1・4丁 目地内	69	95.10/12~10/28 (6日)	公共下水道	1区:古墳前期初期-落達1 2区:古墳前期・平安中~後期-包含層
⑦	94-478	竹渕1丁目地 内	40.96	96.3/23	公共下水道	古墳前期-布宿式土器集積
⑧	TK96-7	竹渕3・4丁 目地内	37	96.6/28~7/13 (4日)	公共下水道	なし
⑨	TK97-8	竹渕東3・4 丁目地内	23	97.12/12~98.3/31 (5日)	公共下水道	今回報告
⑩	TK97-9	竹渕東1・4 丁目地内	8	98.1/12~2/6 (3日)	公共下水道	今回報告(X)

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事（9-27工区）に伴うものである。調査対象となったのは、人孔（マンホール）部分5か所である。5か所の調査区は、南側を東から1区～3区、西側を南から4区・5区と呼び、工程にしたがって1区から順次調査を行うこととなった。

2) 1区の概要

1区は第2次調査（②）-3区の西70m地点に位置し、北西170mには第1次調査地点（①）、北北西100mには第3次調査地点（③）がある。1区は平成9年12月13日に調査を実施した。調査面積は約4m²、掘削深度は現地表から約3.5mである。

地表面の標高はT.P.+9.265m、盛土は0.9mなされている。103層以下が近世以降の水路と一致しており、護岸の杭や板材などが遺存していた。水路内部の土層堆積は、上層から1.2～1.3mまではシルト主体（103～107層）、次に粗砂（108層）があり、下層には植物遺体を含む暗灰褐色混じり粘土（109層）、最下層には暗灰色粘土（110層）が堆積する。底までの深さは現地表から約3.5m、レベル高はT.P.+5.8mを測る。

101層：黒灰色砂質シルトは旧耕土で層厚約0.1m、上面の標高はT.P.+8.4m前後を測る。

102層：灰色砂質シルトは旧耕土の床をなすもので、礫を少量含む。（層厚0.1m前後）

103層：淡青灰色粘質シルト（0.3～0.4m）

104層：淡青灰色粘質シルトと粗砂の互層、酸化鉄を含み、105層の窪みに堆積する。（0～0.3m）

105層：灰青色粘質シルト、礫を少量含み、上面に凹凸がある。（0.2～0.3m）

106層：淡青灰色砂質シルト～微砂 層厚（0.6～0.7m）

107層：淡青灰色砂質シルトと灰褐色粘質シルトの互層（0.2m前後）

108層：灰色粗砂（0.4m）

109層：暗灰褐色粘土、植物遺体・礫を含む。（0.2m）

110層：暗灰色粘土（0.35m以上）

3) 2区の概要

2区は1区から西35m地点に位置し、12月15日に調査を実施した。調査面積は約4m²、掘削深度は現地表から約3.3mである。

現地表の標高は、T.P.+9.095m、盛土の厚さは0.4mである。ここでも203層以下が近世の水路と一致しており、1区と同様の上層堆積が認められたが、最深部に植物遺体を含む粘土層は認められなかった。底の深さは現地表面から約3.2m、レベル高はT.P.+5.9mを測る。

201層：黒灰色砂質シルトは旧耕土で、層厚0.15m、上面の標高はT.P.+8.7m前後を測る。

202層：青灰色砂質シルトは礫を少量含み、旧耕土の床をなすものである。（層厚0.1m）

203層：灰青色砂質シルト（0.2m）

204層：淡青灰色砂質シルトと粗砂の互層（0.3m）

205層：灰色粘質シルトと灰色粗砂の互層（0.3m）

206層：青灰色砂質シルトと灰色粗砂の互層（0.3m）

207層：粗砂に青灰色砂質シルトの互層、近世の遺物が混入する。（0.3m）

- 208層：青灰色微砂（0.25m）
209層：灰色粗砂に褐色粘土のブロック（0.2m）
210層：灰色粗砂（0.15m）
211層：暗灰色粘土（0.25m以上）

4) 3区の概要

3区は、2区から約10m北西に位置し、12月16日に調査を実施した。調査面積は約4m²、掘削深度は現地表から約3.5mである。

現地表の標高はT.P.+9.100m、盛土の厚さは1.1mである。旧耕土・床土は見られず、盛土の直下に、1区・2区で見られた水路の堆積土（301層～309層）がある。また、ここでは調査区の北部で、水路の肩の一部が認められた。

- 301層：青灰色砂質シルトと微砂の互層、上面の標高はT.P.+8.0m前後である。（層厚0.4m）
302層：暗青灰色砂質シルト、粗砂を含む、近世の遺物混入。（0.2m）
303層：白灰色粗砂と灰色粘質シルトの互層（0.35m）
304層：暗灰色粘質シルト・青灰色砂質シルト・白灰色粗砂の互層（0.25～0.45m）
305層：黒灰色粘土、炭酸鉄を含む。（0.15～0.4m）
306層：青灰色砂質シルト（0～0.25m）
307層：青灰色砂質シルトに青灰色粘土・明褐色粘土のブロック混入（0.15～0.3m）
308層：黒灰色粘土、灰色微砂少量含む。（0～0.2m）
309層：暗灰色粘質シルトと灰色微砂の互層（0.05～0.2m）
310層：黄灰色粘質シルト（0～0.1m）
311層：明褐色粘土（0～0.25m）
312層：青黒色粘土（0.6m以上）

水路の肩を構成する上層（311層・312層）は、調査区の北隅の現地表下2.1m（T.P.+7.0m）前後で表われたが、これらの層は古墳時代後期～平安時代の対応層であって、本来の構築面ではない。肩は2段に掘り込まれており、上段は45度程度の角度で深さ約0.8m、下段は直線的で深さ約0.45m、312層青黒色粘土まで掘り込まれている。底の深さは現地表面から約3.3m、レベル高はT.P.+5.8mを測り、底は平坦である。水路内部の堆積土は青灰色系のシルトが主体で、1区・2区のような粗砂単独の層は見られず、中層には肩の一部をなす層（310層・311層）のブロックを含む層（307層）があり、最下には暗灰色粘質シルトと灰色微砂の互層（309層）が堆積する。

5) 4区の概要

4区は3区から西へ100mに位置し、平成10年3月4日に調査を実施した。調査面積は約4m²、掘削深度は現地表から約2.6mである。

現地表の標高は、T.P.+8.97m、盛土の厚さは0.7mで、部分的に既設の水道管などによる掘り込みが1.3m前後にまで達している。

- 401層：黒灰色砂質シルトは旧耕上で、上面は削平されており、厚さ0.1m前後が遺存している。
上面の標高はT.P.+8.1～8.2m前後を測る。

402層：青灰色砂質シルトは床上で、401層黒灰色砂質シルトを少量含む。（層厚0.2m）

403層：青灰色粘質シルト（0.4m）

- 404層：青灰色砂質シルトに黒灰色粘土のブロック、近世の遺物の小破片を含む。(0.2~0.4m)
 405層：青灰色粘質シルトと灰色微砂との互層(0.3m)
 406層：疊(0.05m)
 407層：青灰色粘質シルトと黒灰色粘土の互層(0.35m)
 408層：灰色粗砂～礫(0.05m)
 409層：青灰色微砂(0.4m)
 410層：灰色粗砂と青灰色粘質シルトの互層(0.6m以上)

4区では、1区・2区と同様の堆積状況を示しており、409層から切り込む水路の堆積上(405層～408層)が確認できた。409層の上層に堆積する405層は、水路の埋め土の可能性が高く、ブロックを含む汚れた土で、近世の遺物の小破片がきわめて少量出土した。また、水路の肩に沿って杭が打ち込まれ、板材なども遺存していた。水路内部には青灰色粘質シルト主体の互層と疊が交互に堆積している(405層～408層)。水路の底は現地表下2.6m(T.P.+6.4m)までを確認した。

6) 5区の概要

5区は4区から北80mに位置し、北75mには第9次調査(⑩)-2区がある。平成10年3月31日に調査を実施した。調査面積は約4m²、掘削深度は現地表から約2.1mである。

現地表の標高は、T.P.+8.79m、盛土の厚さは0.7mで、部分的に既設の水道管やガス管などによる掘り込みが1.5m前後にまで達している。

- 501層：青灰色粘質シルト(層厚0.4m)、上面の標高はT.P.+8.38m前後を測る。

- 502層：青灰色疊混粘質シルト(0.1m)

- 503層：黄褐色疊混粘質シルト(0.1m)

- 504層：灰褐色粘土、マンガン斑紋がみられる。(0.4m)

- 505層：暗灰褐色粘土(0.3m)

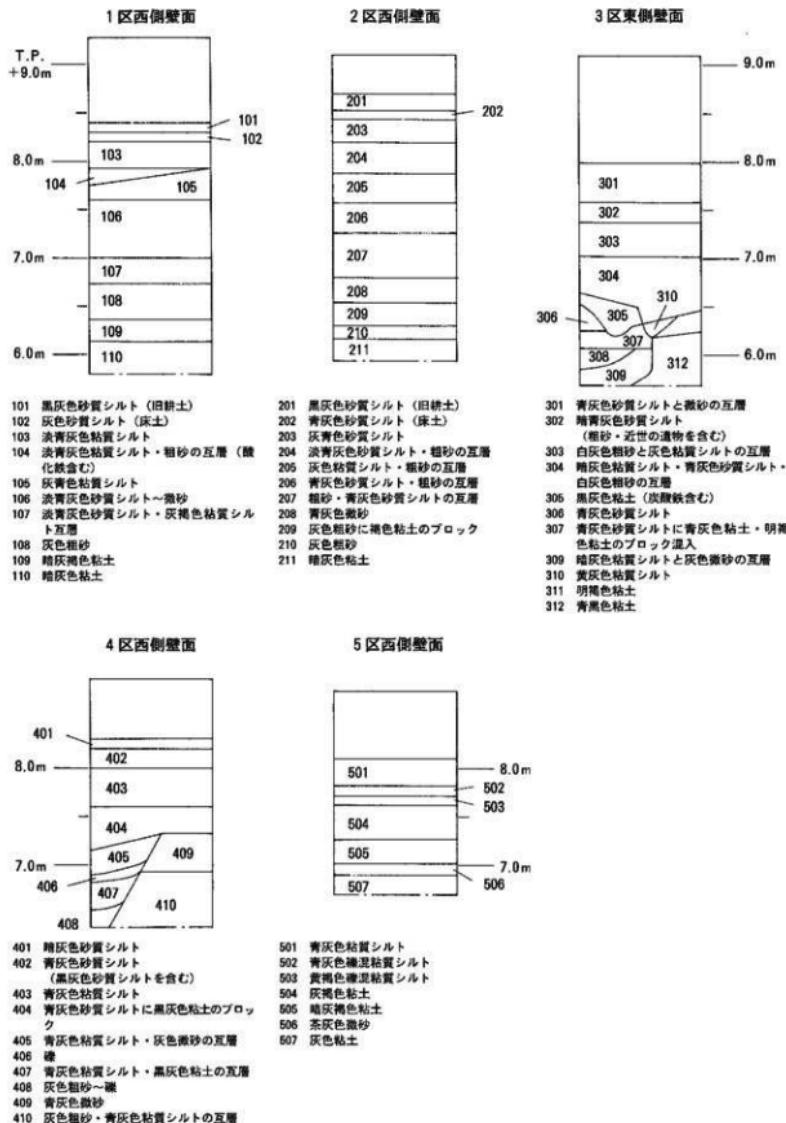
- 506層：茶灰色微砂、わずかに水を含む。(0.1m)

- 507層：灰色粘土(0.2m以上)

5区では水路がなく、1区～4区までと全く異なった上層堆積を示す。503層・504層に遺物(上師質)の小破片が含まれていた。503層以下がこれまで検山されている古墳時代後期～平安時代の土層に対応するものと考えられる。

3.まとめ

1区～4区は、近世の東西方向の水路と一致していたため、それ以前の遺構・遺物は検出されなかった。5区では、過去の調査で検出された古墳時代後期～平安時代の遺構面に対応する土層を確認した。



第2図 柱状模式図 (S = 1/50)

参考文献

- ・高萩千秋 1988「II 竹測遺跡（第1次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』一水越遺跡・竹測遺跡・恩智遺跡－鶴八尾市文化財調査研究会報告23 鶴八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 1992「III 竹測遺跡（第2次調査）」『平成4年度 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告（II）』鶴八尾市文化財調査研究会報告35 鶴八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 1993「IV 竹測遺跡（TK92-3）第3次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』鶴八尾市文化財調査研究会報告39 鶴八尾市文化財調査研究会
- ・吉田野々 1996.3「7. 竹測遺跡（95-38）の調査」『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告33 平成7年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・米田俊幸 「8. 竹測遺跡（95-179）の調査」 同上
- ・原田昌則 1996「X 竹測遺跡（第6次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告53』鶴八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋 1996「II 竹測遺跡（第4次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告54』鶴八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 「III 竹測遺跡（第5次調査）」 同上
- ・米田俊幸 1997「11. 竹測遺跡（94-478）の調査」『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書II』八尾市文化財調査報告37 平成8年度公事事業 八尾市教育委員会
- ・原田昌則・岡田清一 1997「20. 竹測遺跡第7次調査（TK96-7）」『平成8年度鶴八尾市文化財調査研究会事業報告』鶴八尾市文化財調査研究会



1区北側壁面（100層～104層）



2区北側壁面（200層～205層）



3区人力掘削



4区人力掘削



5区人力掘削



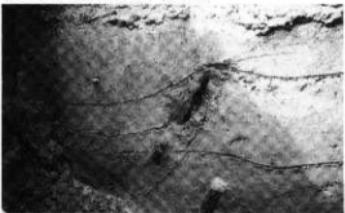
1区人力掘削



2区北側壁面（206層～211層）



3区西側壁面（304層～312層）



4区西側壁面（404層～410層）



5区東側壁面（500層～507層）

X 竹渕遺跡第9次調査（TK97-9）

第三回 文書

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市竹瀬東1・4丁目地内で行った、公共下水道工事（9-67工区）に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する竹瀬遺跡第9次調査（TK97-9）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第理520-2号 平成9年11月25日付）に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成10年1月12日から2月6日（実働3日）にかけて、成海佳子を担当者として実施した。
1. 調査面積は約8m²を測る。
1. 現地調査には中西明美・宮崎寛子が参加した。

本　文　目　次

1.はじめ	95
2.調査概要	95
1) 調査の方法と経過	95
2) 1区の概要	95
3) 2区の概要	95
3.まとめ	96

X 竹渕遺跡第9次調査（TK97-9）

1. はじめに

今回の調査地は竹渕遺跡の東部に位置し、第1次調査地（TK82-1）市立竹渕小学校の西側道路敷下にある。第1次調査地点からは北西10m地点、本書IX第8次調査地（TK98-8）の5区からは北80m地点にある。調査地・遺跡の環境・周辺の調査概要・文献等は本書IXを参考にされたい。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事（9-67工区）に伴うもので、調査対象となったのは、人孔（マンホール）部分2か所である。2カ所の調査区は、北を1区・南を2区と呼び、ともに工事による掘削深度まで調査を行った。掘削方法は、工事の進捗状況に合わせ、機械掘削・人力掘削を併用して行った。

1区は平成10年1月12日・26日に調査を実施した。調査面積は約4m²である。掘削深度は、現地表から3.45mまでである。

2区は1区から南14mに位置しており、平成10年2月6日に調査を実施した。調査面積は4m²である。掘削深度は、現地表から2.9mまでである。

2) 1区の概要

地表面の標高はT.P.+8.0m程度、盛土は0.7mなされている。

101層：旧耕土は厚さ0.3m、上面はT.P.+8.1mを測る。

102層：暗青灰色粘土（層厚0.3m）

103層：褐灰色シルト混じり粘土（層厚0.2m）

104層：黄褐色粘土（層厚0.4m）

105層：褐灰色シルト混じり粘土（層厚0.5m）

106層：青灰色粘質シルト（層厚0.6m）

107層：暗青灰色粘土、層厚0.45mまでを確認した。

3) 2区の概要

地表面の標高はT.P.+8.8m程度、盛土は0.6mなされている。

201層：旧耕土の上面は削平され、0.1mが遺存している。上面の標高はT.P.+8.2mを測る。

202層：青灰色微砂混じりシルト（層厚0.3m）

203層：青灰色シルトに灰色粗砂・褐色粘土の互層（層厚0.1~0.3m）

204層：青灰色シルトに褐色粘土のブロック層（層厚0.2~0.3m）

205層：青灰色粘質シルト（層厚0~0.2m）

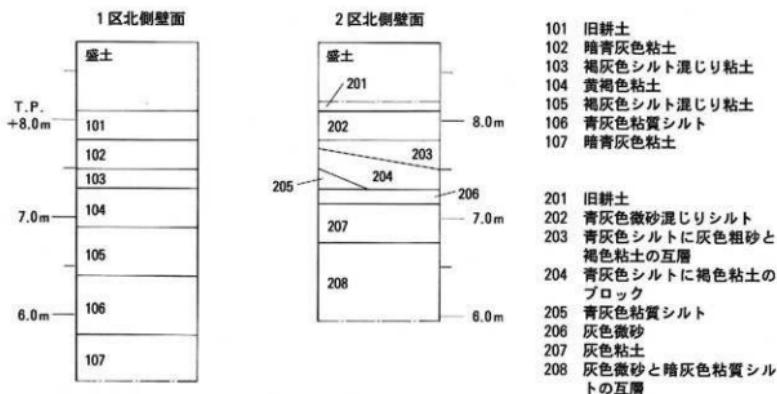
206層：灰色微砂（層厚0.1~0.2m）

207層：灰色粘土（層厚0.4m）

208層：灰色微砂と暗灰色粘質シルトの互層（層厚0.8m以上）

3.まとめ

1区・2区ともに遺構・遺物の検出はなかったが、1区-103～105層の褐色系の粘土が、第1次調査で検出された古墳時代後期～平安時代の遺構面を構成する土層と考えられる。また、2区-203・204層は、第1次調査で検出された溝（SD2・SD3）に一致している可能性が高い。



第1図 柱状模式図 (S = 1/50)

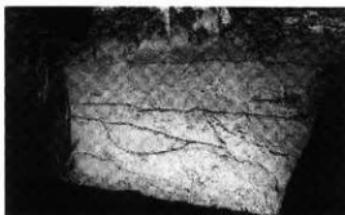
図版一



1区北側壁面（上層）



1区北側壁面（下層）



2区北側壁面（上層）



2区調査風景

XI 中田遺跡第39次調査（N T 97-39）

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市中田1丁目地内で行った公共下水道工事（9-63工区）に伴う中田遺跡第39次発掘調査（NT97-39）の報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書（八教社文第埋481-2号 平成9年11月5日付）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成9年11月18日から11月21日（実働4日）にかけて、森本めぐみを担当者として実施した。調査面積は、約13.0m²である。
1. 内業整理は、調査終了後隨時行い、平成10年10月に終了した。
1. 現地調査および内業整理に参加した調査補助員は以下のとおりである（五十音順）。
市森千恵子・八田雅美・山内千恵子
1. 本書の執筆・編集は森本が行った。

本 文 目 次

1.はじめに.....	97
2.調査概要.....	98
1) 調査の方法と経過.....	98
2) 基本層序.....	98
3) 検出遺構と出土遺物	100
3.まとめ	100

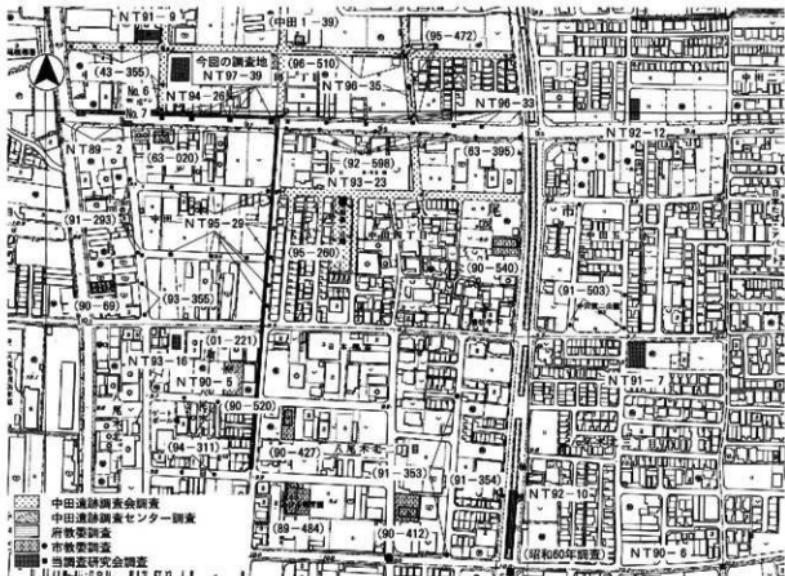
XI 中田遺跡第39次調査 (NT97-39)

1. はじめに

中田遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置する遺跡で、現在の行政区画では中田1～5丁目・八尾木北1～6丁目・刑部1～4丁目の東西1.1km、南北0.8kmがその範囲となっている。地理的には、河内平野のはば中央部を流れる旧大和川支流の長瀬川と玉串川に挟まれた冲積地上に立地し、同地形上においては北に小阪合遺跡、西に矢作遺跡、南に東弓削遺跡が隣接している。

中田遺跡は昭和45年に行なわれた区画整理事業でその存在が確認され、昭和46年以降大阪府教育委員会・中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター・八尾市教育委員会・当調査研究会によって多次にわたる調査が実施してきた。その結果、弥生時代前期～近世に至る遺構・遺物が検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認された。

今回の調査地である中田1丁目は中田遺跡内の北西端にある。周辺の調査では、北東約100mの市教委の調査（中田1丁目-39）で検出された土坑2基から古墳時代前期初頭の土器が多く出土し、そのなかに吉備系や山陰系などの他地域の土器が多く含まれていたことから当地周辺では他地域との交流が盛んであったことが判明した。また、当調査地のすぐ北にあたる中田遺跡調査センター調査地（昭和48～49年調査）では大量の炭と一緒に屋瓦類が出土しており、付近に平安時代～鎌倉時代にかけての寺院が存在した可能性が示唆されている。



第1図 調査地周辺図 (S = 1/5000)

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事(9-63工区)に伴う調査で当調査研究会が中田遺跡内で行った第39次調査にあたる。調査は東西に並んだ人孔4箇所を対象とし、西から順に1~4区とした。当初の予定では総調査面積約16m²であったが、既設工事の都合などにより、約13m²となった。調査は3区→2区→4区→1区の順で実施した。八尾市教育委員会の指示書に従い、現地表(T.P.+10.0m前後)下1.2mまで機械掘削を行い、以下、現地表下2.0~2.3mまでを人力掘削と機械掘削を併用して造構・遺物の検出に努めた。

2) 基本層序

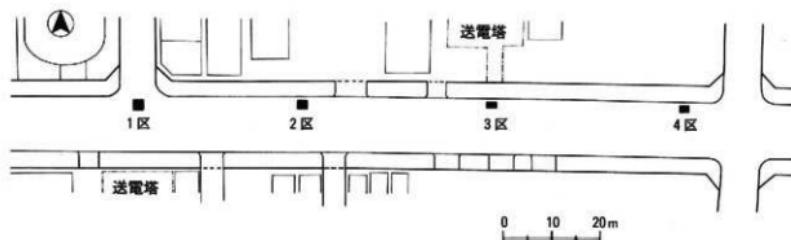
今回の調査では既設工事の搅乱が激しく、特に南側は1区~4区まで搅乱を受けていたので断面観察はできなかった。全調査区をとおして観察できたのは東壁のみであったため、以下、東壁断面を中心に基本層序について述べる。

基本層序は第3図のとおりである。全調査区に普遍的にみられたのは第1層から第4層である。なかでも第4層からは平安時代末~鎌倉時代初頭の土器の破片が出土し中世の包含層とみられる。第5層は1区でのみみられなかった。

また、現地表下1.7~2.1(T.P.+8.3~7.9)m付近では自然河川とおもわれる厚い砂の堆積(第20層)を確認した。この砂層からは湧水が激しく、壁面の崩壊もみられたため危険と判断し、以下の調査は確認程度にとどめた。第20層の機械掘削状況をみると下部にいくほど砂が粗くなり、小石を含む極粗砂層になる。遺物は出土しなかった。



写真1 調査地周辺(南西から、手前が1区)



第2図 調査区設定図 (S = 1/1000)

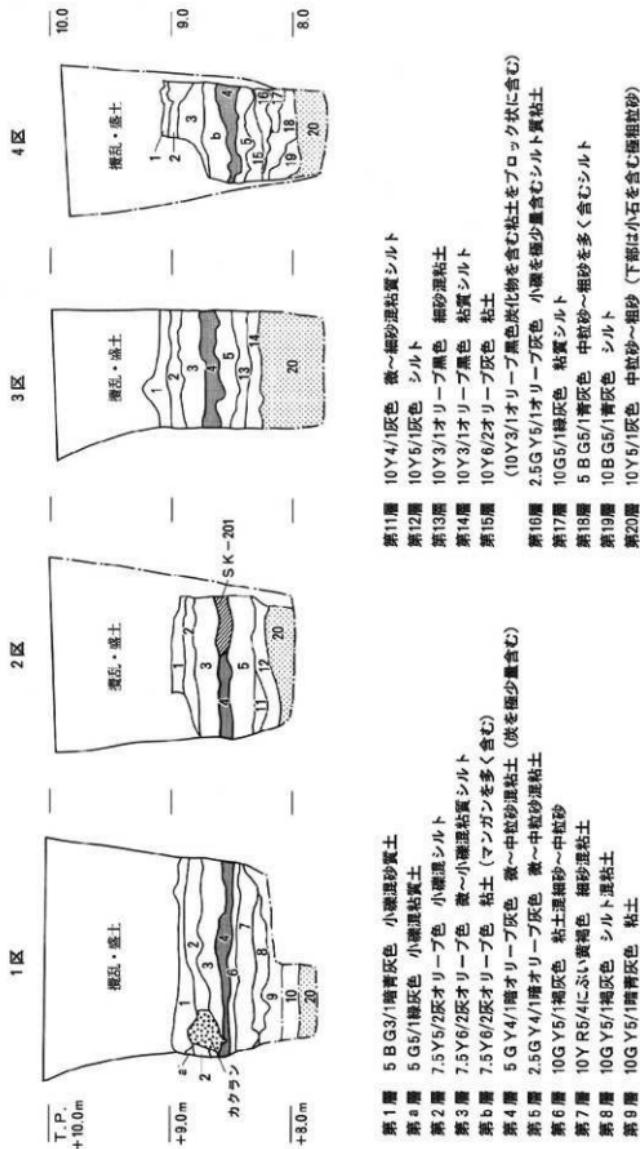


図3 交換面図 ($S = 1/40$)

3) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、検出した遺構は1区から小穴1個（S P-101）、2区から土坑1基（S K-201）のみである。以下、各調査区について概要を述べる。

〈1区〉

第8層上面でS P-101を検出した。S P-101は南側が攪乱を受けており、全容は不明である。埋土は7.5GY4/1暗緑灰色・シルトブロックを含む粘土で遺物は出土しなかった。

その他、第1層から瓦器窓の底部と土師器、第3層から土師器、第4層から須恵器・土師器・瓦器、第6層から土師器・瓦器がそれぞれ出土した。しかし、いずれも破片であり、時代を明確にできるようなものはない。

1区は現地表下2.2(T.P.+7.9)m付近から砂の堆積層を検出した。これは他区よりも0.1~0.3m低い結果となった。また、すぐ北側に位置する市教委調査(93-355)のNo.7ではこれに相当するとおもわれる砂層はT.P.+7.6m付近でも検出されておらず、その北のNo.6のT.P.+8.3m付近から検出されていることから、1区周辺はより深い位置に砂が堆積していることが判明した。

〈2区〉

第4層上面でS K-201を検出した。S K-201も南側が攪乱を受けており、東側は調査区外となるため全容は不明である。埋土は5GY4/1暗オリーブ灰色の粘土で第4層より粘性が強く、遺物も少量であるが土師器の小破片が1点、瓦器片が2点、黒色土器片1点が出土した。

その他、第4層から土師器・瓦器・須恵器の破片が出土した。須恵器のなかには6世紀中頃の杯身が含まれているが、紛れ込みの可能性がある。また、第5層からも土師器の細片が出土した。

〈3区〉

遺構は検出できなかった。遺物は第2層と第3層から土師器片が出土した。第4層からは土師器片・瓦器片・東播系須恵器の片口鉢が出土した。いずれも小破片で同化できなかったが、時期は12世紀半ばとおもわれる。

〈4区〉

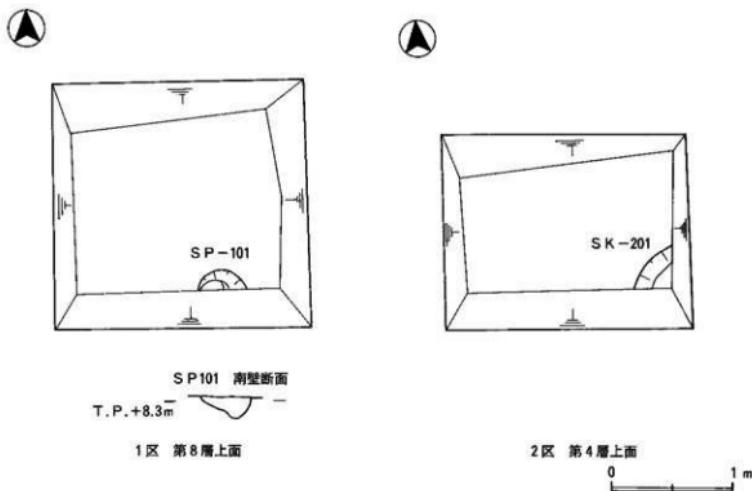
現地表面はT.P.+9.7~9.8m前後である。最も攪乱が激しかった調査区で、断面観察も東壁部分しかできなかった。遺構は検出できなかったが第2層から土師器、第3層から土師器・瓦器、第4層から土師器の細片がそれぞれ出土している。

3.まとめ

今回の調査は中田遺跡調査センターが昭和48年~49年に調査を行い、多量の瓦や炭が出土した地点と隣接していたため、寺院関係の遺構・遺物の出土が期待されたが、検出されなかった。

しかし、中世の包含層（第4層）は周辺の調査でも確認されており、調査地一帯が中世の集落城にあたることが再確認できた。また、1区と2区で検出した遺構の時期は時代を決め得る遺物の山上がないため正確にはいえないが、周辺調査の成果から鎌倉時代~室町時代に相当するとおもわれる。

各区の最下層で確認した砂の堆積層は中田遺跡調査センター調査地や当調査研究会調査（第2次・第9次・第26次）、市教委調査<(63-020)・(93-355)>などでも検出されている。今回



第4図 調査区平面図 (S = 1/40)

は遺物が出土しなかったが、第9次調査や中田遺跡調査センターの調査では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺物が出土している。砂層を検出したレベルも T.P.+8.0m 前後であり、東に行くにつれやや高いレベルから検出されていることも一致していることから、当地にもこれらに対応する大規模な自然河川が存在していたことが確認できた。

参考文献

- ・「中田遺跡」 1974 中田遺跡調査センター
- ・近江俊秀 1989 「1. 中田遺跡(63-020)の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告24 八尾市教育委員会
- ・吉田野乃 1994 「8. 中田遺跡(93-355)の調査」『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告30 八尾市教育委員会
- ・青木勘時 1990 「15. 中田遺跡(NT89-2)」『八尾市文化財調査研究会年報平成元年度』八尾市文化財調査研究会報告28 八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 1992 「Ⅷ 中田遺跡第9次調査(NT91-9)」『八尾市文化財発掘調査報告34』八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助 1998 「XVI 中田遺跡第33次調査(NT996-33)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告60』八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一 1998 「Ⅲ 中田遺跡第26次調査(NT94-26)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告61』八尾市文化財調査研究会



1区 第8層上面（南から）



1区 東壁断面（T.P.+9.4~8.1m）



1区 SP-101（北から）



1区 完掘状況



3区 東壁断面



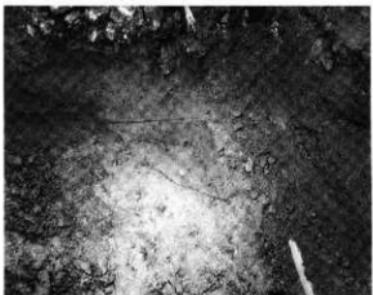
3区 完掘状況



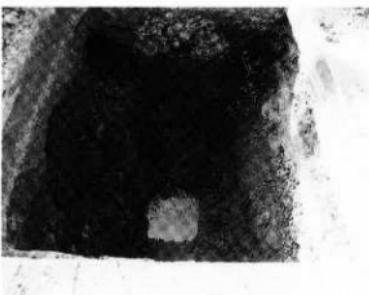
2区 第4層上面（西から）



2区 東壁断面（T.P.+9.5~8.0m）



2区 SK-201（西から）



2区 完掘状況



4区 東壁断面（T.P.+9.5~8.0m）



4区 完掘状況



XII 中田遺跡第40次調査（N T 97-40）

調査文書

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市刑部3丁目地内で実施した公共下水道工事（9-103工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する中田遺跡第40次調査（NT97-40）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋493-2号 平成9年11月5日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成10年1月9日から1月14日（実働3日）にかけて、坪田真一を担当者として実施した。調査面積は約16m²を測る。調査においては市森千恵子・西岡千恵子・八田雅美・山内千恵子が参加した。
1. 内業整理には上記の他、岩本順子・田島和恵・都築聰子の参加を得た。
1. 本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1. はじめ	105
2. 調査概要	106
1) 調査方法	106
2) 調査成果	106
3. まとめ	110

XII 中田遺跡第40次調査 (N T 97-40)

1. はじめに

中田遺跡は、八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では中田1～5丁目、刑部1～4丁目、八尾木北1～6丁目の範囲に広がる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、同地形上において北側で小阪合遺跡、西側で矢作遺跡、南側で東弓削遺跡に接している。

当遺跡は昭和45年の区画整理事業の際発見された遺跡で、以後中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により調査が続けられている。これらの調査成果から、当遺跡は古墳時代前期を中心に、弥生時代前期～近世にわたる複合遺跡であることが確認されている。

今回の調査地は遺跡南端部にあたり、周辺では調査も多く実施されている。なかでも北東部で昭和53年度に八尾市教育委員会による調査（市S53）で検出された土坑は、多量の出土土器のうちの多くを吉備地方の土器が占めるという特異性が注目され、『刑部土坑』と称され庄内式期古相の標識資料となっている。



第1図 中田遺跡調査地位置図 (S = 1/5000) 崇東：東弓削遺跡

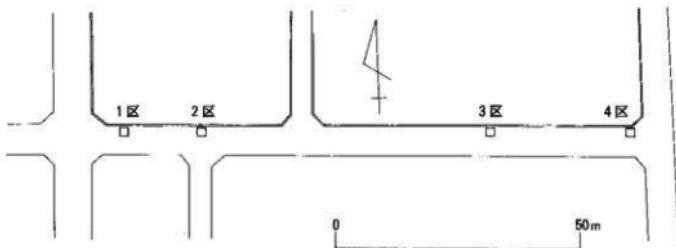
2. 調査概要

1) 調査方法

今回の調査は公共下水道工事に伴う調査で、当調査研究会が中田遺跡内で実施した第40次調査にあたる。発掘調査対象地は東西方向の道路上に並ぶ人孔部分（約2m四方）4箇所で、調査面積は約16m²である。いずれの調査区も、北側が道路側溝の擁壁、南側が地下水路により搅乱を受けており、実際の調査面積は減少している。

地区名は西から1区～4区とし、調査は東から順次進めた。

調査にあたっては現地表下約1.5mまでを機械掘削し、以下約0.5mを人力掘削により調査を実施した。またその後、工事深度である現地表下約2.6mまでについては、機械掘削により土層の確認調査を実施した。



第2図 調査区位置図 (S = 1/1000)

2) 調査成果

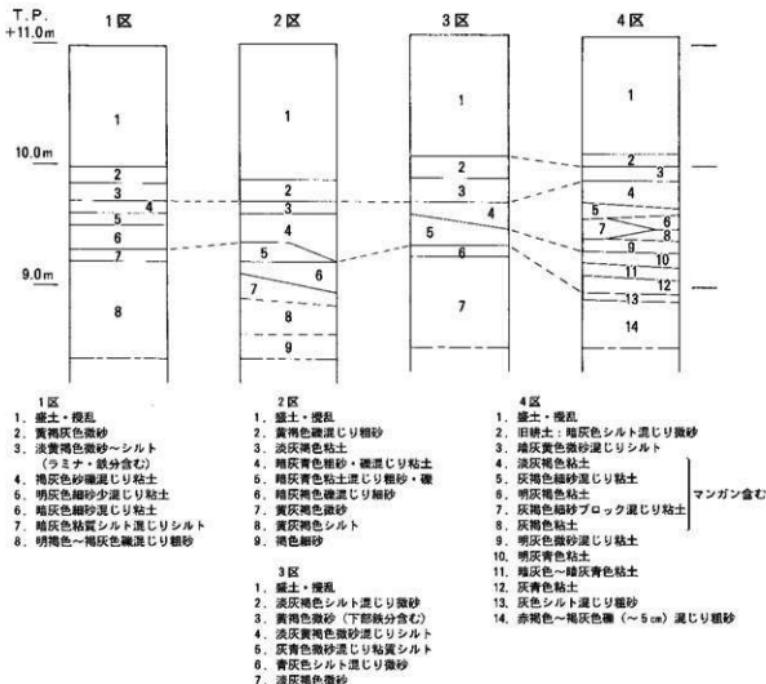
〈1区〉

a. 基本層序と出土遺物

第2層・第3層の砂を基調とする水成層（以下『上部水成層』）は、標高9.7～10.0mで調査地全域にみられる。中世以降の洪水砂層の拡がりと捉えられ、2区では礫混じり粗砂層、他地区では微砂層～シルト層で、当区ではラミナがみられた。いずれの地区からも遺物は出土していない。当区でのみみられる第4層の砂疊混じり粘土層は固く締まる層で、中世頃の整地層と考えられる。この上面が第1次面で、土坑1基（SK 111）を検出した。

第5層・第6層は古墳時代後期の包含層で、土器を多く含んでおり、須恵器杯（3～5）、土師器壺（6）・竈（7・8）を出土した。須恵器杯はいずれも6世紀前半に比定されるものである。6は土師器であるが、調整・技法・装飾は明らかに須恵器のそれであり、焼成不良の須恵器である可能性もある。7は竈の把手、また8は底部分である。

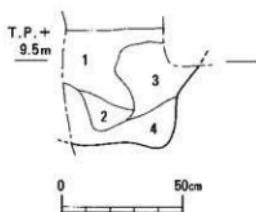
第7層以下は調査地全域にみられる河川堆積層（以下『下部水成層』）であり、第7層のシルト層は河川の最終堆積部分にあたると捉えられる。古墳時代前期頃の上器片が数点出土しているが、ローリングを受けたものもある。第7層上面が第2次面で、溝1条（SD 121）・ピット1個（SP 121）を検出した。



b. 検山造構と出土遺物

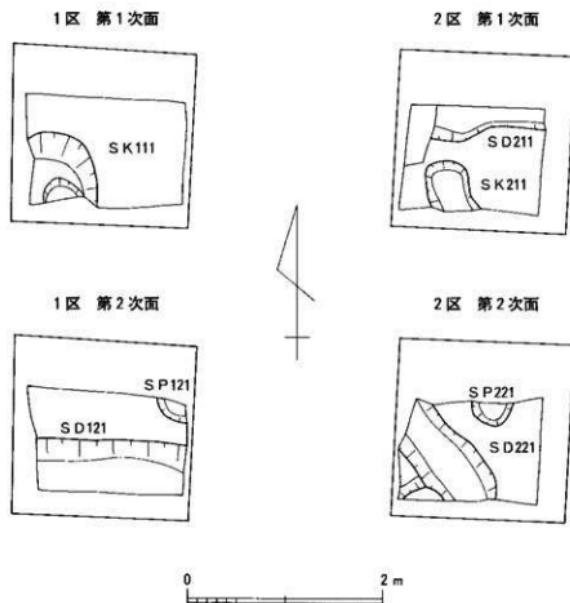
SK 111

調査区南西角で検出した十坑で、平面形は不明であるが、検出部分の形状からみてほぼ円形を呈するものと考えられる。規模は南北75cm以上・東西70cm以上・深さ約55cmを測る。断面逆台形を呈し、底は第8層の砂層に達している。埋土は上から黄灰褐色シルト混じり微砂・暗黄灰色微砂混じり粘質シルト・灰褐色微砂混じり粘質シルト・暗灰黄色微砂混じりシルト質粘土である。上部の2層は、基本層序の第3層が落ち込んだものである。掘方形等からみて井戸の痕跡かもしれない。出土遺物には平瓦の他、古墳時代後期頃の土器があるが、図化したものは平瓦（1）、須恵器杯身（2）のみである。1は凹面布目・凸面綱目の中世頃であろう。



1. 黄灰褐色シルト混じり微砂
2. 暗黄灰色微砂混じり粘質シルト
3. 灰褐色微砂混じり粘質シルト
4. 暗灰黄色微砂混じりシルト質粘土

第4図 SK 111西壁 (S = 1/20)



第5図 遺構平面図 ($S = 1/50$)

SD 121

調査区南半を占める東西方向の直線的な溝で、北肩を検出した。規模は検出長約1.5m・幅55cm以上・深さ約30cmを測る。底部のレベルは東部が低い。断面逆台形を呈し、埋土は暗灰色細砂混じり粘質シルトで、上部には第6層が落ち込んでいる。下部は第8層の砂層を掘り込んでおり、この部分の第8層上部は鉄分の浸透により明褐色を呈し固く締まっている。

遺物は古墳時代後期の須恵器・土師器が出土しており、須恵器杯身(9・10)を図化した。10は口径14.4cmを測り、底部内面には同心円タタキが多数認められ、底部外側にはヘラ記号を施している。出土須恵器は6世紀後半を中心とするものである。

SP 121

調査区北東角で検出した。規模は東西30cm以上・南北20cm以上・深さ約10cmを測る浅いビットである。断面皿状を呈し、埋土はSD 121と同様、暗灰色細砂混じり粘質シルトである。遺物は出土していない。

〈2区〉

a. 基本層序と出土遺物

1区との距離は約15mであり、層序はほぼ同様の状況であるが、固く締まる整地層は認められなかった。第3層の粘土層は『上部水成層』の下層部と捉えられる。瓦器碗片が出土している。

標高約9.6mを測る第4層上面が第1次面で、土坑1基（SK 211）・溝1条（SD 211）を検出した。標高約9.4mの第5層上面が第2次面で、溝1条（SD 221）・ピット1個（SP 221）を検出した。また『下部水成層』は、当区ではシルト～細砂の互層状を呈し、上層の第6層が1区の第8層にある。

b. 検出遺構と出土遺物

SK 211

調査区南部に位置し、南は調査区外に続いている。検出部分の平面形は長方形に近く、規模は南北50cm以上・東西約40cm・深さ約22cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は褐色疊～細砂混じり粘土である。時期不明の上師器・須恵器片が出土している。

SD 211

調査区北部に位置する東西方向の溝で、南肩を検出した。規模は検出長約1.4m・幅36cm以上・深さ約30cmを測る。埋土はSK 211と同様、褐色疊～細砂混じり粘土である。古墳時代後期頃の土器が出土している。

SD 221

北西～南東方向の溝で、規模は検出長約1.3m・幅約60cm・深さ約20cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は暗灰青色粗砂～疊混じり粘土で、これは第4層が落ち込んだものである。なお内部では幅が広がっており、当溝に接続する溝が存在する可能性がある。古墳時代後期の土師器・須恵器（11）が出土している。

SP 221

調査区北部に位置し、南部を検出した。規模は南北22cm以上・東西42cm・深さ約36cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は上から暗褐灰色粗砂混じり粘質シルト・暗灰色疊～微砂混じり粘質シルト・褐色疊混じり粘質シルトである。堆積状況からみて柱穴と考えられる。遺物は古墳時代後期の上師器・須恵器（12）が出土している。

〈3区〉

a. 基本層序と出土遺物

第4層・第5層のシルト層は、『上部水成層』の下層部分と捉えられる。『下部水成層』は微砂層となっている。当区からは遺構・遺物は検出されなかった。

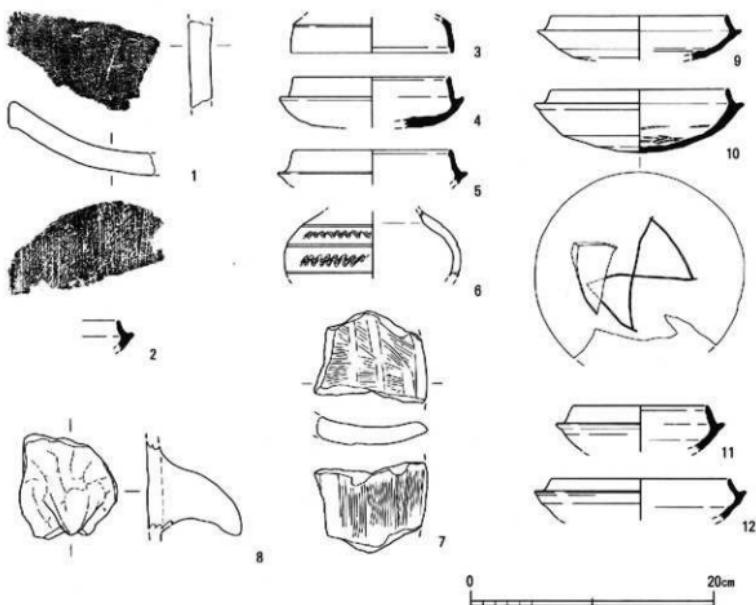
〈4区〉

a. 基本層序と出土遺物

第4層～第9層にはマンガンが含まれており、当地は水田城の可能性があるが、平面的に畦畔等は検出されなかった。第10層～第12層の粘土層については、『上部水成層』の下層部と捉えられるが明確ではない。『下部水成層』は1区と同様に疊混じり粗砂層である。第6層・第10層・第13層の上面で精査を実施したが、遺構は検出されなかった。遺物は第5層から古墳時代後期頃の須恵器高杯脚部片が1点出土しているのみである。



第6図 SP 221西壁 (S = 1/20)



第7図 出土遺物 (S = 1/4)

3. まとめ

今回の調査では、周辺の調査成果と同様に、古墳時代後期及び中世の遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ1箱を数える。

西部の1区・2区では古墳時代後期・中世頃の遺構面が良好に遺存しており、溝・土坑等の集落遺構が検出された。古墳時代後期では、2区東側の第37次調査地〈Na16〉においても、溝と考えられる遺構から多量の土器が出土している。中世頃の遺構面は調査地全域にみられる『上部水成層』に覆われ、また東部の3区・4区ではこれが深く及んでいるため古墳時代後期の遺構面は削平されているものと捉えられる。周辺の調査成果からみて、この『上部水成層』深部の流路は北西-南東方向で、4区付近を中心に50m程度の幅が想定される。

註

- 註1 高木真光 1981「7. 中田遺跡〈刑部地区〉」『昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報』八尾市教育委員会
 註2 古川晴久 1998「21. 中田遺跡第37次調査(NT97-37)」『平成9年度八尾市文化財調査研究会事業報告』財團法人八尾市文化財調査研究会



1区 第1次面（東から）



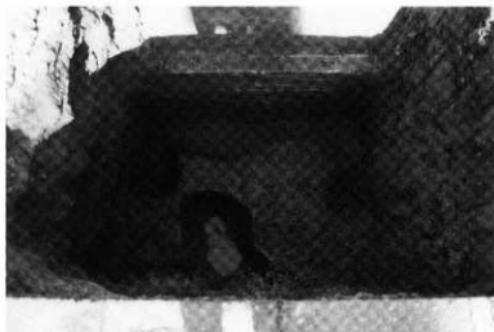
1区 第2次面（東から）



3区 第6層上面（西から）



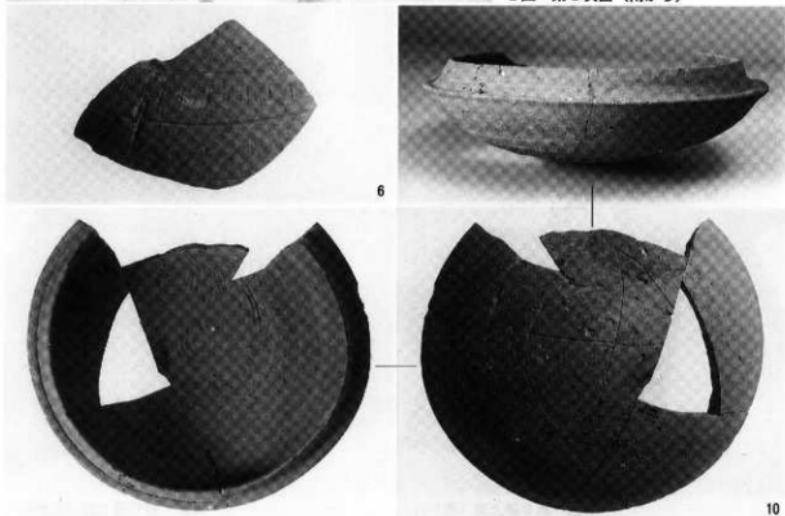
4区 第13層上面（北から）



2区 第1次面（南から）



2区 第2次面（南から）



6

10

XIII 中田遺跡第41次調査 (N T 97-41)

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市中田2丁目地内で実施した公共下水道（9-121工区）工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する中田遺跡第41次調査（NT97-41）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋482-2号 平成9年11月5日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成10年2月4日から2月26日（実働3日）にかけて、高萩千秋を担当者として実施した。調査面積は約12m²を測る。なお、調査においては八田雅美・中村百合・市森千恵子が参加した。
1. 本書に関わる業務は、図面レイアウト・トレースー高萩が行った。
1. 本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

1.はじめ	113
2.調査概要	114
1) 調査の方法と経過	114
2) 基本層序	114
3) 検出遺構と出土遺物	114
3.まとめ	115

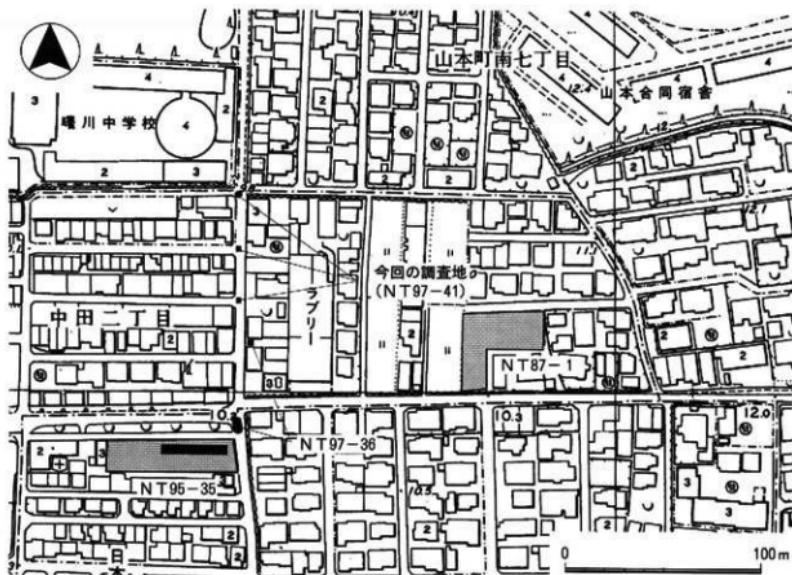
XIII 中田遺跡第41次調査 (NT97-41)

1. はじめに

中田遺跡は、八尾市のはば中央に位置し、現在の行政区画では中田1～5丁目、刑部1～4丁目、八尾木北1～6丁目の範囲にある。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地する。同一沖積地上では西に矢作遺跡、南に東弓削遺跡、北に小阪合遺跡が接している。

当遺跡は、昭和45年の区画整理事業の際発見された遺跡で、以後、中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター・大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により断続的に発掘調査が実施され、弥生時代前期から近世に至る複合遺跡であることが確認されている。特にこれらの調査成果では古墳時代前期の時期を中心としたものが遺跡全般で検出される。

今回の調査地は中田遺跡範囲の北東部付近にあたる。周辺では当調査区南側の道路上で、当調査研究会による公共下水道工事に伴う発掘調査 (NT97-36) を実施し、弥生時代後期の壺棺を検出している。さらにその周辺では第1図に示すように数次の発掘調査を実施しており、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物が検出されている。



第1図 調査位置図及び周辺図 (S = 1/2500)

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事に伴うもので、当調査研究会が中田遺跡内で行った第41次調査にあたる。調査区は人孔（マンホール設置）掘削工事により破壊される部分3箇所を対象に調査を実施した。規模は 1.8×1.4 mの方形2箇所と径2mの円形1箇所である。区名は北から第1区（No.8）・第2区（No.7）・第3区（No.6）と呼称した。

調査に際しては、現表土（T.P.+10.6m）下1.5m前後までを機械掘削した後、以下1.0m前後については簡易矢板を打ち付け、機械掘削による掘削を実施し、構造・遺物の検出に努めた。その結果、現地表下約1.5m前後は既往埋設工事により削平されており、すべて埋め土であった。それより以下工事掘削深度までの土層の堆積状況を確認した。なお、北側の第1区については隣接の住宅との関連によりケコム工法（PIT工法といわれる掘削工法で、筒状の鋼鉄枠を掘削地点に備え付け、その内側の土を重機で掘削しながら鋼鉄枠を落としていく工法）の掘削により、上げ土の確認だけにとどまった。

2) 基本層序

基本層序は第2区・第3区の堆積土層である。

第1層 盛土。層厚1.5~1.6m。既往埋設工事（ガス・水道など）の際に埋められた土層である。上面の標高はT.P.+10.3m前後である。

第2層 青灰色粘土I。層厚0.5m前後。第3区のみ堆積する土層である。

第3層 青灰色シルト。層厚0.2~0.4m。第2区では厚く堆積する。

第4層 青灰色粘土II。層厚0.4~0.5m。第3区のみ堆積する土層である。

第5層 淡灰色細砂。層厚1.0m以上。

3) 検出遺構・出土遺物

第1区（No.8）

北部に位置する調査区である。この調査はケコム工法の掘削方法により、上げ土を見る程度の確認しかできない調査であった。上げ土の確認を行ったが、遺物はなかった。



第2図 調査区位置図

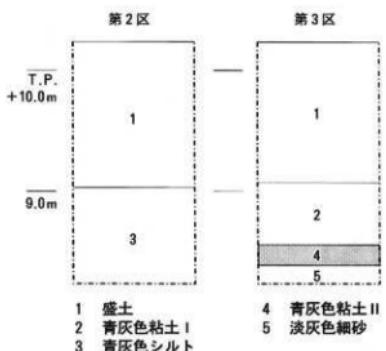
第2区 (No.7)

第1区より南へ約18mのところにある中央に位置する調査区である。現地表下約1.6m前後までは埋設工事の際の埋め土である。以下の土層はシルト～細砂層となる層であるが、埋め土の直下より湧水が著しく正確な堆積状況は掴むことができなかった。

第3区 (No.6)

第2調査区より約18mのところにある南側の調査区である。現地表下約1.5m前後までは第2区で検出した埋設工事による埋め土である。以下の土層は青灰色粘土Iが約50cm前後、青灰色シルトが約20cm前後、青灰色粘土層IIが約20cm前後である。工事掘削基底面では細砂層がみられた。その層より激しく湧水が吹き出した。

第3図 基本層序柱状図



3.まとめ

今回の調査では、遺構・遺物の検出はなかった。調査区南部で検出している弥生時代後期～古墳時代前期の地層（ベース面）は既往埋設工事の際に削平されていた。当調査区から南へ約100mの下水道工事に伴う第36次調査（NT97-36）で弥生時代後期の大型の壺の底部片を出土している。詳細は不明であるが壺棺の可能性がある遺構と思われる。また、第36次調査の西側で実施した共同住宅建設に伴う第31次調査（NT95-31）でも同時期の遺構を検出している。さらに遺跡は異なるが北部へ約200mの小阪合遺跡第28次調査（KS94-28）で弥生時代後期の方形周溝墓・壺棺等を検出している。これらの調査で当調査地周辺が弥生時代後期の墓域内の範囲に入るものと思われる。

古墳時代前期以降については、当調査区から西へ約140mの第14次調査（NT92-14）で集落遺構が検出されている。

註

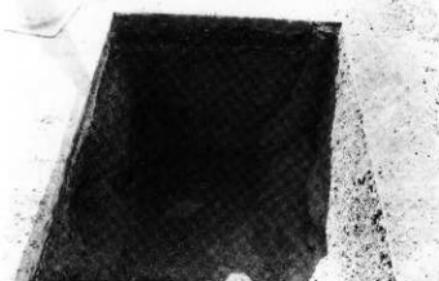
- 註1 西村公助 1998「20. 中田遺跡第36次調査」『平成9年度 八尾市文化財調査研究会事業報告』
八尾市文化財調査研究会報告
- 註2 同 註1掲載
- 註3 原田昌則 1998「中田遺跡」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告60』
八尾市文化財調査研究会報告
- 註4 成海佳子 1995「12. 小阪合遺跡第28次調査（KS94-28）」『平成6年度 八尾市文化財調査研究会事業報告』
八尾市文化財調査研究会報告
- 註5 岡田清一 1993「中田遺跡（NT92-12）第12次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』
八尾市文化財調査研究会報告39 八尾市文化財調査研究会



第1区（東から）



第2区（南から）



第3区（南から）



第3区 下層
(南から)

XIV 八尾寺内町遺跡第2次調査（Y C97-2）

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市本町2丁目149番地1で実施した共同住宅建設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する八尾寺内町遺跡第2次調査(YC97-2)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第埋99-4号 平成9年5月15日付)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が東洋生花株式会社から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成9年5月26日～6月3日(実働7日)にかけて、岡田清一を担当者として実施した。 調査面積は104m²を測る。なお、現地調査にあたっては、朝田要・垣内洋平・岸田靖子・辻野優子が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測および図面トレースー辻野、遺物写真撮影ー岡田が行った。
1. 本書の執筆・編集は岡田が行った。
1. 本書で使用した土色の表示は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」によるものである。

本　文　目　次

1	はじめ	117
2	調査概要	118
1)	調査の方法と経過	118
2)	基本層序	118
3)	検出遺構と出土遺物	120
3	まとめ	124

XIV 八尾寺内町遺跡第2次調査 (YC97-2)

1. はじめに

八尾寺内町遺跡は、八尾市の北西部に位置する弥生時代中期～近世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、本町2～5丁目一帯の南北0.5km・東西0.3kmがその範囲とされている。地理的には、旧大和川の主流であった長瀬川左岸に形成された沖積地に位置する。周辺の遺跡には、北に宮町遺跡、東に東郷遺跡、南に成法寺遺跡、西に久宝寺遺跡が隣接する。

遺跡名に由来する八尾寺内町は、久宝寺寺内町の住人であった森本七郎兵衛ら17人と慈願寺が久宝寺寺内町を出て、慶長十一年（1606年）に長瀬川沿いの荒野の地を開拓したことから始まるもので、その翌年、東本願寺の掛所として大信寺御坊が建立され、やがて大信寺を中心とする寺内町が形成された。森本七郎兵衛らが久宝寺寺内町を出る要因となったのは、同村の土豪であった安井氏の独裁的な特権行為にある。安井氏は天正九年（1581年）に織田信長から制札を受け、久宝寺屋敷一邑の支配権を付与された後、独裁的かつ專制的な支配権を握った。これに反抗した森本七郎兵衛らは幕府に安井氏排斥を訴えたが、安井氏の勝訴となつた為、彼らは新たな自主権を獲得するために久宝寺寺内町を出て現在地を求めたのである。したがって、八尾寺内町成立の経緯については、久宝寺寺内町のように久宝寺門徒集団によって寺家が一切の支配権をもつて形成された寺内町とは性格を異にする。

八尾寺内町は、久宝寺寺内町とともにその成立以後現在に至るまで景観保存が計られており、大阪府下においても有数の優れた町並みを残すところである。したがって、遺跡として認識はされているものの、現在まで大規模な開発もなく、発掘調査を通じた寺内町形成以前の考古学的知見については未知なる部分が多いのが現状である。現在、遺跡内における発掘調査は八尾市教育委員会が実施している小規模な構造確認調査を除くと、平成7年度に当研究会が実施した第1次調査 (YC95-1) の1件だけである。しかしながら、この調査によって中世の生産域に伴う水路（溝）および水田面と弥生時代後期末～古墳時代初頭にかけての集落遺構といった生活面が重層的に検出され、寺内町形成以前の遺跡の実態の一部を垣間見ることができた。

ここで、周辺における既往の調査をみると、当地から南東へ約150m地点で成法寺遺跡第9次 (SH91-9)、東へ約400m地点で東郷遺跡第37次 (TG91-37) の2件の調査がいずれも平成3年度に当研究会によって実施されている。前者の成法寺遺跡では、弥生時代後期～古墳時代後期に至る土坑・小穴・溝といった集落遺構が検出されている。後者の東郷遺跡では、古墳時代前期の溝、古墳時代後期～飛鳥時代にかけての水田および河川、平安時代後期の井戸、

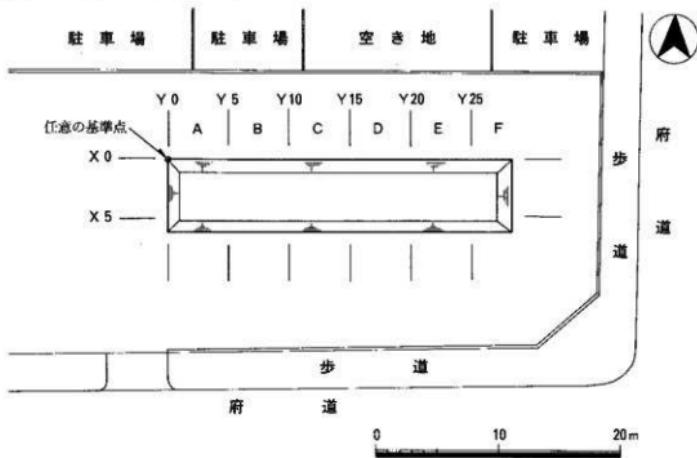


近世初頭の八尾寺内町内の町家の敷地を区画する溝（堀）が検出されている。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅建設工事に伴うもので、当研究会が当遺跡内で実施する第2次調査となる。調査区の規模は、建物基礎工事によって破壊される南北長4m×東西長26mの面積104m²を測る。調査区の地区割りは、調査区北西部に任意の基準点を設置し、西から5m区間で区切り、各地点表示を西からA区～F区と呼称した（第2図参照）。掘削方法は八尾市教育委員会の遺構確認調査資料を基に、現地表（T.P.+9.2m前後）から約1.3m間に堆積する盛土（客土）・旧耕土を重機によって排除した後、調査期間の制約からそれより約1.4m間の中・近世に相当する土層については、屑理に従って遺構・遺物の確認を行いながら重機と人力を併用して掘削した。以上、現地表から約2.7m間の土層を掘削した後は、今回の調査対象となる0.5m前後の土層を人力によって掘削・精査し、遺構・遺物の検出に努めた。なお、調査終了後は調査区中央部分において東西長19m・南北長1mの規模でトレーニチを設定し、最終調査面からさらに1m前後の深さまで掘削して下層確認を実施した。



第2図 調査区地区割り図 (S = 1/400)

2) 基本層序

先述したように今回の調査では、期間の制約から現地表下約1.3～2.7m (T.P.+6.5～7.9m)間に堆積する中・近世に相当する第2～8層については重機と人力を併用しながら、言わば立会的な調査となった。結果的には八尾市教育委員会の遺構確認調査内容と同じく、該期の遺物は僅かながら採集できたものの、生活面は確認されなかった。第2～8層のうちで上器片が多く含まれるのは第2層であるが、図化不能な碎片が多くを占め、土質は疊んで硬く締まっており、その状況から本層は人為的に敷設された整地土である可能性が強い。第3層は河川による洪

水層、第4～8層については土器片が僅少みられるだけの水成による堆積層で、いずれも生活面は確認できず、沼沢地としての土地景観が想起される。

第9層は鎌倉時代中期頃に比定される洪水層で、調査区の東半部だけにみられる。その下層となる第10層上面で同時期に埋没したと見られる水田面を検出したが、本水田の構築層となる第10層も調査区の東半部にしか存在しない。これに対し調査区の西半部では、第10層と同レベルで古墳時代前期（布留式期古～中段階）の遺物を包含する第11層を確認した。その下層の第12層上面で同時期の溝2条（SD-1・SD-2）を検出した。これら第9～12層の層位（切り合い）関係から、古墳時代前期の生活面が後世の鎌倉時代中期頃に水田耕作に伴い、攪拌・削平されたことが窺われる。

以下、下層調査も含め確認できた第0～16層の計17層について列記する。

第0層：盛土（客土）・攪乱層。層厚1.0m前後。

第1層：5B2/1青黒色シルト。層厚10～20cm。旧耕作土にあたる。

第2層：7.5Y3/1オリーブ黒色砂礫混じりシルト。層厚20～40cm。近世～近代の染付をはじめとする陶磁器類や瓦片が含まれる。

第3層：5Y7/2灰白色極細粒砂。層厚30～40cm。周辺における既往の調査結果から、層位的に旧大和川付け替え以前の洪水層と思われる。斜行ラミナが顕著に見られ、水流の激しさが窺える。層内には、古墳時代後期末～中世にかけての遺物が含まれる。

第4層：10B G5/1青灰色砂礫混じりシルト。層厚10～40cm。

第5層：10B G5/1青灰色シルト。層厚20cm前後。水成作用による堆積層と見られ、比較的淘汰良好である。

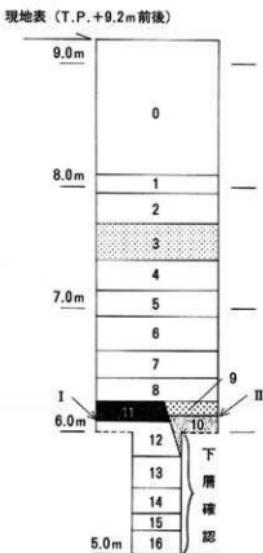
第6層：2.5G Y6/1オリーブ灰色砂礫混じりシルト。層厚20～40cm。

第7層：5B4/1暗青灰色粘土質シルト。層厚10～40cm。

第8層：7.5G Y6/1緑灰色シルト質粘土。層厚10～25cm。調査区の東半部だけに認められる。

第9層：N8/灰白色極細粒砂。層厚10～40cm。調査区東半部だけに見られる洪水層で、含まれる瓦器碗の形態から鎌倉時代中期頃に相当するものと考えられる。被圧水が豊富である。調査区中央付近で、西部から統一古墳時代前期（布留式期古相）に比定される第11層を切る。

第10層：N6/灰色砂礫混じり粘土。層厚20～50cm。第9層の洪水砂によって埋没した水田耕土である。上面で、人および偶蹄目の足跡、さらに畦畔を検出した。上



第0層	盛土（客土）・攪乱層
第1層	5B2/1青黒色シルト
第2層	7.5Y3/1オリーブ黒色砂礫混じりシルト
第3層	5Y7/2灰白色極細粒砂
第4層	10B G5/1青灰色砂礫混じりシルト
第5層	10B G5/1青灰色シルト
第6層	2.5G Y6/1オリーブ灰色砂礫混じりシルト
第7層	5B4/1暗青灰色粘土質シルト
第8層	7.5G Y6/1緑灰色シルト質粘土
第9層	N8/灰白色極細粒砂
第10層	N6/灰色砂礫混じり粘土
第11層	N3/茶褐色粘土質シルト
第12層	7.5G Y4/1緑細灰色粘土質シルト
第13層	7.5G Y4/1緑細灰色シルト
第14層	5GY2/1暗オリーブ灰色粘土
第15層	5GY2/1オリーブ灰色シルト質粘土
第16層	5GY4/1暗オリーブ灰色砂礫シルト
第17層	II - 古墳時代前期（布留式期古相）遺構検出面
	II - 古墳時代中期の水田遺構検出面

第3図 基本層序模式図 (S : 1/40)

面はT.P.+6.2m前後を測る。第9層同様に調査区の東半部だけに認められ、古墳時代前期（布留式期古～中段階）の遺物包含層および生活面を切る。本層内部には、僅少ながらも鎌倉時代前期～中期に比定される瓦器椀の破片が含まれる。上半部は砂礫を含む割合が高くなるが、これは水田形成の際の攪拌作用によるものと思われる。

第11層：N3/暗灰色粘土質シルト。層厚10～20cm。古墳時代前期（布留式期古～中段階）の遺物包含層である。前述したように調査区西半部に認められ、東半部は鎌倉時代中期頃の洪水層および水田造構によって削平を受ける。

第12層：7.5G Y4/1暗緑灰色粘土質シルト。層厚20～30cm。本層上面で古墳時代前期（布留式期古～中段階）に比定される溝2条（SD-1・SD-2）を検出した。上面はT.P.+6.1m前後を測る。調査区東半部は鎌倉時代中期頃に形成された水田造構によって削平を受ける。

＜以下、下層確認＞

第13層：7.5G Y4/1暗緑灰色シルト。層厚20～40cm。植物遺体が混在する。

第14層：5G Y4/1暗オリーブ灰色粘土。層厚20cm前後。植物遺体が混在する。

第15層：5G Y2/1オリーブ黒色シルト質粘土。層厚5～10cm。植物腐蝕による暗色帶構成層である。

第16層：5G Y4/1暗オリーブ灰色砂質シルト。層厚20cm以上。

3) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表から約3.1m前後（T.P.+6.1m前後）で鎌倉時代中期頃に比定される水田面（畦畔・足跡）と古墳時代前期（布留式期古相）に比定される溝2条（SD-1・SD-2）を検出した。出土遺物量は包含層も含め、全体でコンテナバット2箱分である。以下、各遺構について記す。

＜鎌倉時代中期＞

水田面（畦畔・足跡）

D-E区間の東西長約6m間で、水田造構を明示する人および偶蹄目の足跡群と畦畔1条を検出した。畦畔の北部および東部は調査区外に至っており、全容は不明であるが、検出状況から北西～南東方向に伸びるものと推察される。確認できる畦畔の規模は、東西長3.7m・南北幅0.5～1.1m・高さ0.07～0.1mを測る。水田は、覆われる洪水砂層（第9層）内に含まれる瓦器椀の破片から、鎌倉時代中期頃に埋没したものと考えられる。人の足跡については、方向性を見出せる規則的なものは確認できなかった。また、本調査区の東側で調査前に実施された八尾市教育委員会による遺構確認調査では、標高値および層位的に該期の水田耕土に対応する堆積土層と土器片が検出されており、水田造構がさらに東域に拡がるものと推定される。

＜古墳時代前期（布留式期古相）＞

溝（SD）

SD-1

B-D区間で検出した。北東～南西方向に伸びる溝である。規模は幅1.2～1.5m・深さ0.2m前後を測る。溝内では途中で断面が逆凸形を呈する2段の掘形となり、埋土は上層が暗灰色シルト質粘土、2段目となる下層が暗緑灰色粘土質シルトの2層構造となる。溝内からは布留式期古～

中段階に比定される壺・甕の破片が出土した。

SD-2

C区内東部で検出した。南北方向に伸びる溝で、北部でSD-1と合流する。規模は幅1.0m前後・深さ0.01~0.2mを測る。埋土は暗灰色シルト質粘土の單一層である。断面の形状は逆台形を呈する。溝内からは布留式期古~中段階に比定される甕・高杯の破片が出土した。

<遺構に伴わない出土遺物>

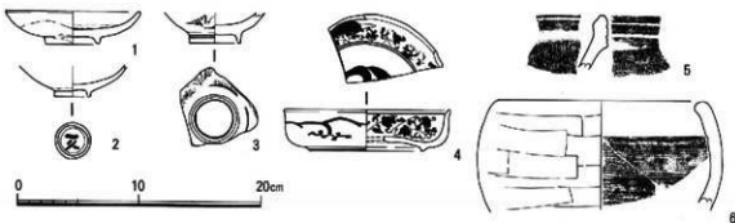
今回の調査で出土した遺物の中で図化できたものは、遺構内からのものではなく、第2層・第3層・第11層の遺物包含層からのものだけである。以下、層別に各遺物について記述する。

第2層出土遺物

本層内で図化できた遺物は、磁器皿(1)・京焼碗(2)・肥前磁器染付碗(3)・肥前磁器染付鉢(4)・備前焼播鉢(5)・瓦質風が(6)の陶磁器類6点である。

(1)の白磁皿は、見込み部分の蛇目釉剥ぎと底部の無釉部分の状況から、重ね焼きの痕跡が明瞭に窺える。(2)の京焼碗は、乳白色の精良な胎土をもち、透明釉が掛けられる。高台は露胎させ、端部を面取りする。高台内に「久」の墨書がある。(3)の染付碗は、高台の外面に2条、内面に1条の園線が巡る。文様の発色はにぶい。(4)の染付鉢の底部は、蛇目凹形高台を呈するものと思われる。文様の発色はにぶい。(5)の播鉢は、段をもって直立する口縁部で、端部内面が肥厚する。(6)は、内傾して丸味をもつ口縁端部を有する。

以上図化できた6点の遺物は、概ね16世紀後半~18世紀にかけての所産と考えられる。



第5図 第2層出土遺物実測図 (S = 1/4)

第3層出土遺物

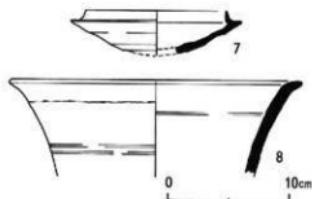
本層内で図化できた遺物は、須恵器杯身(7)と須恵器壺(8)の2点である。

(7)は、立ち上がりが短く内傾し、偏平な底部を呈する。陶邑編年II型式6段階頃に比定されよう。

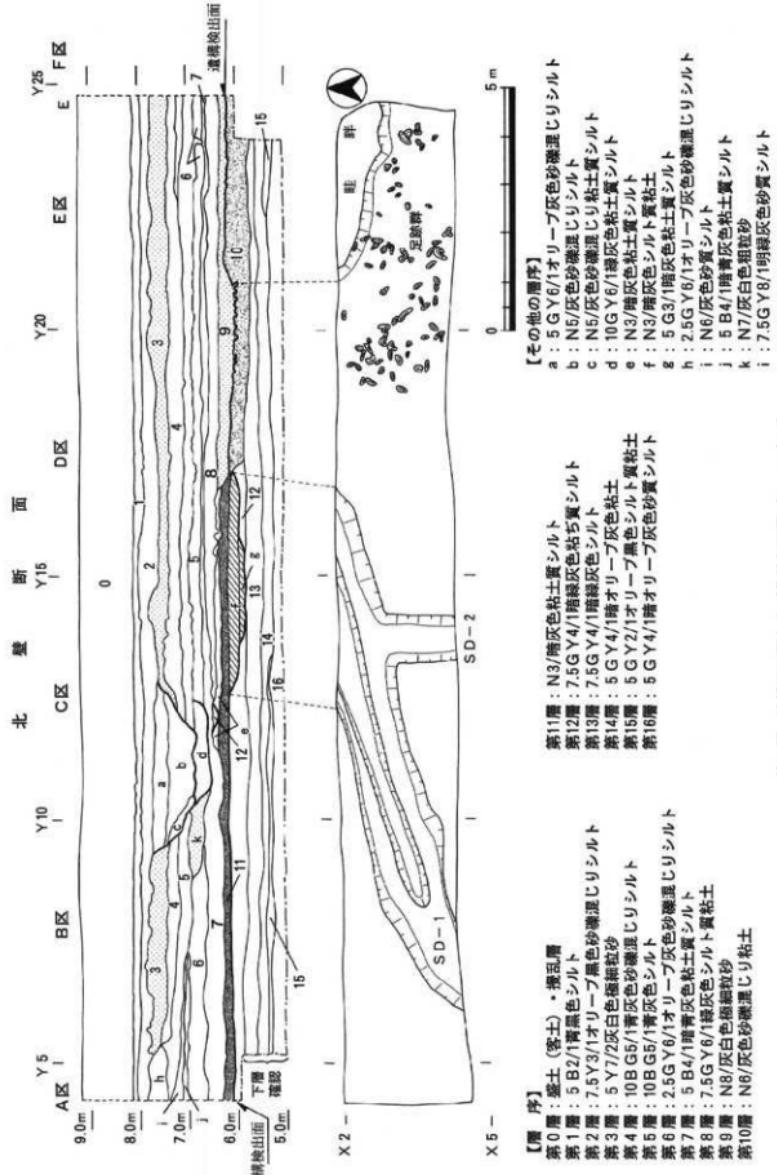
(8)については(7)と同時期頃の古墳時代後期末頃所産の広口壺の口縁部と推定されるが、詳細な時期は不明である。

第11層出土遺物

本層内で図化できた遺物は、小型丸底壺(9)・直口壺(10)・甕2点(11・12)・小型器台(13)・高杯5点(14~18)の10点である。

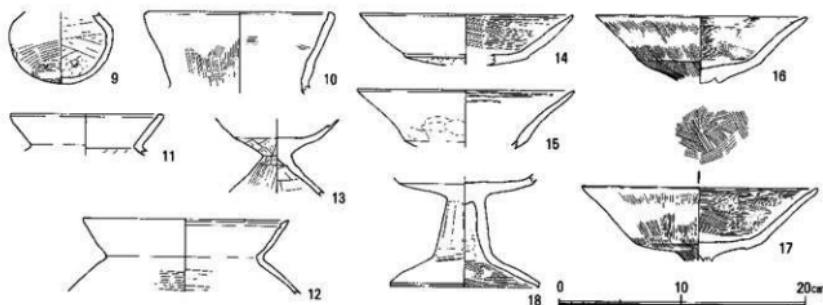


第6図 第3層出土遺物実測図 (S = 1/4)



(9) は球形を呈する体部のみ残存するもので、体部下半には3mm前後の穿孔が1箇所見られる。10は人型壺に類するもので、内傾する口縁端部を有する。(11・12)の2点の甕については、口縁部が直線的に伸びるタイプ(11)に対し、(12)は内弯気味に伸びるタイプとなる。また、口縁端部については(11)が丸味をもち、(12)は内傾する面を有する。(13)は、口縁部および裾底部が欠損しているが、受部が浅い皿状を呈する器台と思われる。(14~17)の杯部のみ復原図化できた高杯4点は、いずれも杯部外面に段もしくは明瞭な稜をなすもので、(15)を除いてすべてハケメ調整される。なかでも(17)は、杯底部内面に周密にハケメが施される。これらの高杯の脚部に相当するのが(18)で、同類のものである。

以上の図化できた10点の古式土師器類は、古墳時代前期の範疇の布留式期古~中段階に比定されるものである。



第7図 第11層出土遺物実測図 (S = 1/4)

出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	法量 口 径 (cm) 底 盤 高 (cm)	國 整 手 法	色 調	胎 土	残 存	備 考
1 四 1	皿 (白磁) 第2層	11.0 2.7 高台径 4.4 高台高 0.6	見込み部分一蛇の目剥剥ぎ 体部下部~底部一露胎(高台の一部に釉付着)	灰白色、灰色 断: 棕褐色	密	1/2	
2 四 2	碗 (白磁) 第2層	— 高台径 2.9 高台高 0.6	高台端 露胎	内: 浅黄色 外: 乳白色 断: 乳白色	密	底部のみ	京焼 高台内 に「火」 の墨書き
3 四 3	碗 (磁器) 第2層	— 高台径 4.2 高台高 0.9	外面一青花染付	乳白色 断: 灰白色	密	底部のみ	肥前系
4 四 4	鉢 (磁器) 第2層	13.4 3.4 高台径 9.2 高台高 0.4	内外面一青花染付 蛇の目剥高台	内: ない灰白色 外: ない灰白色・ 難色 断: 灰色	密	1/5	肥前系
5 四 5	擂钵 (陶器) 第2層	— —	口縁部一ヨコナデ・外面に2条の凹線 体部一内ナデ、内推目	暗紫灰色 断: 灰色・紫灰色	長少	口縁部 破片	偏前系
6 四 6	瓶 (瓦質) 第2層	17.0	内面一ヨコナデ・ハケメ (5本/cm) 外面一ヨコナデ・ハラナデ	内: 灰色 外: 暗灰色	密	口縁部 ~体部 1/4	
7 四 7	杯身 (須恵器) 第3層	11.4	内面一回転ナデ 外面一底部は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	灰色	長少	1/6	
8 四 8	広口盆 (須恵器) 第3層	23.8	口縁部一内ナデ 外面一底部は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ・2条の凸線を有す (不明脱)、内ナデ一回転ナデ、1条の凸線を有す	内: 灰色 外: 棕褐色	長少	口縁部 破片	

器物番号 測定番号	器種 出土地点	法盤 口径 (cm)	法盤 口徑 (cm)	調査・手法	色調	胎土	残存 状況	備考
9 四	小型丸底盆 (古式上部器) 第11層	— 体部最大径 8.5	— —	体部—〈内面〉ヘラケズリ・ユビオサエ・〈外〉 ナデ・ハケメ (4本/cm)・体部ト位に径3mm前 後の穿孔あり	乳白色	石(0.6)長・(0.5) 少・チ(1)少・赤 (1)少	体部のみ	
10 四	広口甕 (古式上部器) 第11層	14.6 —	—	口縁部内外面—ヨコナテ後ハケメ (4本/cm)	乳白色	石(1)層・長(1)多 葉(2)・赤(1)少	口縁部 1/2	外面に 黒斑
11 五	壺 (古式上部器) 第11層	12.5 —	—	口縁部—内外面ともヨコナテ 肩部—〈内〉ヘラケズリ・〈外〉不明	明褐色	石(1)層・長(2)多 葉(1)少・角(0.5) 僅・赤(1)少	口縁部 2/3	外面に 縫
12 五	同 上	16.8 —	—	口縁部—内外面ともヨコナテ 肩部—〈内〉ヘラケズリ・〈外〉ハケメ (5本/cm)	にっぽい黄褐色	長(1)多・空(0.5) 僅・赤(0.5)僅	口縁部 1/4	
13 五	小腰器合 (古式上部器) 第11層	— —	—	受部—〈内〉不明・〈外〉上半部は不明、下半部 はヘラケズリ 脚部—〈内〉ユビオサエ・ハラナデ・〈外〉ヘラ ケズリ・ハラナデ	にっぽい黄褐色	長(1)多・空(1) 少・角(0.6)少・チ (2)少・赤(0.6) 僅	受底部 上半部	
14 五	高杯 (古式上部器) 第11層	17.2 —	—	杯口縁部—〈内〉ハケメ (6本/cm)・〈外〉ヨコ ナデ 杯底部—〈内〉ナデ・〈外〉ユビオサエ・ナデ・ 杯口縁部と杯底部の境目に1条の接合痕を有す	にっぽい黄褐色	石(2)層・長(4) 葉(2)層・角(2)層・ チ(2)少・赤(1)僅	杯部 1/2	外面に 黒斑
15 五	同 上	17.6 —	—	杯口縁部—〈内〉ヘラミガキ・他は底底により調 整不明・〈外〉ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	褐色	石(0.6)僅・長 (0.6)僅・赤(0.6) 僅	口縁部 1/5	
16 五	同 上	17.0 —	—	杯口縁部—〈内〉ハケメ (6~7本/cm)・〈外〉 ハケメ (3本/cm) 杯底部—〈内〉ナデ・〈外〉ハケメ (3本/cm)	淡黄色	石(2)層・長(5) 葉(1)層・チ(3) 少(1)僅	杯部 1/4	外面に 黒斑
17 五	同 上	19.0 —	—	杯口縁部—内外面ともハケメ (7~10本/cm) 杯底部—〈内〉ハケメ (5本/cm)・〈外〉ハケメ (7~10本/cm)	灰黄色	長(4)少・空(1)層・ 角(1)層・チ(3)少・ 赤(0.5)僅	杯部 1/2	
18 同 上 補足	— — 12.0	— — —	— — —	杯底部—〈内〉ハケメ (4本/cm)・〈外〉ナデ 柱状底部—〈内〉ユビオサエ・ナデ・〈外〉ヘラナデ 蓋部—〈内〉ハケメ (4本/cm)・〈外〉ヘラナデ ナ・ナ	にっぽい褐色	石(1)層・長(2) 葉(1)層・角(1)層・ チ(3)少	杯底部 1/2 ～脚部	杯底部 外面に 黒斑

3.まとめ

今回の調査では、ほぼ同一面において古墳時代前期と鎌倉時代中期に比定される遺構面を検出した。以下、2時期の遺構面について、近隣の調査結果と照合しながら概観する。

〔古墳時代前期〕

該期に対応する調査では、当地から東へ約50m地点で昭和56年度に八尾市教育委員会が実施した小学校のプール建設に伴う調査（東郷遺跡内）があり、ここでは布留式期の土器が多く検出されている。次に当地から北へ約80m地点で平成3年度に当研究会によって実施された市庁舎建設に伴う東郷遺跡第37次調査（西区）で、布留式期新梢の溝3条が検出されている。この溝3条のうち1条からは壺・甕・高杯はじめ小型器台・小型鉢・鼓形器台といった多器種に及ぶ土器類がコンテナパットにして約6箱分出土している。この2件の調査で検出された多量の土器類は、付近に集落の存在を示唆するものであり、本調査で検出した2条の溝が有機的に関連するものと思われる。

〔鎌倉時代中期〕

近隣の調査で今回の遺構と対応できるのは現在のところ、当地から西へ約200m地点で平成7年度に当研究会によって実施された当遺跡第1次調査だけである。この調査では、T.P.+6.8mのところで河川の氾濫に見舞われ埋没した今回と同時期の水田跡が見つかっている。ここで双方の水田を見舞った洪水層についてみると、当遺跡の東方の八尾小学校付近（東郷遺跡）や南東に位置する市立教育センター付近（成法寺遺跡）における数件の調査で層位のおよび出土した遺物からもほぼ同時期、さらに推し進めると同一河川によってもたらされた可能性もあり、かなり広範囲に及んで氾濫したことが想定される。いずれにせよ、本調査で見つかった水田とともに該期

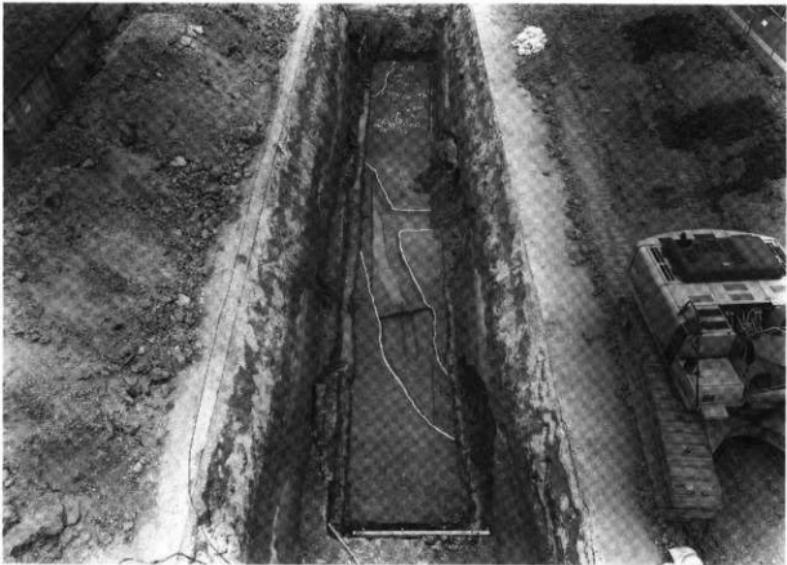
の条里制を究明する上で興味深い資料であり、今後周辺における調査の累積に期待される。

以上2時期の遺構について概観したが、双方の関係については結果的に古墳時代の遺構面が中世の水田形成の際に削除されたことが層位関係をはじめ、水田耕土内に含まれる古墳時代前期の土器片から看取できる。また、2時間期間を埋めるべく古墳時代中期へ平安時代の遺構面および遺物が確認されないことについては、該期に相当する土層が沼沢地や氾濫原を示唆する状況から、当地が生活を営むには不向きな土地条件であったことが推察される。くわえて、周辺における既往の調査についてもこの時間期間の生活面は確認されていない。また、旧寺内町（近世）に関連する遺構および遺物については、該期に相当する遺物片が洪水層と思われる第3層内に流れ込みによって僅かに含まれていただけで、生活面を確認することができなかった。第3層の上下間の層相からはいわゆる氾濫原的な土地景観が想定され、中世に生産域としての役割を終えた後は、生活基盤を置くにふさわしい所ではなかったように感じられる。考古学的調査以外に旧八尾寺内町の町割りを知る方法としては、唯一当時の寺内村を描寫した「河内国若江郡八尾郷絵図」（京都大学文学部地理学教室蔵）がある。この絵図によれば、寺内村の周囲に掘り巡らされた堀（環濠）のうち、村域の南端部を示す東西に伸びる堀（環濠）が、当地点から北へ約70mのところ（現在の市役所西別館南側の市道付近）となっている。こういった検証から、寺内町期における当地の環境としては、慶長11年（1606年）に森本七郎衛等の開拓によって八尾寺内町が形成される以前から荒蕪の地のままであったことが推察される。

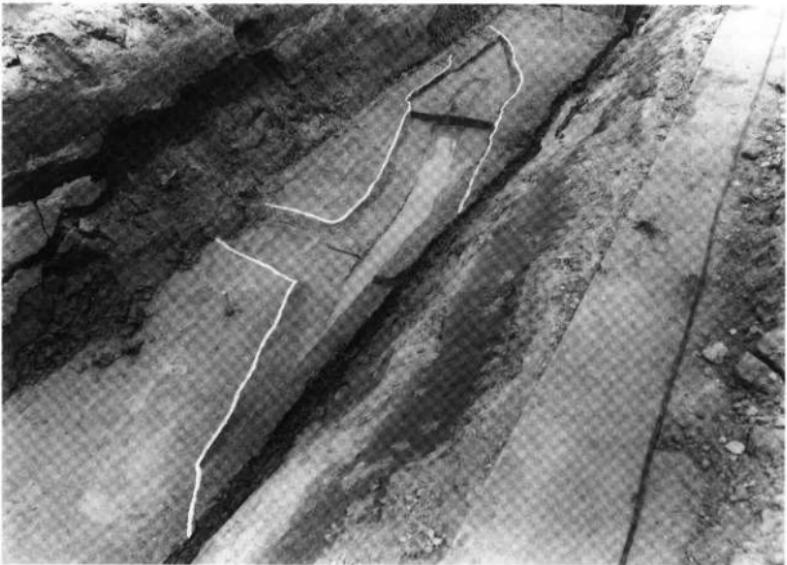
<参考文献>

- ・中村 浩 1980「第6章 和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑III 大阪府文化財調査報告書第30輯』助大阪文化財センター
- ・櫻橋利光 1981『大阪市・市史双書1 八尾・柏原の歴史』松嶺社
- ・寺川史朗・金光正裕 1987「第3節 古墳時代 1. 古墳時代前期（1）出土十器の分類」『久宝寺北（その1～3）近畿自動車道大河～次出線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』助大阪文化財センター
- ・沢井浩一 1988「<歴史編>第三章 第六節 二、八尾寺内町の形成と発展」『八尾市史（前近代）本文編』八尾市史編集委員会 八尾市役所
- ・櫻井敏雄・大草一憲 1988「四、（一）『八尾郷絵図』にみられる寺内町の構成」『寺内町の基本計画に関する研究 一久宝寺寺内と八尾寺内を中心として』八尾市教育委員会
- ・森 規 1992「第V章第5節 16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」「難波宮址の研究 第九」助大阪市文化財協会
- ・原田昌則 1992「9. 東郷遺跡第37次調査（TG91-37）」「平成3年度助八尾市文化財調査研究会事業報告」助八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 1993「II 久宝寺遺跡第1次調査（KH84-1）」「助八尾市文化財調査研究会報告37」助八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助 1993「III 成法寺遺跡第9次調査（SH91-9）」「八尾市文化財調査研究会報告39」「助八尾市文化財調査研究会

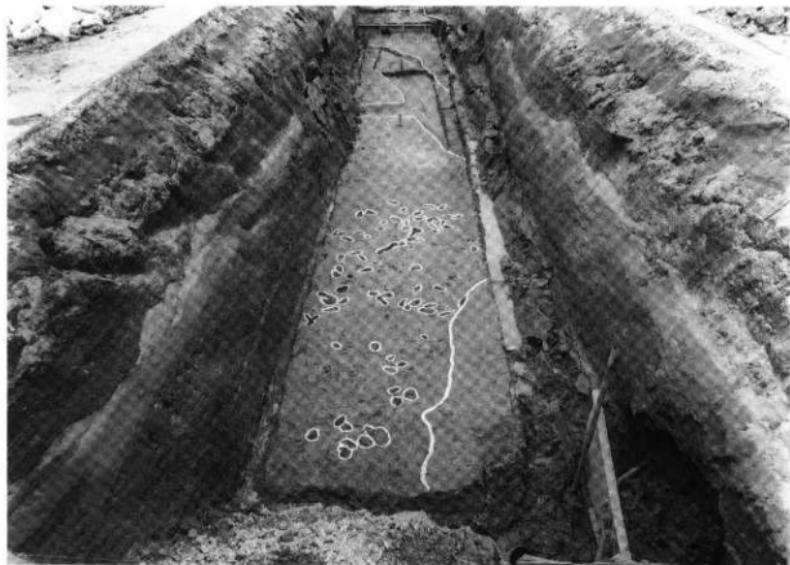
※注 東郷遺跡第37次調査（TG91-37）は、南北に伸びる府道（近鉄八尾停車場線）を挟んで西区と東区の2箇所の調査区で実施され、西区については位置的に八尾寺内町遺跡の範囲で、寺内町の東端部にあたる。因みに、本文中に記述した近世初頭の屋敷の敷地を区画する溝（堀）は、西区内で確認された。



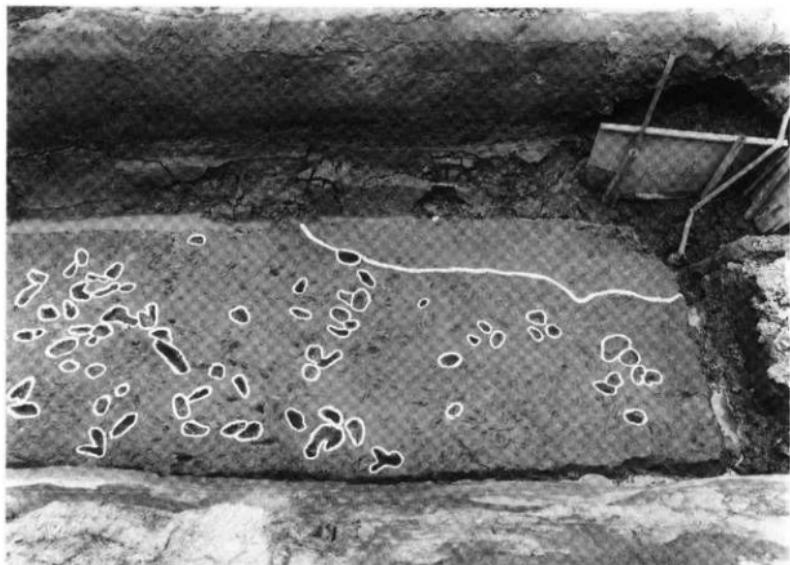
調査面全景（西から）



SD-1（左）・SD-2（右）（北東から）



調査面全景（東から）



畦畔〈右上〉および足跡（南から）



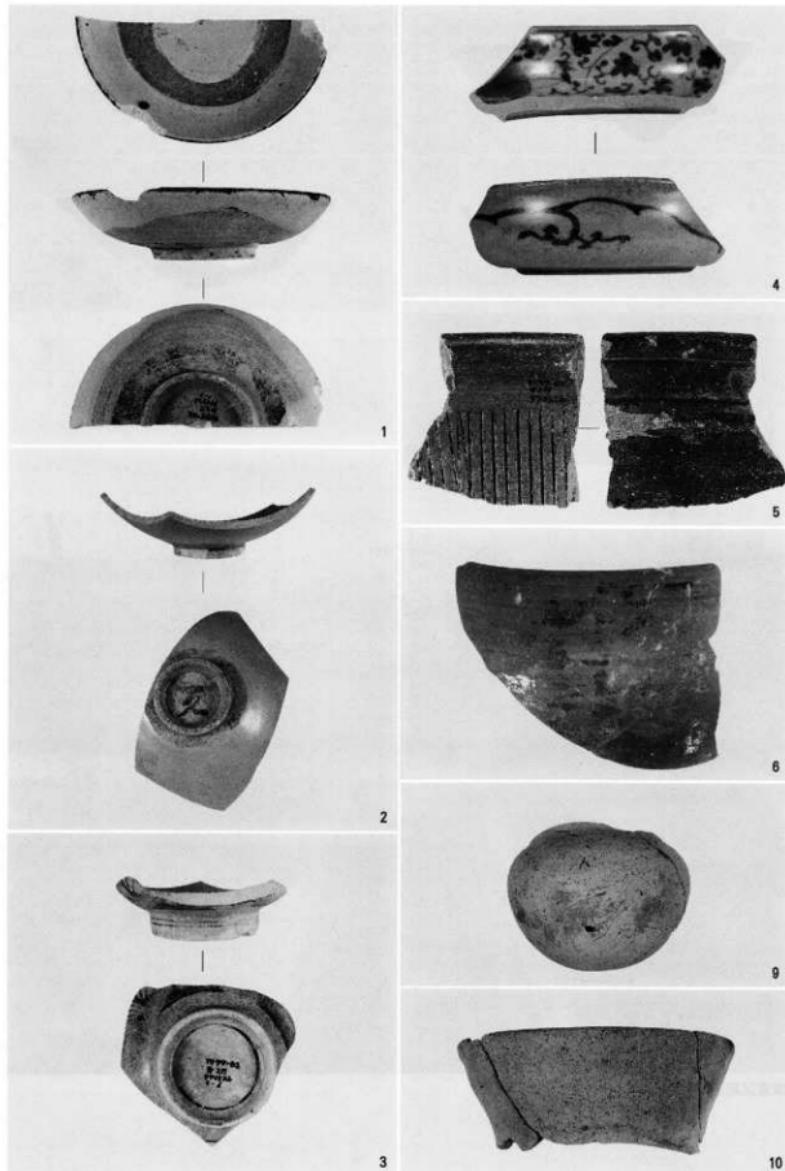
SD-1 埋土観察用セクション
(西から)



下層確認トレンチ (南西から)

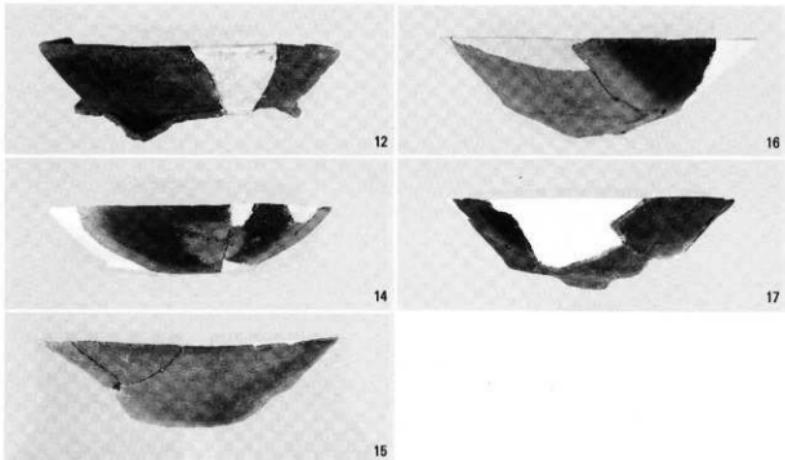


調査風景 (東から)



第2層（1～6）・第11層（9・10）出土遺物

図版五



第11層出土遺物



調査区周辺（西から）

XIV 山賀遺跡第7次調査（YMG97-7）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市新家町2丁目に所在する公共下水道（8-41工区）工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する山賀遺跡第7次調査（YMG97-7）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋第60号 平成9年4月16日）に基づき、財團法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成8年6月26日～10月21日（実働10日）にかけて、古川晴久を担当者として実施した。調査面積は、約40m²である。現地調査においては、朝田 要・坂田典彦・中西明美・村井俊子が参加した。
1. 内業整理は上記以外に中前和代が参加し、平成10年10月に終了した。
1. 土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖（1996）』による。
1. 本書の執筆・編集は、古川が行った。

本 文 目 次

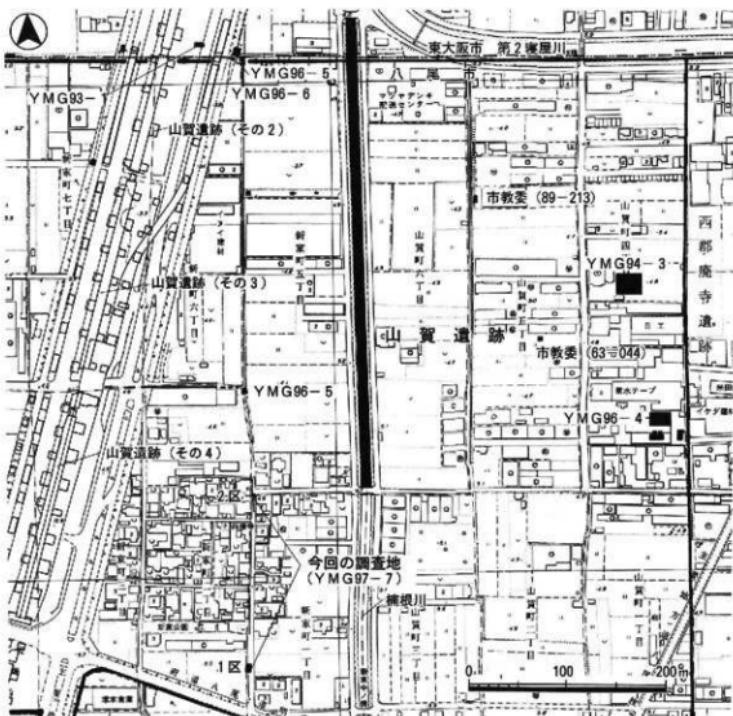
1. はじめに	131
2. 調査概要	132
1) 調査の方法と経過	132
2) 屢序	133
3) 検出遺構と出土遺物	135
3. まとめ	136

XV 山賀遺跡第7次調査（YMG97-7）

1. はじめに

山賀遺跡は、八尾市の北西端に位置し、現在の行政区画では八尾市新家町1～8丁目・山賀町1～6丁目それに東大阪市若江西新町5丁目・若江南町4～5丁目にかけて所在する（第1図）。地理的には、河内平野のはば中央に位置し、旧大和川の本流であった長瀬川と玉串川の度重なる氾濫などに伴い形成された沖積平野に立地する。山賀遺跡の北に若江北遺跡（東大阪市）・北西に上小阪遺跡（東大阪市）・東に西郡庵寺遺跡（八尾市）・南に友井東遺跡（東大阪市～八尾市）が所在する。

山賀遺跡は、昭和46年（1971）に東大阪市域で実施された楠根川改修工事に際して、多量の弥生土器（前期が主体）・石器などが出土したことによって周知の遺跡となった。その後、楠根川



第1図 調査地周辺図 (S = 1/5000)

改修工事・下水道工事・校舎築造工事などに伴う発掘調査が瓜生堂遺跡調査会・東大阪市教育委員会・八尾市教育委員会によって実施されたが、山賀遺跡の実態は不明な点が多くかった。しかし、近畿自動車道天理～吹田線築造に伴う大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター（現大阪府文化財調査研究センター）によって実施された大規模な調査の結果、縄文時代後期～近世にわたる複合遺跡として認識された。特に、弥生時代前期（中段階）において検出された自然堤防の緩斜面に構築された多重の環濠・水田は、河内平野中央部における稲作導入期の最古の集落遺跡として注目される。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事（新家排水区8-41工区）の発進立坑・中間ライナープレート設置に伴うもので、当調査研究会が山賀遺跡内で実施した第7次調査にあたる。調査地は、2箇所（立坑・ライナー）である。立坑（1区）は、東西5.2m×南北6.8mの平面形が長方形である。ライナー（2区）は、直径2.4mの平面形が円形である。（第2図）調査面積は、2箇所合わせて約40m²である。（第2図）

掘削方法は、八尾市教育委員会作成の埋蔵文化財調査指示書に基づき、現地表（<1区>T.P.+4.95m・<2区>T.P.+4.3m）から1.6m前後を機械掘削、それ以下1.5m前後について



第2図 1区調査位置図 (S = 1/800)



第3図 2区調査位置図 (S = 1/800)

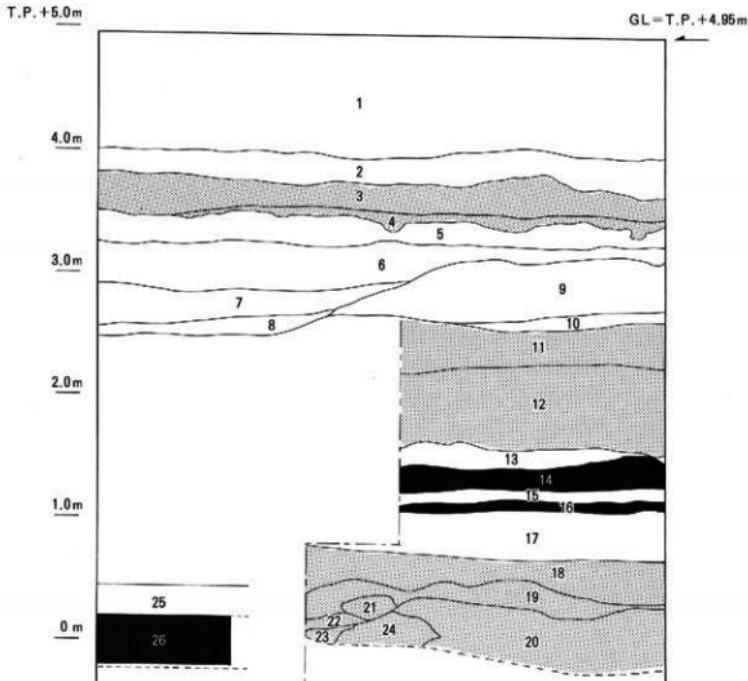
て人力掘削を主に行い、状況に応じて機械掘削を併用した。土層断面観察のため西壁(1区)・南壁(2区)を主に残しながら掘削を実施した。2箇所ともT.P.+0m前後まで遺構・遺物の検出に努めた。調査期間は、平成9年6月26日～10月21日の実働10日間である。

調査の結果、1区の最終調査面において時期不明の自然河川を検出した。

2) 層序

『1区』(第3図)

現地表(T.P.+4.95m)下から約1.0mで旧の耕作上層(第2層)を確認した。1区のすぐ東では現在でも水田が営まれている(現水田面T.P.+4.8m前後)。第3・4層は、洪水層とみられる砂層で最大0.45mほど堆積している。第5層上面は、断面観察において所々に足跡状の凹みが見られる。【友井東(その2)】の土層を参考にすれば、古墳時代後期の水田面の可能性がある。第11・12層は、主に粗砂が調査地全体にわたって1m前後堆積しており、土層状況から比較的急激な流水環境にあったと思われるところとみられる。第14層・第16層・第26層において、中河内地域一帯で確認されている黒色粘土(第1黒色粘土・第2黒色粘土・第3黒色粘土)層を確認した。



第4図 1区・土層断面図(西壁)(S=1/40)

以下、1区における層名の一覧を挙げる。

- 第1層 現代盛土。層厚0.1m前後。
- 第2層 7.5YR5/1褐色灰色砂質シルト。層厚0.2~0.35m。(旧耕土)
- 第3層 2.5Y7/1灰白色砂。層厚0.15~0.3m。(洪水層)
- 第4層 7.5YR5/8明褐色砂質シルト。層厚0.1m前後。(洪水層)
- 第5層 5 G5/1緑灰色粘土。層厚0.05~0.25m。(水田面?)
- 第6層 2.5Y5/1黄灰色粘土。層厚最大0.3m。
- 第7層 5 Y5/1灰色粘土。層厚最大0.3m。
- 第8層 10YR6/6明黃褐色粗粒砂。層厚0.1m前後。
- 第9層 10G5/1緑灰色粘質シルト。層厚0.5m前後。
- 第10層 7.5Y7/1灰白色シルト。層厚0.1m。
- 第11層 7.5Y6/1灰色粗粒砂~7.5Y7/1灰白色シルト。層厚0.3~0.45m。(洪水層)
- 第12層 2.5GY5/1オリーブ灰色粗粒砂。層厚0.6~0.7m。(洪水層)
- 第13層 5 G6/1緑灰色粘土。層厚約0.2m。
- 第14層 N4/0灰色粘土。層厚0.15~0.2m。(第1黒色粘土)
- 第15層 10GY6/1緑灰色粘土。層厚0.1m前後。
- 第16層 N3/0暗灰色粘土。層厚0.1m前後。(第2黒色粘土)
- 第17層 7.5GY5/1シルト。層厚0.4m。
- 第18層 7.5Y7/1~5 Y7/1灰白色シルト。層厚0.15~0.4m。
- 第19層 N6/0灰色シルト。層厚0.2m前後。植物遺体を少量含む。
- 第20層 5 Y7/1灰白色~N6/0灰色中粒砂~粗粒砂。層厚0.5m以上。
- 第21層 7.5Y7/3浅黄色~2.5Y7/1灰白色シルト。層厚最大0.2m。
- 第22層 N6/0灰色~7.5Y7/1灰白色シルト。層厚0.1m前後。
- 第23層 10Y7/1灰白色シルト。層厚0.1m前後。
- 第24層 2.5Y7/4浅黄色~2.5Y7/1灰白色シルト。層厚0.3m以上。
- 第25層 7.5GY5/1緑灰色粘土。層厚0.25m。
- 第26層 N4/0灰色粘土。層厚0.4m以上。(第3黒色粘土)

<2区> (第4図)

現地表 (T.P.+4.3m前後) 下から0.75mでIHの耕作土層 (第2層) に至る。第3・4層は、しまりの弱い細粒砂層で約0.6mほど堆積している。第5層～第10層は、粘質シルトを主体としている。第11層は、黒色粘土層である。第13層から下部にかけては、シルト層が主体で植物遺体を多く含み、東西方向にはしるラミナが一部確認できた。

以下、2区における土層断面図と層名の一覧を挙げる。

第1層 現代盛土。層厚0.9m。

第2層 5B5/1青灰色粘質シルト。層厚0.25m前後。一部分グライ化している。(旧耕土) GL=T.P.+4.35m

第3層 2.5Y6/4に近い黄色砂質シルト。層厚0.3~0.4m。

第4層 2.5Y7/1灰白色細粒砂。層厚0.35m前後。

第5層 10G6/1緑灰色粘土。層厚0.2m前後。

第6層 10G5/1緑灰色粘質シルト。層厚0.18~0.3m。

第7層 5PB5/1青灰色粘質シルト。層厚0.2~0.35m。

第8層 5B6/1青灰色粘質シルト。層厚0.2~0.25m。

第9層 5B5/1青灰色粘質シルト。層厚0.2~0.25m。

第10層 10G6/1緑灰色シルト。層厚0.2m前後。

第11層 N4/0灰色粘土。層厚0.2m前後。(黒色粘土層)

第12層 N3/0暗灰色粘土。層厚0.25~0.3m。(黒色粘土層?)

第13層 10G6/1緑灰色シルト。層厚0.05~0.25m。 第5図 2区土層断面図(北壁) (S=1/40)

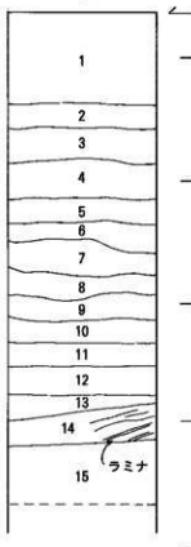
第14層 N7/0灰白色シルト。層厚0.25~0.4m。

第15層 10Y7/1灰白色シルト。層厚0.65m以上。

3) 検出遺構と出土遺物

<1区>

現地表から約5.0m (T.P.±0m) 前後において、第25層を切り込んで西から東に落ちていく時期不明の河川を1条確認した。最終調査面で平面的に精査を試みたが、湧水が多く部分的な検出になった(第5図)。河川内埋土(第18層～第24層)には、自然木(直径0.15m)などを多く含んでいるが時期を特定できる遺物は出土していない。【山賀(その4)】・【友井東(その2)】の調査においても同じ高さ(T.P.±0m前後)で縄文時代晚期頃埋没したとみられる河川が確認されている。



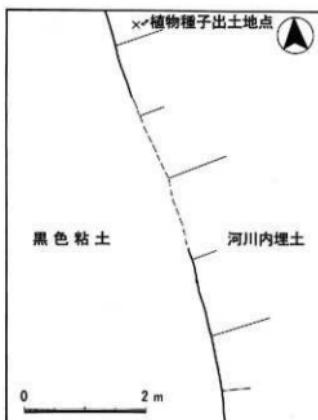
1区における出土遺物は、極少量である。
機械掘削時に国産陶磁器1点、第12層下部より桃の種子1点が出土した。

《2区》

遺構は、検出されなかった。遺物は、機械掘削時に国産陶磁器2点が出土したのみである。



写真1 調査風景 (南から)



第6図 1区最終調査面・平断面図 ($S = 1/80$)

3.まとめ

今回の調査地は、山賀遺跡範囲の南端付近に位置し、弥生時代前期を中心とする集落の拡がりは確認できなかった。しかし、1区において自然河川を検出するなど当地における活発な沖積の状況が確認できた。

参考文献

- ・生田維道他 1983『山賀(その4)』大阪府教育委員会・御大阪文化財センター
- ・赤木克視・村上年生編 1987 『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』大阪府教育委員会・御大阪文化財センター



1区調査地周辺 (G L -1.0m) 西から



1区西壁土層（北半）(東から)



1区西壁土層 (T.P. +4.0~2.5m) 東から



1区西壁土層 (T.P. +1.6~0.7m) 東から



1区西壁土層 (T.P. +0.7~-0.25m) 東から



1区河川検出状況（部分・T.P. -0.25m）北から



2区調査風景・南から



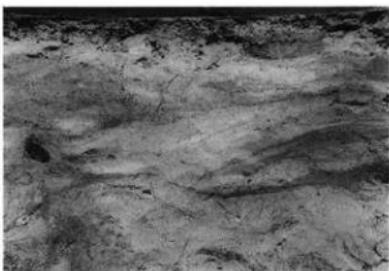
2区南壁土層 (T.P. +3.6~2.8m) 北から



2区南壁土層 (T.P. +3.0~2.2m) 北から



2区調査風景・北から



2区東壁土層 (T.P. +1.5~0.8m) 西から



2区楠根川・南より

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしんかざいちょうさけんきゅうかいほうくこ						
書名	財團法人 八尾市文化財調査研究会報告62						
副書名	I 藤原遺跡 (第25次調査) II 陸部遺跡 (第26次調査) III 鹿井遺跡 (第27次調査) IV 亀井遺跡 (第28次調査) V 小阪合遺跡 (第36次調査) VI 心合寺山古墳 (第2次調査) VII 志紀遺跡 (第4次調査) VIII 田井中道跡 (第16次調査) IX 竹西遺跡 (第8次調査) X 竹西遺跡 (第9次調査) XI 中田遺跡 (第39次調査) XII 山賀道跡 (第40次調査) XIII 中田遺跡 (第41次調査) XIV 八尾寺内町遺跡 (第2次調査) XV 山賀道跡 (第7次調査)						
巻次							
シリーズ名	財團法人 八尾市文化財調査研究会報告						
シリーズ番号	62						
編著者名	I・III・VI・XII・坪田貞一、II・IV・V・XIII・高秋千秋、VII・IX・占川晴久、VI・IX・X・成海佳子 XI・森本めぐみ、XII・岡田清一						
編集機関	財團法人 八尾市文化財調査研究会						
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58-2 TEL・FAX 0729-94-4700						
発行年月日	1999年3月31日						
所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 經	調 査 期 間	調 査 面 積 (m ²)	調 査 原 因
藤原遺跡 (第25次調査)	大阪府 八尾市 春日町2・3丁目地内	27212	34度 36分 50秒	135度 35分 40秒	19970408 ~ 19971110	116.0	公共下水道
藤原遺跡 (第26次調査)	大阪府 八尾市 太子堂1・2丁目地内	27212	34度 36分 51秒	135度 35分 15秒	19970421 ~ 19970801	16.0	公共下水道
藤原遺跡 (第27次調査)	大阪府 八尾市 春日町3・4丁目地内	27212	34度 36分 50秒	135度 35分 42秒	19970528 ~ 19971110	20.2	公共下水道
亀井遺跡 (第6次調査)	大阪府 八尾市 南 亀井町4丁目44-1-44-4-45-1	27212	34度 36分 22秒	135度 34分 52度	19971022 ~ 19971030	174.0	配送センター
小阪合遺跡 (第36次調査)	大阪府 八尾市 若草町地内	27212	34度 37分 51秒	135度 36分 51秒	19980209	12.0	公共下水道
心合寺山古墳 (第2次調査)	大阪府 八尾市 大竹5丁目地内	27212	34度 38分 09秒	135度 38分 35秒	19971104 ~ 19971113	50.0	堤体改修
志紀遺跡 (第4次調査)	大阪府 八尾市 志紀町42丁目地内	27212	34度 35分 52秒	135度 36分 36秒	19980213 ~ 19980310	32.51	公共下水道
田井中道跡 (第6次調査)	大阪府 八尾市 田井中4丁目地内	27212	34度 35分 51秒	135度 36分 29秒	19970424 ~ 19970501	7.0	公共下水道
竹西遺跡 (第8次調査)	大阪府 八尾市 竹渕東3・4丁目地内	27212	34度 36分 47秒	135度 34分 25秒	19971212 ~ 19980331	23.0	公共下水道
竹西遺跡 (第9次調査)	大阪府 八尾市 竹渕東1・4丁目地内	27212	34度 36分 52秒	135度 34分 24秒	19980112 ~ 19980206	8.0	公共下水道
中田遺跡 (第39次調査)	大阪府 八尾市 中田1丁目地内	27212	34度 36分 56秒	135度 36分 51秒	19971118 ~ 19971121	13.0	公共下水道

所取遺跡名	所 在 地	コ ード 市町村 遺跡 番号	北 緯 東 経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
中田遺跡 (第40次調査)	大阪府 八尾市 刑部3丁目地内	27212	34度36分32秒 37分15秒	19980109 ~ 19980114	16.0	公共下水道
中田遺跡 (第41次調査)	大阪府 八尾市 中田2丁目地内	27212	34度36分58秒 37分18秒	19980204 ~ 19980226	12.0	公共下水道
八尾市内町遺跡 (第2次調査)	大阪府 八尾市 本町2丁目149番地の1	27212	34度37分21秒 36分10秒	19970526 ~ 19970603	104.0	共同住宅
山賀遺跡 (第7次調査)	大阪府 八尾市 新家町2丁目地内	27212	34度38分31秒 36分03秒	19970626 ~ 19971021	40.0	公共下水道

所取遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
跡部遺跡 (第25次調査)	集落	弥生時代 古墳時代中期~後 期 奈良時代~平 安時代	溝5・土坑5 河川4	弥生土器 土師器・須恵器 輪式土器 瓦器・瓦	
跡部遺跡 (第26次調査)	集落	奈良時代以前 平安時代後期	河川	土師器・須恵器	
跡部遺跡 (第27次調査)	集落	弥生時代前期~ 中期 古墳時代前期	土坑1 溝1	弥生土器・石器 土師器・須恵器	
鬼井遺跡 (第6次調査)	生産域	奈良時代~平安時 代	溝1・落込み4	土器・須恵器 瓦器	
小阪合遺跡 (第36次調査)	集落	古墳時代以前 鎌倉時代 近世~現代	河川 井戸	瓦器・瓦	
心合寺山古墳 (第2次調査)	古墳	古墳時代中期 奈良時代~平安時 代 近世	石組み遺構	埴輪 土師器・須恵器 陶磁器・土管・瓦	
志紀遺跡 (第4次調査)	生産域	編文時代晚期 平安時代後期		繩文土器 土師器・瓦器	滋賀県IV期の深鉢の破片 が出土
田井中遺跡 (第16次調査)	集落	近世		土師器・瓦器 肥前系磁器	
竹測遺跡 (第8次調査)	集落	近世	水路	土師器・陶磁器 杭	
竹測遺跡 (第9次調査)	集落	古墳時代後期~平 安時代			
中田遺跡 (第39次調査)	集落	弥生時代後期~古 墳時代前期 鎌倉時代~宋朝時 代	小穴1・土坑1 河川	土師器・須恵器 瓦器・瓦	

所収遺跡名	種 別	主な時 代	主な遺 構	主な遺 物	特 記 事 項
中田遺跡 (第40次調査)	集落	古墳時代後期 鎌倉時代～室町時代	溝3・土坑3 小穴2	土師器・須恵器 瓦	
中田遺跡 (第41次調査)	墓域	弥生時代後期			周辺調査の成果から墓域の範囲に含まれる可能性が高い
八尾寺内町遺跡 (第2次調査)	集落	古墳時代前期 鎌倉時代～近世	水田遺構 溝2	土師器・須恵器・ 陶磁器	八尾寺内町に伴う遺構は検出されなかった
山賀遺跡 (第7次調査)	集落	調文時代後期～近世		陶磁器・桃の種	

八尾市文化財調査研究会報告62

- I 跡 部 遺 跡 (第25次調査)
- II 跡 部 遺 跡 (第26次調査)
- III 跡 部 遺 跡 (第27次調査)
- IV 亀 片 遺 跡 (第6次調査)
- V 小 脊 合 遺 跡 (第36次調査)
- VI 心合寺山古墳 (第2次調査)
- VII 志 紀 遺 跡 (第4次調査)
- VIII 田 井 中 遺 跡 (第16次調査)
- IX 竹 澄 遺 跡 (第8次調査)
- X 竹 澄 遺 跡 (第9次調査)
- XI 中 田 遺 跡 (第39次調査)
- XII 中 田 遺 跡 (第40次調査)
- XIII 中 田 遺 跡 (第41次調査)
- XIV 八 尾 市 内 町 遺 跡 (第2次調査)
- XV 山 賀 遺 跡 (第7次調査)

発 行 平成11年3月
編 集 財團法人 八尾市文化財調査研究会
大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2
〒581-0821 TEL. 0729-94-4700
印 刷 明新印刷株式会社

